秋田県文化財調査報告書第500集

小 勝 田 館 跡

―地方道路交付金事業（改築）一般県道大館能代空港西線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

２０１５・９

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

小勝田館跡（おがただてあと）

―地方道路交付金事業（改築）一般県道大館能代空港西線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

２０１５・９

秋田県教育委員会

SK44出土土器

序

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、住民の生活や経済活動、地域間の交流等を支える交通網の整備、とりわけ道路ネットワークの整備は、本県にとって重要な課題の一つです。県北地域においては、その一環に国道７号線の混雑緩和や大館能代空港へのアクセス向上を目的とした、一般県道大館能代空港西線の建設が行われています。

本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。本報告書は、地方道路交付金事業（改築）一般県道大館能代空港西線の建設に先立って、平成26年度に、北秋田市において実施した小勝田館跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代の土坑や平安時代の竪穴建物跡などがみつかり、縄文時代は墓域、平安時代は集落だったことがわかりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり御協力いただきました北秋田地域振興局建設部、北秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成27年９月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

例　　言

1　本書は、一般県道大館能代空港西線建設事業に伴い、平成26年度に発掘調査した北秋田市所在の小勝田館跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報等によって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2　調査要項

遺　　跡　　名　小勝田館跡(おがただてあと)
遺　跡　略　号　２ＯＧＴＤ
遺 跡 所 在 地　秋田県北秋田市脇神字館野22ほか
調　査　期　間　平成26年５月26日～11月７日
調　査　目　的　一般県道大館能代空港西線建設事業
調　査　面　積　11,000㎡
調 査 主 体 者　秋田県教育委員会
調 査 担 当 者　袴田　道郎(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事)
　　関向　昌之(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　学芸主事)
　　高橋　忠彦(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　文化財主査)
　　村上　義直(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　文化財主査　現副主幹)
　　山田　祐子(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　文化財主任)
総 務 担 当 者　鈴木菜穂子(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班　主査)
掘削作業管理業務　朝日建設（現場代理人　藤嶋一喜）
調 査 協 力 機 関　秋田県北秋田地域振興局建設部、北秋田市教育委員会

3　本書に使用した図は、秋田県北秋田地域振興局建設部提供の１／1,000工事用図面（第１図）、および国土交通省国土地理院発行の50,000分の１地形図『鷹巣』（第４図）である。

4　遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2005年版に拠った。

5　本書に使用した空中写真は、株式会社みどり光学社に委託したものである。

6　理化学的分析は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

7　水準測量・方眼杭設置業務は、有限会社ダイワ技術に委託した。

8　本書の執筆・編集分担は以下の通りである。
　第１章：村上、第２章：関向、第３章第１節：山田、第３章第２節：村上、第３章第３節：袴田・関向・高橋・村上、山田、第４章：株式会社加速器分析研究所、第５章：村上、編集：村上

9　発掘調査及び整理作業において秋田県北秋田地域振興局建設部ならびに北秋田市教育委員会から御援助・御協力をいただいた。また本報告書を作成するにあたりご指導・ご助言を賜った以下の方々に記して感謝申し上げます。
　榎本剛治　中澤寛将　平山明寿（五十音順）

凡　　例

1　遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。これらの中には精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

ＳＩ　竪穴建物跡　　ＳＢ　掘立柱建物跡　　ＳＫ　土　坑　　ＳＫＦ　フラスコ状土坑
ＳＫＴ　陥し穴状遺構　　ＳＤ　溝状遺構　　ＳＲ　土器埋設遺構　　ＳＮ　焼土遺構
ＳＸＱ　石器製作跡　　ＳＸ　遺物集中地点　　ＳＸＰ　特殊ピット　　ＳＫＰ　柱穴様ピット

2　土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に算用数字を遺構埋土層に使用した。

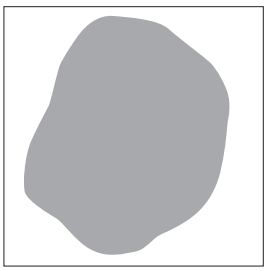
3　土中に含まれる含有物の大きさ、量については、以下の区分を用いた。

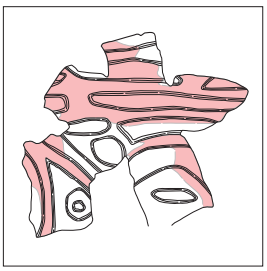
大きさ：極小（径１～10㎜）、小（径11～50㎜）、中（径51～100㎜）、大（径101㎜～）
含有量：微量（５％未満）、少量（６～15％）、中量（16～30％）、多量（31～50％）

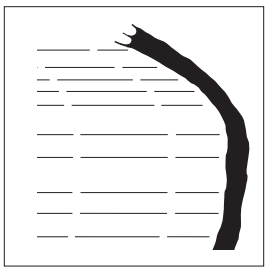
4　遺構図及び遺物図の縮尺は、以下のとおりである。

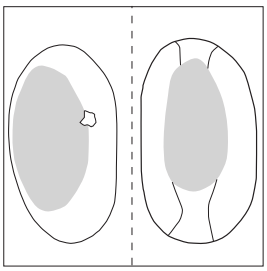
遺　構
竪穴建物跡・掘立柱建物跡：１／６０　　カマド部分：１／４０　　焼土遺構：１／４０
土坑・フラスコ状土坑・陥し穴状遺構：１／２０、１／４０　　溝跡：１／４０
土器埋設遺構：１／２０　　石器製作跡・遺物集中地点：１／４０
特殊ピット：１／４０　　柱穴様ピット：１／４０
遺　物
土器：１／３、土製品：１／２、石器・石製品：１／２、１／３

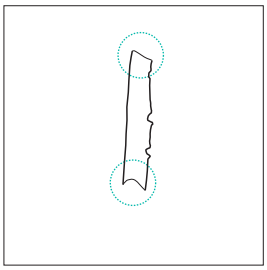
5　挿図中にある土器の調整等の表現、挿図中の網かけ・着色部分は、特に断りのない限り以下の通りとなる。

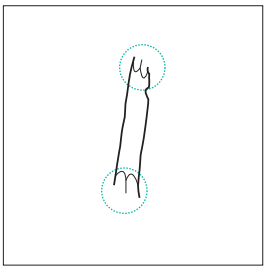

焼土


顔料塗布部分


須恵器断面


磨石作業面


接合痕がわかるもの


接合痕が不明瞭なもの

目　　次

巻頭図版
序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ i
例　　言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ii
凡　　例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ iii
目　　次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ iv
挿図目次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ v
表 目 次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ v
図版目次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ vi

第１章　調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第１節　調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第３節　整理作業の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第２章　遺跡の位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　第１節　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　第２節　歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第３章　調査の方法と成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　第１節　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　　１　発掘調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　　２　整理作業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
　第２節　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
　第３節　検出遺構と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　　１　検出遺構と出土遺物の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　　２　縄文時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
　　３　平安時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
　　４　時期不明 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
　　５　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第４章　理化学的分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
　第１節　自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
　第２節　^{14}Ｃ年代測定（ＡＭＳ法）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第５章　総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93

図版

報告書抄録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135

挿　図　目　次

第１図　調査区範囲図・・・・・・・・・・・４
第２図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・５
第３図　遺跡周辺の地形区分図・・・・・・５
第４図　小勝田館跡と周辺遺跡位置図・・・７
第５図　基本土層図（１～７）の位置・・・11
第６図　基本土層断面図（１）・・・・・・・13
第７図　基本土層断面図（２）・・・・・・・14
第８図　基本土層断面図（３）・・・・・・・15
第９図　基本土層断面図（４）・・・・・・・16
第10図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・19
第11図　ＳＫ03・05・25・31ａ・31ｂ・・・27
第12図　ＳＫ35・41・43・44・45・・・・・28
第13図　ＳＫ46・47・18、ＳＤ26、
　　ＳＫＦ27・30・・・・・・・・・・・29
第14図　ＳＫＦ36、ＳＫＴ15・19・・・・・30
第15図　ＳＲ06・11・13・・・・・・・・・31
第16図　ＳＸ07・08・39・ＳＸＱ34・・・・32
第17図　遺構出土遺物(SK03・05・41・43・44)
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
第18図　遺構出土遺物(SK45・46、SKF27・36)
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第19図　遺構出土遺物(SR06・11・13、
　　SX07・08・39）・・・・・・・・・・35
第20図　ＳＩ01、ＳＢ40・・・・・・・・・43
第21図　ＳＩ01・・・・・・・・・・・・・・44
第22図　ＳＩ01カマド・柱穴・・・・・・・45
第23図　ＳＩ01柱穴・土坑、ＳＩ02・・・・46
第24図　ＳＩ23・・・・・・・・・・・・・・47
第25図　ＳＩ23柱穴・土坑・溝・カマド・・48
第26図　ＳＢ40・・・・・・・・・・・・・・49
第27図　ＳＫ10・37、ＳＸＰ24・71・73・97、
　　ＳＫＰ70・・・・・・・・・・・・・50
第28図　遺構出土遺物(SI01)・・・・・・・51
第29図　遺構出土遺物(SI02・23、SK10・37)
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
第30図　ＳＮ04、ＳＫＰ01～109 ・・・・・53
第31図　遺構外出土遺物(縄文時代１)・・・58
第32図　遺構外出土遺物(縄文時代２)・・・59
第33図　遺構外出土遺物(縄文時代３)・・・60
第34図　遺構外出土遺物(縄文時代４)・・・61
第35図　遺構外出土遺物(縄文時代５)・・・62
第36図　遺構外出土遺物(縄文時代６)・・・63
第37図　遺構外出土遺物(縄文時代７)・・・64
第38図　遺構外出土遺物(縄文時代８)・・・65
第39図　遺構外出土遺物(縄文時代９)・・・66
第40図　遺構外出土遺物(縄文時代10)・・・67
第41図　遺構外出土遺物(縄文時代11)・・・68
第42図　遺構外出土遺物(縄文時代12)・・・69
第43図　遺構外出土遺物(平安時代)・・・・70
第44図　火山ガラス・軽石屈折率・・・・・82
第45図　テフラ・・・・・・・・・・・・・・85
第46図　炭化材・炭化種実・・・・・・・・86
第47図　暦年較正年代グラフ(１)・・・・・90
第48図　暦年較正年代グラフ(２)・・・・・91
第49図　小勝田館跡と伊勢堂岱遺跡・・・・94
第50図　主柱穴配置の比較・・・・・・・・97
第51図　各遺跡出土遺物・・・・・・・・・97

表　目　次

第１表　小勝田館跡周辺遺跡一覧・・・・・８
第２表　柱穴様ピット一覧表・・・・・・・54
第３表　土器観察表(１)・・・・・・・・・71
第４表　土器観察表(２)・・・・・・・・・72
第５表　土器観察表(３)・・・・・・・・・73
第６表　土器観察表(４)・・・・・・・・・74
第７表　土器観察表(５)・・・・・・・・・75
第８表　土器観察表(６)・・・・・・・・・76
第９表　土製品観察表・・・・・・・・・・77
第10表　石器・石製品一覧表・・・・・・・78
第11表　テフラ分析結果・・・・・・・・・81
第12表　樹種同定結果・・・・・・・・・・83
第13表　種実同定結果・・・・・・・・・・83
第14表　放射性炭素年代測定結果(δ^{13}C補正
　　値)・・・・・・・・・・・・・・・・89
第15表　放射性炭素年代測定結果(δ^{13}C補正値
　　暦年較正用^{14}C年代、較正年代）・・
　　・・・・・・・・・・・・・・・・・90

図　版　目　次

巻頭図版　ＳＫ44出土土器
図版１　１　小勝田館跡と周辺の様子（北西→南東）
　　２　小勝田館跡と周辺の様子（南西→北東）
図版２　１　掘り下げ前の状況（東→西）
　　２　調査終了状況（北西→南東）
図版３　１　ＳＫ03断面（南西→北東）
　　２　ＳＫ03完掘（南西→北東）
　　３　ＳＫ05断面（西→東）
　　４　ＳＫ05完掘（西→東）
　　５　ＳＫ18断面（東→西）
　　６　ＳＫ18完掘（東→西）
　　７　ＳＫ25断面（西→東）
　　８　ＳＫ25完掘（西→東）
図版４　１　ＳＫ31確認状況（東→西）
　　２　ＳＫ31断面（東→西）
　　３　ＳＫ31完掘（東→西）
　　４　調査状況（西→東）
　　５　ＳＫ35断面（南→北）
　　６　ＳＫ35完掘（南→北）
　　７　ＳＫ41確認状況（北→南）
　　８　ＳＫ41断面（北→南）
図版５　１　ＳＫ41完掘（北→南）
　　２　ＳＫ43確認状況（東→西）
　　３　ＳＫ43断面（南→北）
　　４　ＳＫ43完掘（南→北）
　　５　ＳＫ44確認状況（南→北）
　　６　ＳＫ44断面（南→北）
　　７　ＳＫ44土器出土状況（東→西）
　　８　ＳＫ44完掘（東→西）
図版６　１　ＳＫ45確認状況（南→北）
　　２　ＳＫ45完掘（南→北）
　　３　ＳＫ46確認状況（東→西）
　　４　ＳＫ46断面（東→西）
　　５　ＳＫ46遺物出土状況（東→西）
　　６　ＳＫ46完掘（東→西）
　　７　ＳＫ47断面（東→西）
　　８　ＳＫ47完掘（東→西）
図版７　１　ＳＫＦ27断面（東→西）
　　２　ＳＫＦ27完掘（東→西）
　　３　ＳＫＦ30断面（東→西）
　　４　ＳＫＦ30完掘（東→西）
　　５　ＳＫＦ36断面（西→東）
　　６　ＳＫＦ36溝断面（西→東）
　　７　ＳＫＦ36完掘（西→東）
　　８　ＳＲ06確認状況（東→西）
図版８　１　ＳＲ06断面（南東→北西）
　　２　ＳＲ11確認状況（北東→南西）
　　３　ＳＲ11断面（北東→南西）
　　４　ＳＲ13確認状況（南西→北東）
　　５　ＳＫＴ19精査状況（南東→北西）
　　６　ＳＸＱ34最下層（西→東）
　　７　ＳＸ07確認状況（南→北）
　　８　ＳＸ39確認状況（南→北）
図版９　１　ＳＩ01完掘（北→南）
　　２　ＳＩ01東西断面（北西→南東）
　　３　ＳＩ01カマド火床面（北→南）
　　４　ＳＩ01カマド断面（西→東）
　　５　ＳＩ01貼り床断面
　　６　ＳＩ01壁板痕跡（北→南）
　　７　ＳＩ01壁板断面
図版10　１　ＳＩ23完掘（北→南）
　　２　ＳＩ23断面（北東→南西）
　　３　ＳＩ23カマド完掘（北→南）
　　４　ＳＩ23カマド出土遺物
　　５　ＳＩ23貼り床と工具痕
図版11　１　ＳＩ02確認状況（北→南）
　　２　ＳＩ02完掘（北西→南東）
　　３　ＳＫ10完掘（南→北）
　　４　ＳＫ37完掘（北東→南西）
　　５　ＳＸＰ24完掘（北→南）
　　６　ＳＸＰ70断面（北→南）
　　７　ＳＸＰ73断面（南→北）
　　８　ＳＸＰ97断面（南→北）
図版12　１　ＳＮ04確認状況（南東→北西）
　　２　石篦出土状況（西→東）
　　３　石斧出土状況
　　４　土器出土状況（LE33）
　　５　ＭＫライン北側土層断面　第５図１―③（東→西）
　　６　ＬＰライン土層断面　第５図４―①（東→西）
　　７　調査区東側土層断面　第５図７（南→北）
　　８　台地の縁に分布する芋貯蔵穴群（北→南）
図版13　遺構内出土遺物
図版14　遺構内出土遺物
図版15　遺構内出土遺物
図版16　遺構内・外出土遺物
図版17　遺構外出土遺物
図版18　遺構外出土遺物
図版19　遺構外出土遺物
図版20　遺構外出土遺物
図版21　遺構外出土遺物
図版22　遺構外出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

一般県道大館能代空港西線「鷹巣西道路」は、北秋田市今泉と北秋田市脇神を結ぶ延長5.25kmの自動車専用道路である。秋田県北部の高規格幹線道路の未開通区間の早期開通を図ることを目的とし、平成24年に新規事業化されている。将来的には二ツ井能代道路や鷹巣大館道路と併せて、大館能代空港、能代港等の交通結節点を結び、東北縦貫自動車道に直結する高規格幹線道路網の一翼を担うことが期待され、県北部における経済活動や生活基盤を支える重要な社会基盤をなすものである。

鷹巣西道路の事業化に伴い、事業主体者である秋田県北秋田地域振興局（以下、北秋田地域振興局）から秋田県教育委員会に対し、平成24年３月に建設予定地内の埋蔵文化財分布調査についての依頼があった。これを受け、秋田県教育委員会は平成24年10月に当該地域の分布調査を行い、同年11月に事業主体者である北秋田地域振興局に結果を報告した。用地内に含まれる周知の小勝田館跡については、平成25年10月15日～11月５日に秋田県埋蔵文化財センターによる確認調査が行われた。調査の結果、縄文時代と平安時代の遺構・遺物が確認され、本発掘調査が必要であることが判明した[註1]。同年12月、秋田県教育委員会は、その旨を北秋田地域振興局に報告し、協議の結果、発掘調査は秋田県埋蔵文化財センターが担当し、平成26年度に11,000㎡を対象に発掘調査を行うことになった。

第２節　調査の経過

調査に先駆け、重機による部分的な表土除去を５月26日(月)～５月30日(金)までの期間で行った。調査は計画に基づき、東西に長い調査区の東側から西側に向けて行われた。

第１週　６月９日（月）～６月13日（金）

草刈り・枝木寄せ・ベルトコンベアの設置等の環境整備と基本土層ベルトの設定・掘削を行う。

第２週　６月16日（月）～６月20日（金）

東側調査区で確認調査埋土の掘り上げ、Ⅰ～Ⅱ層の掘り下げを行う。確認調査で検出した古代の竪穴建物跡をＳＩ01とする。

第３週　６月23日（月）～６月27日（金）

東側調査区でⅠ～Ⅱ層の掘り下げ、Ⅲ～Ⅳ層の精査、ＳＩ01周辺の掘り下げを行う。

第４週　６月30日（月）～７月４日（金）

東側調査区でⅠ～Ⅱ層の掘り下げ、Ⅲ～Ⅳ層の精査、ＳＩ01周辺の精査、土坑・土器埋設遺構・焼土遺構等の精査を行う。農道東側の調査をほぼ終了する。ＳＩ01南東から古代の竪穴建物跡を検出しＳＩ02とする。

第５週　７月７日（月）～７月11日（金）

東側調査区でⅠ～Ⅱ層の掘り下げ、Ⅲ～Ⅳ層の精査、ＳＩ01・02周辺の精査を行う。９日からの大雨により調査区北側が水没し、排水等復旧作業に追われる。

第６週　７月14日（月）～７月18日（金）

東側調査区でⅠ～Ⅱ層の掘り下げ、Ⅲ～Ⅳ層の精査、ＳＩ01・02周辺の精査を行う。農道周辺の調査が終了し、農道切り替えについて次週原因者と協議することになった。先週に引き続き排水作業を行う。

第７週　７月22日（火）～７月24日（木）

東側調査区でⅠ～Ⅱ層の掘り下げ、Ⅲ～Ⅳ層の精査、ＳＩ01周辺の精査、土坑・土器埋設遺構等の精査を行う。ＳＩ01南側から掘立柱建物跡を構成するとみられる柱穴群を検出する。農道切り替えについて原因者と協議を行い、１ヶ月の通行止めを検討することで調整を図ることとなる。

第８週　７月28日（月）～８月１日（金）

東側調査区でⅠ～Ⅱ層の掘り下げ、Ⅲ～Ⅳ層の精査、ＳＩ01周辺の精査、土器埋設遺構の精査等を行う。原因者から農道通行止めの許可を受け、29日から農道の掘り下げを開始する。28日に調査区南側境界付近に熊が出没。警察に連絡し、対応策等の指導を受ける。

第９週　８月４日（月）～８月８日（金）

東側調査区でⅠ～Ⅱ層の掘り下げ、Ⅲ～Ⅳ層の精査、ＳＩ01周辺の精査を行う。農道部分の調査を終了した。断続的な激しい雨に見舞われ、ベルトコンベア等が空回りする等、作業が停滞する。

第10週　８月18日（月）～８月22日（金）

東側調査区でⅠ～Ⅱ層の掘り下げを行う。西側調査区の調査を始め、Ⅰ～Ⅱ層の掘り下げを行う。連日雨に見舞われ、遺構精査は停滞した。

第11週　８月25日（月）～８月29日（金）

東側調査区でⅣ層上面の精査、西側調査区で遺構等の計測作業、土坑・陥し穴状遺構の精査等を行う。調査区中央部北端付近で板状土偶片が出土し、調査区中央部南側では陥し穴状遺構を２基検出した。ベルトコンベアの西側への移設を開始、排土場は東排土置き場から西排土置き場へ変更になる。28日、ペアーレ大仙受講者一行が体験発掘で来跡する。

第12週　９月１日（月）～９月５日（金）

ベルトコンベアの移設が完了し、西側調査区Ⅰ～Ⅱ層の掘り下げ、竪穴建物跡・土坑・陥し穴状遺構等の精査を行う。調査区中央西寄りで竪穴建物跡を確認し、ＳＩ23とする。

第13週　９月８日（月）～９月12日（金）

西側調査区のⅠ～Ⅲ層の掘り下げ、竪穴建物跡・陥し穴状遺構・フラスコ状土坑等の精査を行う。調査区南西部低地に先行して深掘りトレンチを入れ、土層状態の確認作業を行った。

第14週　９月16日（火）～９月19日（金）

西側調査区のⅠ～Ⅲ層の掘り下げ、竪穴建物跡・土坑・フラスコ状土坑・石器製作跡等の精査を行う。ＳＩ23竪穴建物跡の調査を開始する。

第15週　９月22日（月）～９月26日（金）

西側調査区のⅠ～Ⅲ層の掘り下げ、竪穴建物跡・土坑・フラスコ状土坑等の精査を行う。27日、遺跡見学会を行う（見学者73名）。

第16週　９月29日（月）～10月３日（金）

西側調査区のⅠ～Ⅲ層の掘り下げ、Ⅳ層上面の精査、竪穴建物跡・土坑・フラスコ状土坑等の精査を行う。西側調査区に入って縄文時代の遺物量が増加傾向にある。

第17週　10月６日（月）～10月10日（金）

西側調査区のⅠ～Ⅲ層の掘り下げ、Ⅳ層上面の精査、竪穴建物跡・土坑・フラスコ状土坑等の精査を行う。断続的に調査を行っていたＳＩ01竪穴建物跡の調査が終了。南側のＳＢ40掘立柱建物跡と一連の構造と認識する。

第18週　10月14日（火）～10月17日（金）

西側調査区のⅠ～Ⅲ層の掘り下げ、Ⅳ層上面の精査、竪穴建物跡・土器埋設遺構等の精査を行う。

第19週　10月20日（月）～10月24日（金）

西側調査区のⅣ層上面の精査、竪穴建物跡・土坑等の精査を行う。22日、空中写真撮影を実施する。

第20週　10月27日（月）～10月31日（金）

西側調査区のⅣ層上面の精査、竪穴建物跡・土坑等の精査、撤収準備作業を行う。杉伐根の下から、土器が埋納された小土坑（ＳＫ43・44・46）を立て続けに検出。

第21週　11月４日（火）～11月７日（金）

竪穴建物跡の精査、調査終了写真撮影等を行う。７日、北秋田地域振興局建設部に遺跡を引き渡し、発掘調査を完了する。

第３節　整理作業の経過

整理作業は、平成26年10月１日から平成27年９月30日まで実施した。

平成26年10月から１月までは遺物洗浄と注記作業を行い、並行して、土器等の接合・復元作業を平成26年12月から27年１月までの期間で行った。遺物の実測とデジタルトレースは、平成27年１月から７月までの期間で行った。

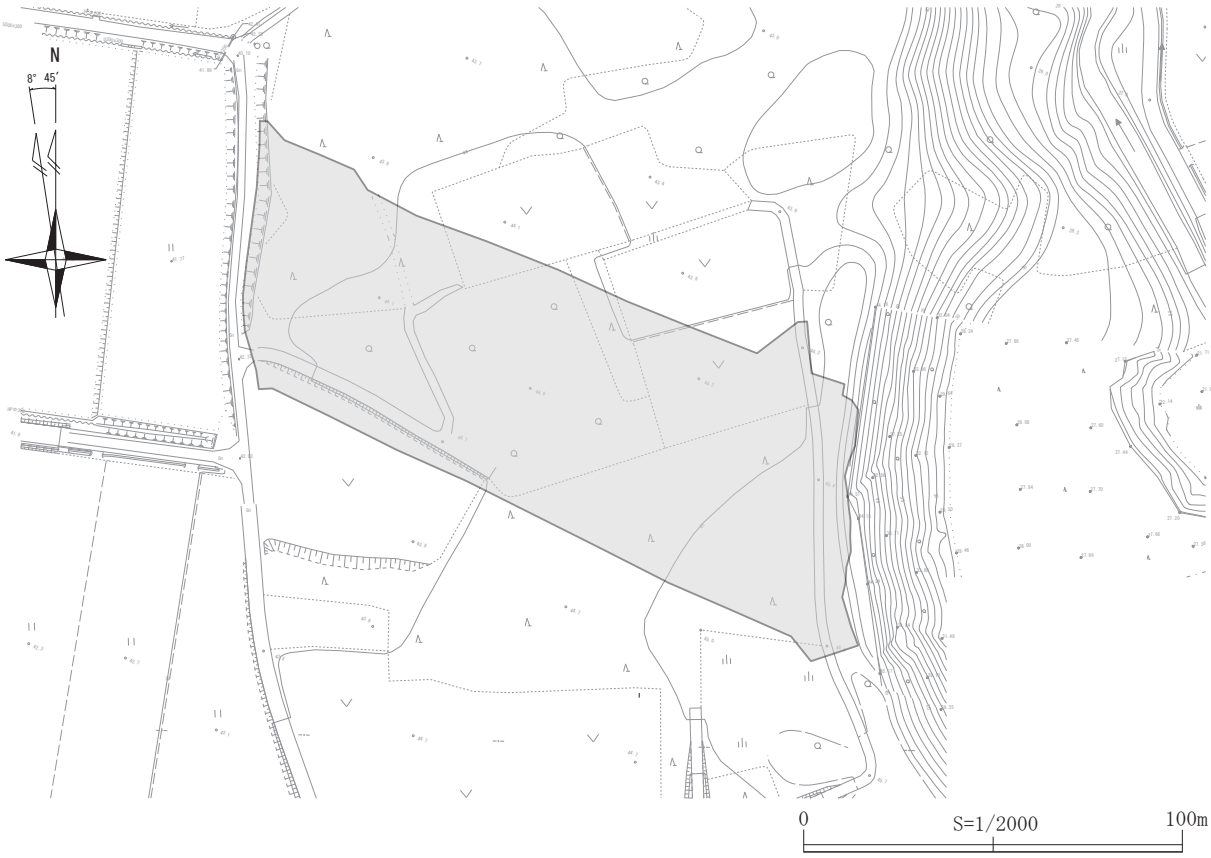
図面関係については、平成26年12月から27年３月まで遺構第２原図の作成とデジタルトレースを行った。トレース終了図については、平成27年３月～６月の期間に編集作業を行った。平成27年８月から９月までは、収蔵のためのデータ作成・整理を行った。

註１　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告』　秋田県文化財調査報告書第491集　2014(平成26)年

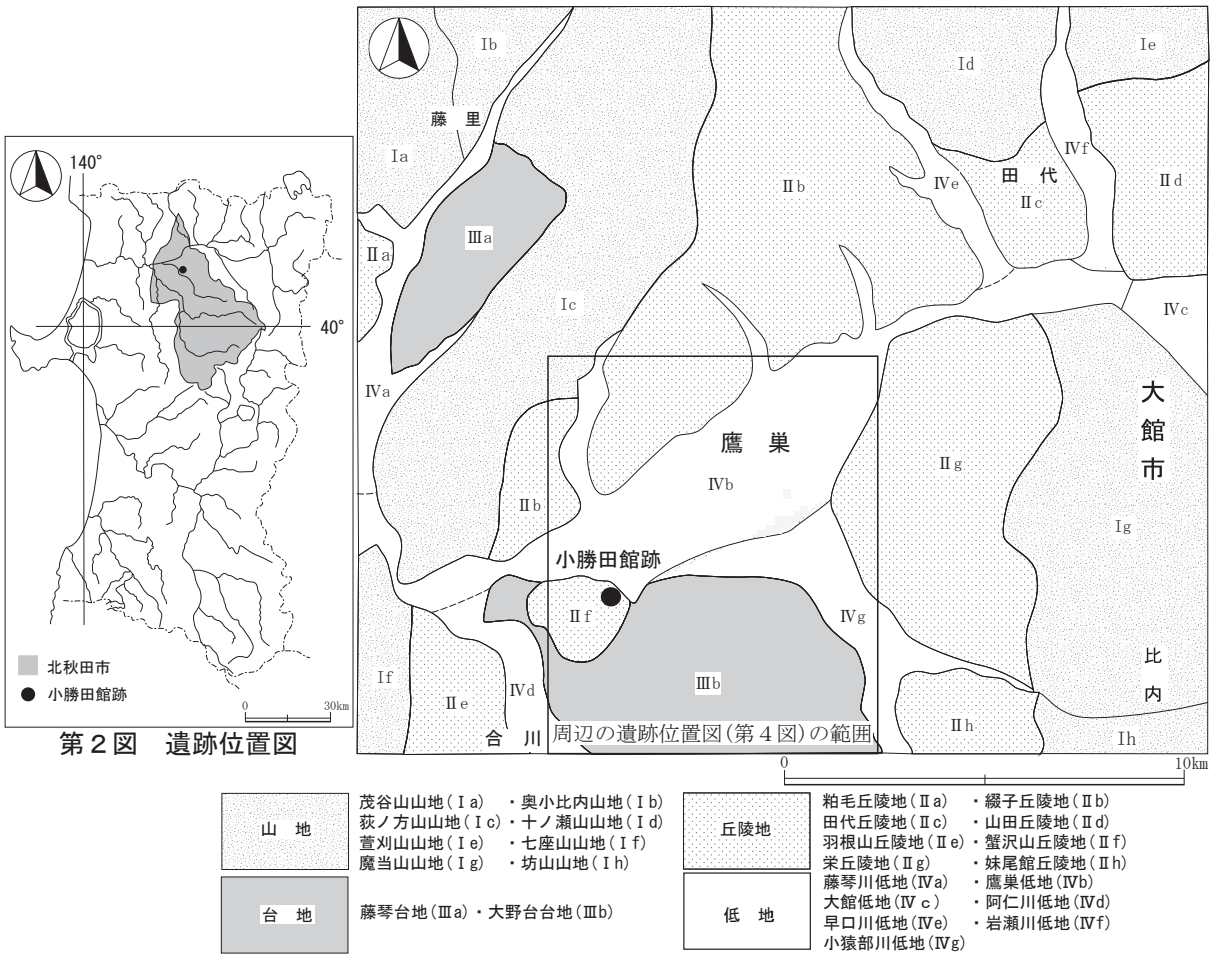
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

小勝田館跡のある北秋田市は秋田県の内陸北部に位置している。いわゆる「平成の大合併」により鷹巣町・森吉町・合川町・阿仁町の４町が合併して誕生した市で、面積は県全体の約１割を占める。遺跡が所在する旧鷹巣町は北秋田市の北西に位置し、白神山地と太平山地の間、米代川中流域に展開する鷹巣盆地の中心を占める。米代川は盆地内を西流し能代市二ツ井に至るが、この間、白神山地から今泉・前山・綴子・糠沢の４河川、太平山地から小猿部・麻当・田沢の３河川が米代川に注ぐ。特に小猿部川は品類川・小森川等の支流を含めて、奥深い沢筋を形成している。この米代川支流域には古い歴史をもつ集落が多く、盆地中央の旧鷹巣町は近世に開かれて以来、交通の要衝地として発達してきた。盆地北側の山麓沿いに羽州街道（国道７号）、盆地中央をＪＲ奥羽本線（前山・鷹巣・糠沢の３駅あり）が貫通し、鷹巣駅から阿仁比立内まで秋田内陸縦貫鉄道が連絡する。遺跡のそばには県によって設置された「菅江真澄の道」の案内柱があり、交通の要所であったことが窺える。水運においては、江戸時代に阿仁鉱山の流通路として利用された阿仁川の船着き場が設けられた。北秋田市は、現在も国道105号線や秋田内陸縦貫鉄道の北の起点として、また内陸の大館と沿岸の能代を結ぶ東西の中間点として交通の要所となっており、国道の交通量は多い。加えて平成10年の大館能代空港



第１図　調査区範囲図



第２図　遺跡位置図

第３図　遺跡周辺の地形区分図

（あきた北空港）の開業により、首都圏へのアクセスも短時間で可能となった。秋田県北部の空の玄関としての機能も加わったことにより、交通の要所として北秋田市の位置付けは、さらに高いものとなった。

小勝田館跡周辺の地形は山地・丘陵地・台地・低地の４つに区分される。山地・丘陵地に囲まれた中に、米代川とその支流によって複数の河岸段丘（台地）と低地が形成されている。この河岸段丘は６段に分けられ、名称は形成順に大野台Ⅰ～Ⅳ面、石巻岱面、毛馬内面と付されている。

小勝田館跡は、秋田内陸縦貫鉄道小ヶ田駅の西約0.4kmに位置し、米代川と平行して西流する小猿部川左岸に形成された標高44～45mの平坦な台地上に立地する。この台地の北と東は急斜面となっており、斜面下には台地に沿うように湯車川が流れ旧小猿部川へと注いでいる。遺跡の現況は大部分が杉林で、調査区北側の一部は畑地として利用されている。

第２節　歴史的環境

小勝田館跡（36）のある北秋田市には旧石器時代から近世までの遺跡が数多く確認されている。第２図には北秋田市脇神を中心とする地域を示した。遺跡の位置を示す図中の番号は、第１表と対応する。以下、当地域に分布する遺跡について概観する。

旧石器時代は、脇神館跡（14）でナイフ形石器が１点出土している。遺構は無く、当該期の様相は不明である。

縄文時代において現在確認されている最も古い遺跡は、藤株遺跡（13）と伊勢堂岱遺跡（37）である。藤株遺跡は、縄文時代後期～晩期を中心とする遺跡であるが、早期中葉の竪穴建物跡や遺物が検出されている。後述するが、早期の土器が出土している伊勢堂岱遺跡は、縄文時代後期を主体とする遺跡であり、早期の遺構は見つかっていない。

前期になると早期に引き続き藤株遺跡（13）において集落が営まれる。同遺跡は、明治時代からその存在が注目されており、1980（昭和55）年、国道105号線バイパス工事に先立って本格的な調査が行われた。その後、1989（平成元）年～1991（平成３）年、2012（平成24）年にも調査が行われているが、遺跡の範囲は約100,000㎡と広大であり、まだその一部しか明らかになっていない。また、高森岱遺跡（12）でも前期の土器が出土しており、遅くとも前期にはこの地域で定住生活を営んでいたと考えられる。中期の遺構は確認されていないが、相善遺跡（８）、碇岱遺跡、岩坂遺跡、タモノ木遺跡、石倉岱遺跡、山の上遺跡等の周辺の地域から中期の土器が出土している。

後期では、前述の伊勢堂岱遺跡で大規模な祭祀遺構が検出されている。同遺跡は大館能代空港アクセス道路建設のため、平成７（1995）年度から２か年計画で調査が行われた。遺跡からは後期前葉の環状列石とそれを取り巻く掘立柱建物跡等が検出され、遺跡は道路建設計画を変更して現地保存された。2001（平成13）年１月にはこの遺跡の重要性が認められ、国指定史跡となった。この他、石の巻岱Ⅱ遺跡（11）、川口遺跡（23）等で後期の土器が出土している。

晩期では、前述の藤株遺跡の集落が最盛期を迎え、竪穴建物跡や土坑墓が多数検出されている。土坑墓のうち１基からは、火葬された頭部の無い遺体が見つかっており、特異な例として重要視されている。この他、大型遮光器土偶が出土した高森岱遺跡（12）等、晩期の遺物の出土は数か所で報告されている。

以上、当地域においては、縄文時代の中でも特に後期から晩期にかけて活発な活動が確認できる。

弥生時代から古墳時代にかけては、土器片（続縄文土器）の出土が報告されているものの遺構は確認されておらず、当該期の様相は不明である。

古代（奈良・平安時代）では、本遺跡の周辺に多くの遺跡が存在する。

本遺跡より東にある法泉坊沢Ⅱ遺跡（18）では、19軒の竪穴建物跡と鍛冶炉が検出されている。ここでの鉄生産については、同遺跡西側の沢が「金堀り沢」と呼ばれていることから、そこが原料鉄の採掘場所の可能性があり注目される。その他、からむし岱Ⅰ遺跡（24）や伊勢堂岱遺跡で古代の竪穴建物跡が検出される等、大野台台地の周縁部で集落跡が見つかっている。また、本遺跡から北に約3.5㎞離れた綴子地区に約1,100年前のシラス洪水による埋没家屋が発見された胡桃館遺跡（9）がある。

第４図 小勝田館跡と周辺遺跡位置図

第１表　小勝田館跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	主な遺構・遺物	参考文献
1	家下	遺物包含地	【平安時代】土師器	
2	綴子館	館跡	【中世】空堀、郭	
3	深関太平山	遺物包含地	【平安時代】須恵器・土師器	
4	掛泥道上	遺物包含地	【平安時代】土師器・木製品（部材）	18, 19
5	深関沢	遺物包含地	【平安時代】須恵器・土師器	
6	坊沢高館	館跡	空堀、郭	
7	鰐口	遺物包含地	【弥生時代】続縄文土器（天王山式）	
8	相善	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器（中期：円筒下層a式）	
9	胡桃館	埋没家屋	【平安時代】掘立柱建物・柵列・柱列、須恵器・土師器・木製品（鞘・木簡・木皿・槌・串）・鉄製品（刀子）・建築遺材・クルミ	2, 3, 4, 12
10	石の巻岱Ⅰ	遺物包含地	【縄文土器】縄文土器（晩期：大洞ＢＣ式・Ｃ式）	
11	石の巻岱Ⅱ	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器（後期）・香炉型土器	
12	高森岱	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器（前期～晩期）・大型遮光器土偶	14
13	藤株	集落跡、墓域	【縄文時代】竪穴住居跡・屋外炉・土坑墓・配石遺構・陥し穴、縄文土器（前期：円筒下層ｂ式・円筒下層ｄ式、後期：十腰内Ⅰ式・中葉・後葉・末葉、晩期：大洞Ｂ式・大洞ＢＣ式）・石器（石鏃・石槍・石匙・石錐・石篦・異形石器・スクレイパー・磨製石斧・凹石・石皿・扁平打製石器・石錘・三脚石器）・土製品（土偶・土版・巻貝形土製品・鐸形土製品・スタンプ形土製品・有孔土製品・三角型土製品・土器片利用土製品・環状土製品）・石製品（岩偶・岩版・石棒・石刀・有孔石製品・玉類）	5, 15, 16, 17
14	脇神館	集落跡, 館跡	【旧石器時代】ナイフ形石器、 【縄文時代】縄文土器（前期：円筒下層ｄ式、後期後葉、晩期）・石器（石鏃・石匙・スクレイパー・凹石 【平安時代～中世】竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・焼土遺構・炭窯跡・土塁・空堀・溝跡・土坑・集石遺構・塚・柱穴様ピット、須恵器・土師器・陶磁器（景徳鎮・福健系・瀬戸美濃・肥前・備前・越前・堺）・鉄製品（刀子・斧・槍先・金属玉）・銭貨・鉄滓・羽口	8
15	ハケノ下	集落跡	【平安時代】土師器・須恵器、木製品、【鎌倉時代】掘立柱建物跡・土坑・柱穴様ピット、陶磁器・銭貨・杭、【安土桃山～江戸】水田跡、陶磁器・木製品・石製品（砥石等）・金属製品（鉄釘等）	11
16	ハケノ下Ⅱ	集落跡	【縄文時代】土器・石器、【平安時代】竪穴住居跡、土師器	
17	法泉坊沢Ⅰ	集落跡	【平安時代】竪穴状遺構	
18	法泉坊沢Ⅱ	集落跡 生産遺構	【縄文時代】竪穴住居跡・フラスコ状土坑、縄文土器・石器（磨製石斧）、 【平安時代】竪穴住居跡・竪穴状遺構・鍛冶炉・板塀跡・土坑・柱穴、土師器・須恵器・鉄製品（刀子・穂摘具・鋤先・紡錘車・鍬）・鉄滓・羽口	7
19	からむし岱Ⅳ	集落跡	【縄文時代】竪穴住居跡・土坑、縄文土器	
20	からむし岱Ⅴ	集落跡	【平安時代】竪穴住居跡、縄文土器・土師器	
21	からむし岱Ⅲ	集落跡	【縄文時代】土坑、土器	
22	川口Ⅱ	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器・石器（石皿）	
23	川口	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器（後期）・石器（石皿）	
24	からむし岱Ⅰ	集落跡	【縄文時代】掘立柱建物跡・焼土遺構・土坑・陥し穴、縄文土器（後期：十腰内Ⅰ式、晩期：大洞Ｃ２式）、石器（石鏃・石槍・石匙・石篦・スクレイパー・磨製石斧・凹石・石皿）、土製品（ミニチュア土器）、石製品（岩版・石刀・石剣）【平安時代】竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑、土師器・須恵器、 【中世】火葬墓、【近世】掘立柱建物跡、陶磁器	10
25	五右エ門屋敷下	集落跡		
26	からむし岱Ⅱ	遺物包含地	【弥生時代】続縄文土器、壺形土器	1
27	湯車Ⅱ	遺物包含地		
28	湯車Ⅰ	遺物包含地		
29	大沢岱Ａ	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器（後期）、石器	
30	大沢岱Ｂ	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器（後期）、石器	
31	大野台下	遺物包含地	縄文土器	
32	横淵館	館跡	【中世】郭	6
33	槐岱道上館	館跡	【中世】空堀、郭	
34	小ヶ田埋没家屋	埋没家屋	【平安時代】埋没家屋、縄文土器（後期）	1
35	小ヶ田	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器片（後期）、【平安時代】土師器	
36	小勝田館跡	館跡	本書参考	6
37	伊勢堂岱	環状列石 祭祀遺跡	【縄文時代】掘立柱建物跡・溝跡・焼土遺構・土坑・フラスコ状土坑・土器埋設遺構・土坑墓・環状列石・配石遺構・陥し穴・溝状遺構・柱穴、縄文土器（早期：鳥木沢式、後期：十腰内Ⅰ式）・石器（石鏃・石槍・石匙・石錐・石篦・トランシェ様石器・スクレイパー・石核・磨製石斧・打製石斧・礫器・磨石・敲石・凹石・石皿・半円状磨製石器・石錘・環状石斧・嘴状石器・三脚石器）・土製品（土偶・土版・足形付土版・動物形土製品・ミニチュア土器・有孔土製品・盲孔土製品・土器片利用土製品・土錘・土製耳飾・三角形土製品・環状土製品・鐸形土製品・キノコ形土製品・スタンプ形土製品・ヘラ形土製品・渦巻文土製品・球形土製品・指輪形土製品・焼成粘土塊）・石製品（岩版・石刀・石剣・有孔石製品・円盤状石製品・球状石製品・三角形石製品・鐸形石製品・有溝石製品・渦巻文石製品・石斧形石製品・線刻礫）・自然遺物（種実類・天然アスファルト）【平安時代】竪穴住居跡・溝跡・土坑・柱穴、土師器・須恵器・石器（砥石）・鉄製品	9, 13
38	観音堂岱	集落跡	【縄文時代】石器・土器	
39	観音堂岱Ⅱ	遺物包含地		
40	堀切石	遺物包含地	【縄文時代】縄文土器（中期：円筒下層a式・ｂ式）	
41	金沢	遺物包含地		
42	羽立岱	遺物包含地		
43	中谷内	遺物包含地		

鷹巣中学校の運動場造成作業中に須恵器や土師器、掘立柱等が出土し、これを受けて県教育委員会が1967（昭和42）年～1969（昭和44）年に発掘調査を実施した。板校倉建物跡等４棟と掘立柱列（柵）・高床式の建物跡が検出されている。建物がシラス層の中に建ったままの状態で検出されたため、当時の建築技術を知る上でも非常に貴重な遺跡として注目された。小ヶ田埋没家屋（34）でも文化14（1817）年に埋没家屋が見つかったとの伝承記録があるが、本格的な調査が行われていないため、胡桃館遺跡との関連は不明である。この他、古代末の防御性集落として脇神館跡があげられる。竪穴建物跡、溝跡等とともに、古代の建築と推定される空堀が検出されている。

中世では、脇神館跡や館平館遺跡、槐岱道上館跡（33）、小森館跡、横淵館跡（32）、妹尾館、岩脇館など中世城館が数多く存在する。このうち本格的な調査が行われているのは脇神館跡のみであり、同館跡からは土塁・空堀等が検出されたほか、16世紀後半の陶磁器や炭化米、雑穀が出土している。他の中世城館については本格的な調査が行われておらず不明な点が多いが、その多くに比内地方を支配していた浅利氏の家臣が常駐していたという記録が残っている。集落跡としてはハケノ下遺跡（15）があり、鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出されている。また、からむし岱Ⅰ遺跡（24）では中世の火葬墓が調査されている。

近世の調査例は少ないものの、ハケノ下遺跡で水田跡が、脇神館跡から塚跡が、からむし岱Ⅰ遺跡から掘立柱建物跡がそれぞれ見つかっており、当該地域における人々の生活の痕跡が確認できる。

第１表　参考文献

（表中の番号は以下の文献番号に対応する。特に番号を示していないものは、秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（北秋田地区版）』2006（平成18）年の記載に基づく。）

1　秋田県『秋田県史』考古編　1960（昭和35）年
2　秋田県教育委員会『胡桃館埋没建物発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第14集　1968（昭和43）年
3　秋田県教育委員会『胡桃館埋没建物遺跡第２次発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第19集　1969（昭和44）年
4　秋田県教育委員会『胡桃館埋没建物遺跡第３次発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第22集　1970（昭和45）年
5　秋田県教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第85集　1981（昭和56）年
6　秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1983（昭和58）年
7　秋田県教育委員会『法泉坊沢Ⅱ遺跡―地方特定道路整備工事鷹巣町湯車工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』秋田県文化財調査報告書第278集　1998（平成10）年
8　秋田県教育委員会『脇神館跡―県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―』秋田県文化財調査報告書第284集　1999（平成11）年
9　秋田県教育委員会『伊勢堂岱遺跡―県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―』秋田県文化財調査報告書第293集　1999（平成11）年
10　秋田県教育委員会『からむし岱Ⅰ遺跡―大館能代空港アクセス道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』秋田県文化財調査報告書第339集　2002（平成14）年
11　秋田県教育委員会『ハケノ下遺跡――一般国道７号鷹巣大館道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―』秋田県文化財調査報告書第483集　2012（平成24）年
12　北秋田市教育委員会『胡桃館遺跡埋没建物部材調査報告書』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第10集　2008（平成20）年
13　北秋田市教育委員会『史跡伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第13集　2011（平成23）年
14　鷹巣町『鷹巣町史』第一巻　1992（平成４）年
15　鷹巣町教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1990（平成２）年
16　鷹巣町教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1991（平成３）年
17　鷹巣町教育委員会『藤株遺跡範囲確認調査報告書』1992（平成４）年
18　鷹巣町教育委員会『平成15年度町内遺跡詳細分布調査報告書』鷹巣町文化財調査報告書第11集　2004（平成16）年
19　鷹巣町教育委員会『平成16年度町内遺跡詳細分布調査報告書』鷹巣町文化財調査報告書第13集　2005（平成17）年

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査

仮設施設の設営や発掘作業員による掘削業務及びその管理等については、掘削作業管理業務とし、一括して外部委託した。また、遺跡の位置や遺物の出土地点等の記録に不可欠な方眼杭打設業務も専門技術者に委託した。方眼原点（ＭＡ50）は、世界測地系平面直角座標第Ｘ系のＸ=23000.00、Ｙ=−41700.00（北緯40度12分22.04330秒，東経140度20分36.54211秒）とし、ここから座標北方向の南北線及びこれに直行する東西線により、４ｍ区画の方眼を組んだ。南北線は東から西に向かって…ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ…と昇順になるアルファベットＡ～Ｔ20文字による２文字の組み合わせで、東西線は南から北に向かって…48・49・50・51・52…と昇順となるアラビア数字でそれぞれ呼称した。この４ｍ区画（以下グリッド）を南東角を画する南北線と東西線の呼称を組み合わせて「ＭＡ50」のように呼んだ。

確認調査によって調査区内には、耕作地整理のために地山まで削平されいる部分と、遺物包含層が残存している可能性のある部分が確認されていた。

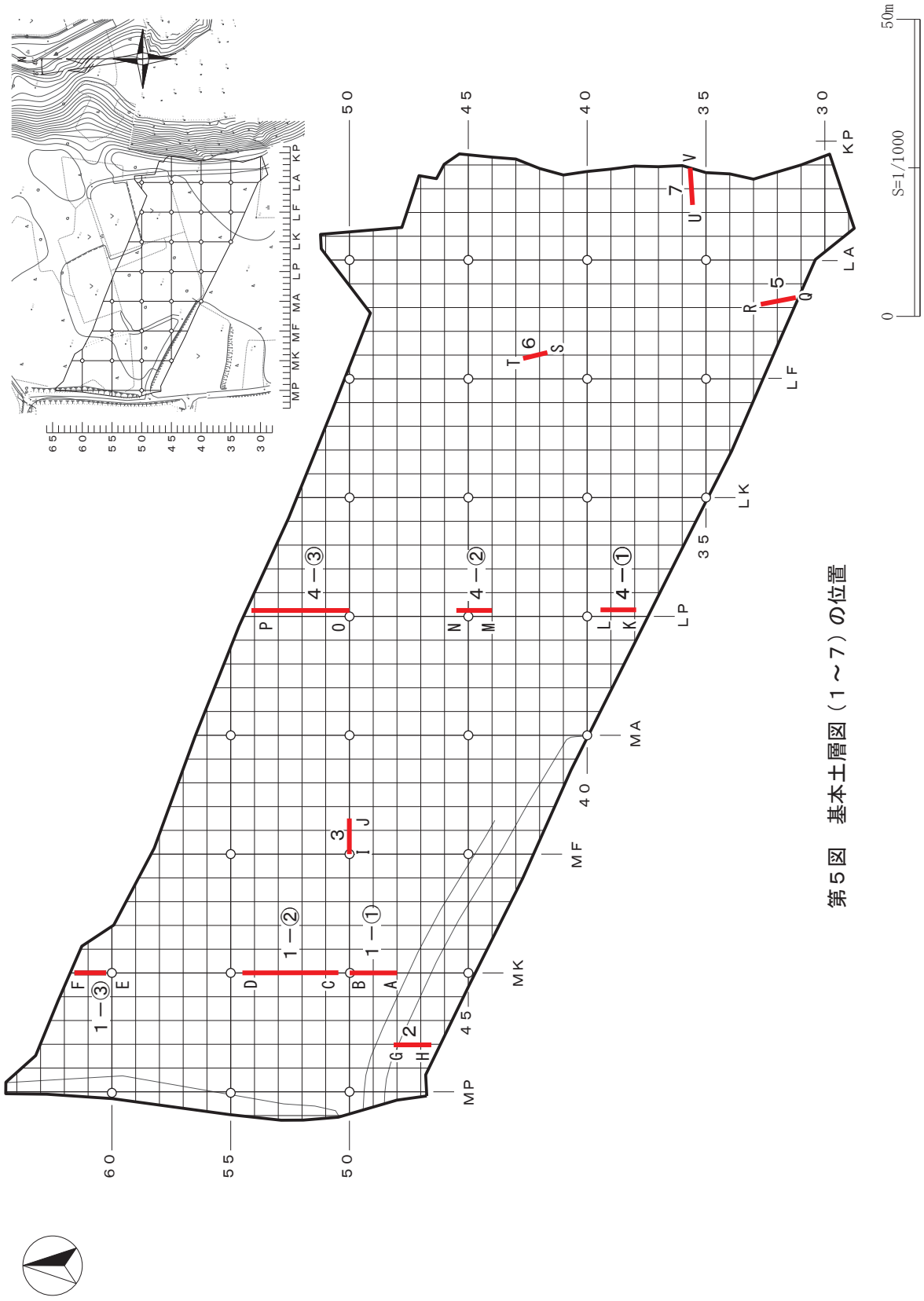
地山まで削平されている部分は、ＬＡ43とＬＩ41を結ぶラインから北側調査区境界までの約1,250㎡と、ＬＰ54とＭＣ53を結ぶラインから北側調査区境界までの約350㎡で、この部分はバックホーで表土・旧耕作土を除去し、排土は調査区外に排出した。

遺物包含層が残存している可能性のある部分は、表土・旧耕作土の厚さが不定であるためスコップ・ジョレン・移植ゴテを用い、人力で除去を行った。遺物が集中的に出土する部分は、遺物を取り上げながら面的に掘り下げを行った。

遺構は、遺構種別を表すアルファベットの記号と検出順を表す通し番号を組み合わせて「ＳＩ01」のように呼称した。ただし柱穴様ピットは別途通し番号を付し、柱穴様ピットから土坑、土坑から柱穴様ピットと遺構種別を変更した場合は、遺構種別・通し番号ごと訂正した。調査は、基本的に検出状況・土層断面・遺物出土状況・完掘状況等の写真撮影と実測・図面化作業を併行し、遺構調査カードに特徴を記述した。

出土遺物は、遺構名や区名、出土グリッド名と層位及び出土年月日を記録して取り上げた。密集して出土した場合や、取り上げた位置から遺構が検出される可能性が考えられる場合は、遺物用の通し番号を付して、写真撮影し、出土地点を計測して取り上げた。

図面は、基本的にトータルステーションで測点を計測したものをプリントアウトし手描きで結線したが、測点が視準できない位置にある場合や、土層断面・細密な遺物出土状況等は手作業で実測した。トータルステーションは方眼杭を器械点・後視点にして設置し、測点の平面直角座標第Ｘ系の座標値（Ｘ，Ｙ，Ｚ）を得て、平面図を作成した。写真は、約3,630万画素のフルサイズ一眼レフレックスデジタルカメラによって撮影し、予備や作業過程等の撮影には約1,200万画素のコンパクトデジタルカ



第５図　基本土層図（１～７）の位置

メラを用いた。

調査区の基本土層は、方眼杭に沿って東西方向と南北方向に土層ベルトを設定し、記録した。地形の等高線図は、２ｍ方眼で標高計測を行い作成した。

遺跡の立地や周辺の地形を上空から記録するため、マルチコプターを使用した空中写真撮影を委託によって実施した。

調査で回収した火山灰・炭化物サンプルについては、地山及び遺構の形成年代や遺構の性格解明のため、理化学分析の専門機関に委託した。

２　整理作業

遺構の図面は、発掘調査で作成した図をスキャン、もしくはデータ変換によりデジタルデータ化し、平面図と断面図を組み合わせ、ドローイングソフト（アドビシステムズ社製「Illustrator」）によってトレースを行った。遺構の記述は、遺構調査カードを基に行った。

遺物は、洗浄・注記の後に、土器・石器類の接合・復元作業を行った。その後、報告書に掲載する遺物を選別し、土器は拓本と実測図を作成した。遺物の図面もスキャンし、ドローイングソフトによってトレースを行った。

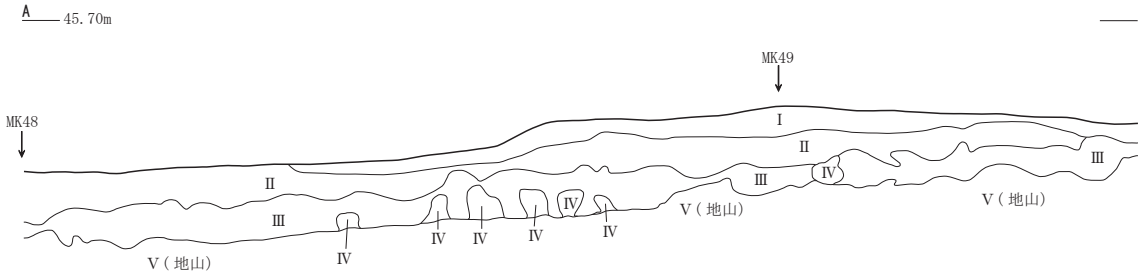
遺構・遺物の実測図は、ドローイングソフトによってレイアウトを行った。

第２節　基本層序

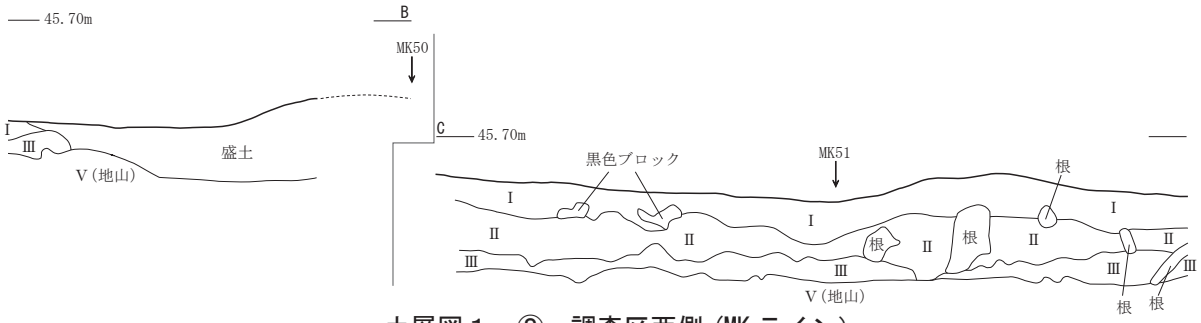
本遺跡の調査前の状況は、調査区南西部、調査区中央部、調査区北東部の休耕作地を除き林地であった。近隣住民によれば、当地では昭和40年頃に大規模な農地整備が行われたが、ほどなく始まった減反政策により水田耕作が行われたのは短い期間に留まったという。その後、農地として使用されなくなった部分を中心に、杉の植林が行われたとのことである。本遺跡内では、パイプラインによる旧い配水設備の残骸は見られるものの、典型的な水田土壌は確認できなかった。住民の話の通り、水田としての利用が短期間に留まったためとみられる。以下に、調査区内の各域における土層の概要を述べる。

調査区西側　当区南側境界部分（第７図土層図２）が農道より一段低い耕作地となっているが、調査の結果、地山深くまで削平された後、１ｍ以上盛り土された場所であることがわかった。この盛り土については、平成８年頃に搬入造成されたことが地元業者からの情報提供により判明した。これを裏付けるように盛り土には空き缶等の現代の廃棄物が若干含まれ、地山の一部には重機の爪と思われる痕跡が確認された。そのため、この部分については遺構・遺物が残存する可能性はないと判断し、トレンチ調査にとどめることになった。この南側境界部分以外は、調査区西側に層位の大きな乱れは認められない。

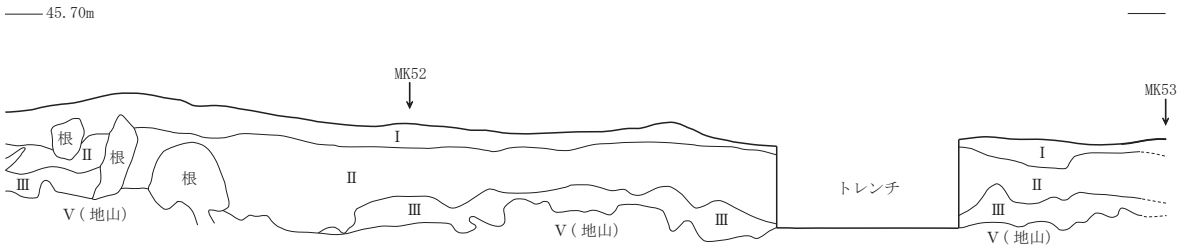
調査区中央部　上層部の撹乱がみられ、それらの影響を受けた黒色シルトを（表土から20～30㎝ほどの深さまで）重機により除去した。38ライン以北では、耕作の影響と見られる撹乱（第８図①～④層）が顕著であり、その他に耕作機器によるものと見られる溝状の撹乱部分が地山まで到達している部分も見受けられる。また、Ⅰ層表土・耕作土の直下が地山となる部分もみられる。



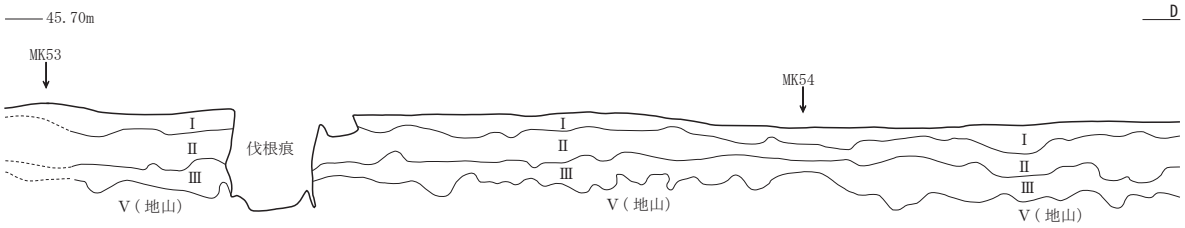
土層図１－①　調査区西側（MK ライン）



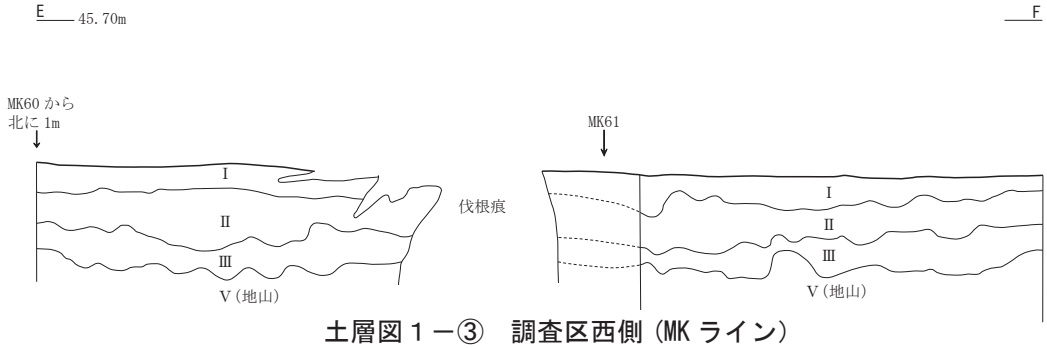
土層図１－②　調査区西側（MK ライン）



土層図１－②　調査区西側（MK ライン）



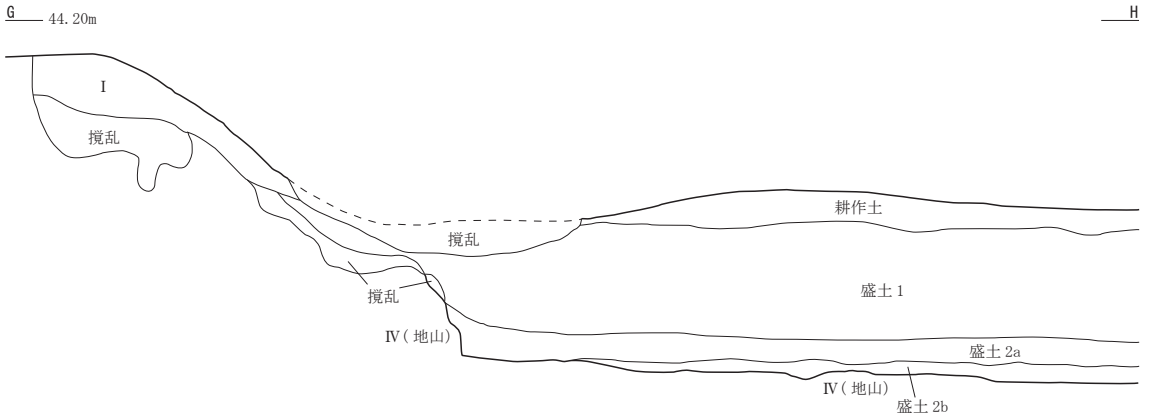
土層図１－②　調査区西側（MK ライン）



土層図１－③　調査区西側（MK ライン）

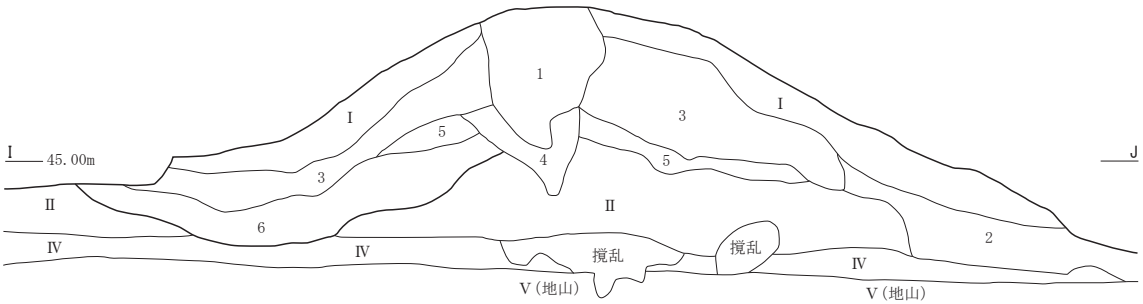
0　S=1/40　2m

第６図　基本土層断面図（１）



土層図２　調査区西側（MN ライン）

※盛土１、２a、２b はいずれも現代の地業



１黒色（10YR 2/1）シルト 細根密集　植栽の跡か
２黒色（10YR 2/1）シルト Ⅱ層より淡い色調でしまりが少し弱い
３黒色（10YR 2/1）シルト 地山塊（極小～小）少量含む
４黒色（10YR 2/1）シルト Ⅱ層よりしまり弱い　植栽痕？
５黒色（10YR 2/1）シルト 地山塊（極小）微量含む
６黒色（10YR 2/1）シルト 地山塊（極小）微量含む（近代の溝）

※１～５は近代の盛土

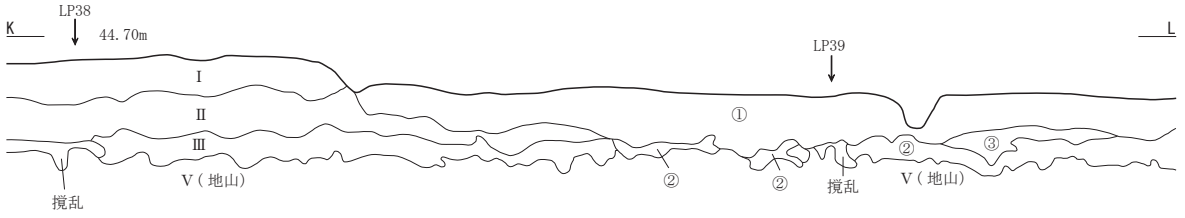
土層図３　調査区西側（50 ライン）

0　S=1/40　2m

第７図　基本土層断面図（２）

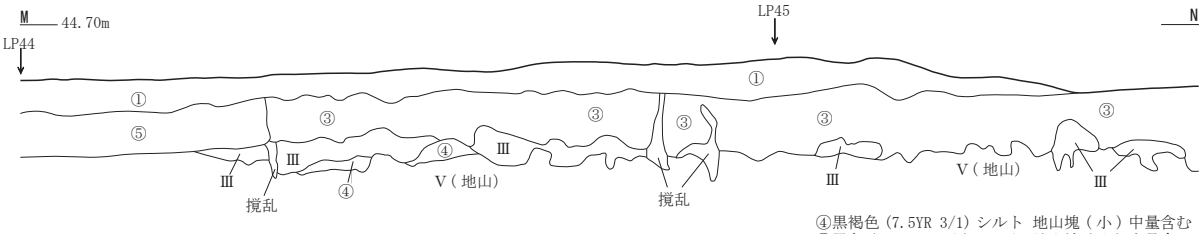
調査区東側　層位の大きな乱れはないものの、北側の旧水田部分南側（47～49ライン付近）では、地山上面に達する地形改変が確認できる。地山上には黒々とした黒色土が堆積しており、水田耕作終了後は畑地として利用されたと見られる。

調査区内の基本層序　調査区東西の相違点は、西側には東側に見られない極暗褐色シルト層が分布することである。この層は、東側Ⅱ層の下位部分に比定されるが、調査区中央部の撹乱の影響で一連の土層観察による先後関係等の検討ができなかった。大勢としては、表土・耕作土、黒褐色～暗褐色遺物包含層、地山漸移層、地山という層序となる。調査区内には倒木痕が散在し、これらの影響で地山上位を中心に撹乱を受けた範囲が見られるが、その影響はⅡ層上位には達しておらず、縄文時代から平安時代までの間に倒木したものと考えられる。なお、地山については、形成期や由来を明らかにするためテフラ分析を実施した（第４章４節）。



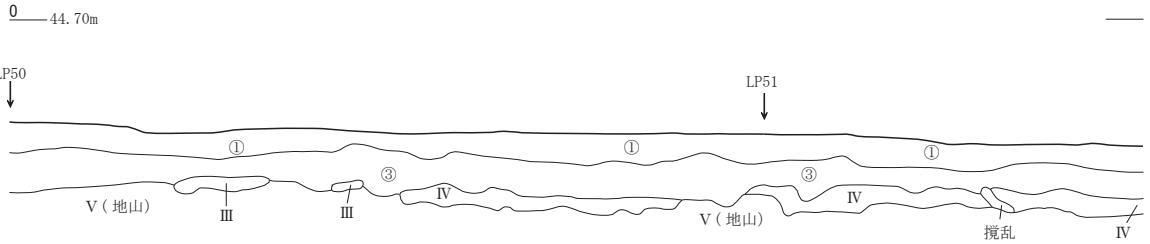
土層図４－①　調査区中央（LP ライン）

①黒褐色（7.5YR 3/2）シルト 地山塊（極小）少量含む
②黒褐色（7.5YR 3/2）シルト 地山塊（小）中量含む
③黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊（小）中量含む

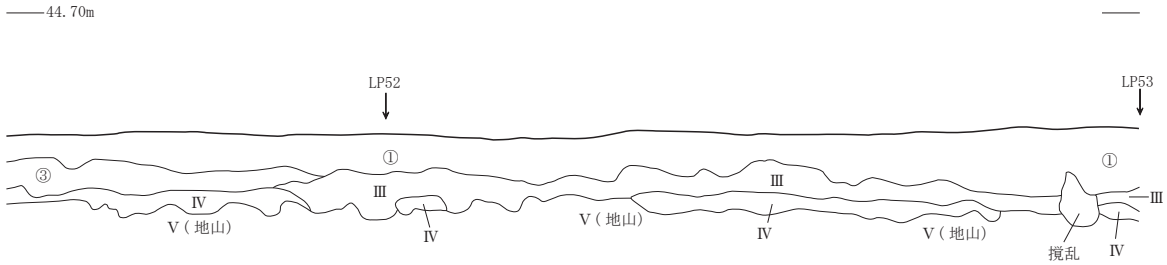


④黒褐色（7.5YR 3/1）シルト 地山塊（小）中量含む
⑤黒色（7.5YR 1.7/1）シルト 地山塊（小）中量含む

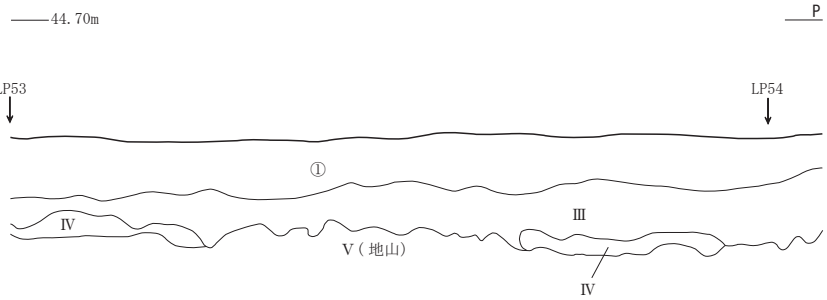
土層図４－②　調査区中央（LP ライン）



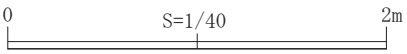
土層図４－③　調査区中央（LP ライン）



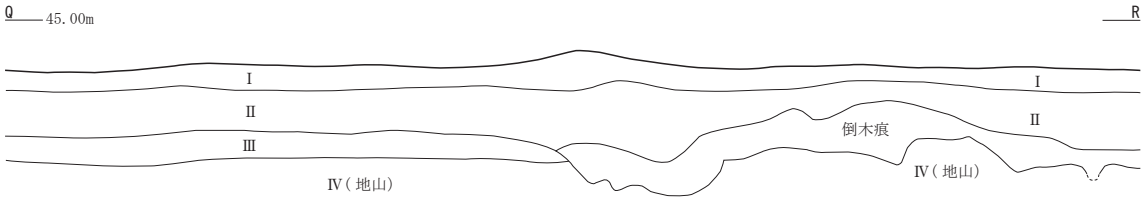
土層図４－③　調査区中央（LP ライン）



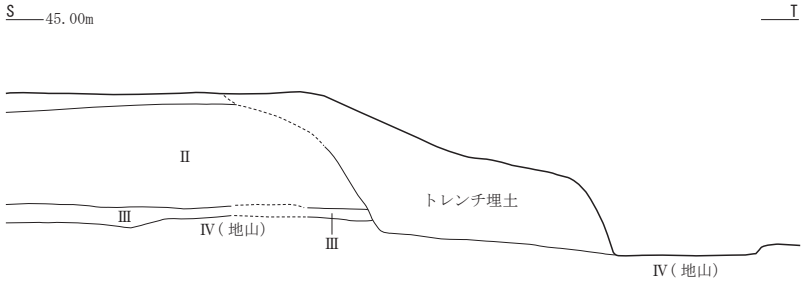
土層図４－③　調査区中央（LP ライン）



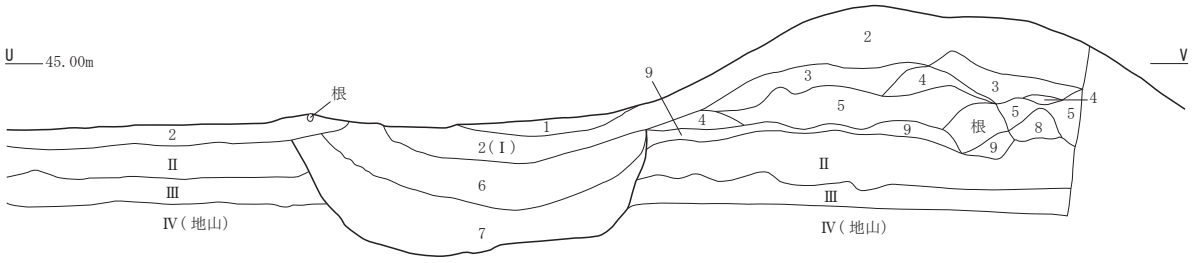
第８図　基本土層断面図（３）



土層図５　調査区東側



土層図６　調査区東側



１暗褐色（10YR 3/3）シルト 木の根・葉皮大量含む　ゴミ層
２黒褐色（10YR 3/1）シルト 木の根中量含む　表土層
３黒褐色（10YR 2/2）シルト 木の根中量　地山塊（小）少量含む　イモ穴掘削土
４黒褐色（10YR 2/3）シルト 根中量　地山塊（小～中）量含む　イモ穴全掘削土
５にぶい黄橙（10YR 6/4）粘土 木の根中量　黒色土塊（小）中量含む　掘削土
６黒褐色（10YR 3/1）シルト 根中量　地山粒少量含む
７黒褐色（10YR 3/1）シルト 根少量　地山塊（中～大）多量含む
８黒色（10YR 2/1）シルト 根少量　地山塊（小）少量含む　掘削土
９黒褐色（10YR 3/2）シルト 根少量　地山塊（小）少量含む　旧表土

0　S=1/40　2m

土層図７　調査区東側

第９図　基本土層断面図（４）

調査区西側・中央部

Ⅰ層：黒色（7.5YR2/1）植物根が入り込む　表土　層厚５～10㎝

Ⅱ層：黒褐色（7.5YR3/1）シルト　平安時代・縄文時代の遺物包含層　層厚30～60㎝

Ⅲ層：極暗褐色（7.5YR2/3）シルト　平安時代・縄文時代の遺物包含層
地山塊（極小～小）少量含む　層厚15～20㎝

Ⅳ層：褐色（7.5YR4/3）シルト　漸移層　層厚５～10㎝

Ⅴ層：黄褐色（10YR5/6）シルト　地山　鳥越火砕流堆積物（十和田八戸テフラTo-H）

調査区東側

Ⅰ層：黒色（10YR2/1）植物根が入り込む　表土　層厚５～10㎝

Ⅱ層：黒褐色（10YR3/1）シルト　平安時代・縄文時代の遺物包含層　層厚40～60㎝

Ⅲ層：褐色（7.5YR4/3）シルト　漸移層　層厚５～10㎝

Ⅳ層：黄褐色（7.5YR5/6）シルト　地山　鳥越火砕流堆積物（十和田八戸テフラTo-H）

第３節　検出遺構と出土遺物

１　検出遺構と出土遺物の概要

検出した遺構は132基で、遺物集中地点等も遺構として扱った。

縄文時代の遺構は、25基である。内訳は、土坑12基、フラスコ状土坑３基、陥し穴状遺構２基、溝状遺構１条、土器埋設遺構３基、石器製作跡１か所、遺物集中地点３か所である。

平安時代の遺構は10基である。内訳は、竪穴建物跡３棟、掘立柱建物跡１棟、土坑２基、特殊ピット４基である。

この他に、時期不明の遺構が97基ある。内訳は、焼土遺構１基、柱穴様ピット96基である。これらの遺構とは別に、調査区東端部の台地の縁には、径１ｍ前後のすり鉢状の窪みが多数確認された。掘削し土層観察を行った結果、現地表面付近から掘り込まれ、底面までの深さは１ｍ前後のものが多いことがわかった。埋土上位にビニールの切れ端を含むものも見られるため、近現代の遺構と判断した。近隣住民の実見では、近くに住む小ヶ田自治会の人々が50年ほど前まで使用していた芋貯蔵穴ではないかとの指摘があった。この他、調査区西側では直線的に延びる土塁状の高まりを２か所で確認した。この土塁状の高まりの直下には方向を同じくする溝が延びている。この溝から出土した磁器の年代から、土塁状の高まりや溝跡は近代以降に構築されたもので、土地区画等の目的で作られたものと想定される。

縄文時代の遺構

土坑	12基：SK03・05・18・25・31・35・41・43・44・45・46・47
フラスコ状土坑	３基：SKF27・30・36
陥し穴状遺構	２基：SKT15・19
溝状遺構	１条：SD26
土器埋設遺構	３基：SR06・11・13
石器製作跡	１か所：SXQ34
遺物集中地点	３か所：SX07・08、SX39

平安時代の遺構

竪穴建物跡	３棟：SI01・02・23
掘立柱建物跡	１棟：SB40
土坑	２基：SK10・37
特殊ピット	４基：SXP24・70・73・97

時期不明の遺構

焼土遺構	１基：SN04
柱穴様ピット	96基

遺物には、縄文土器、須恵器、土師器、土製品、石器、石製品、木製品（柱根１点）等がある。総量は、整理用コンテナ（内寸54×34×９㎝）換算で、約110箱である。内訳は土器が75箱（縄文時代70箱、平安時代５箱）、残りが石器・石製品35箱である。

２　縄文時代

（１）土坑（ＳＫ）

ＳＫ０３（第11・17図、図版３・13）

【位置】ＬＩ51

【検出の経緯と重複遺構】東側Ⅳ層（地山）上面で黒色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】平面形は、長軸（北－南）0.6m、短軸（東－西）0.44mの円形～楕円形である。深さは0.18mで、壁は底面から丸みを帯びて立ち上がる。

【埋土】２つに分層した。１層は、Ⅱ層に似るがⅣ層地山塊を僅かに含む。２層は、１層より薄い色調で地山塊の含有量は１層より多い。２層上面中央部がやや窪み、そこに１層がレンズ状に堆積しているが２層が沈み込んだ可能性も考えられる。土器の保存状態の良さは、埋め戻しが行われ土器が埋土により保護されたためと考える。

【出土遺物】底面から縄文時代後期前葉とみられる無文の土器胴下半部（第17図－１）が、西方向へ横倒しで出土した。土器内部には地山塊を少量含む黒色シルトが堆積しており、遺物は含まれない。

【所見】土器を埋納した土坑と考える。周辺で同様な遺構はないが、本遺構は調査区境界付近にあるため、北側調査区外に同様の遺構が分布する可能性もある。

ＳＫ０５（第11・17図、図版３・13）

【位置】ＫＲ・ＫＱ32

【検出の経緯と重複遺構】確認調査で検出された遺構である。Ⅲ層（漸移層）上面で精査を始めた。重複遺構はない。

【規模・形態】径0.5m、深さ0.16mほどの掘り方内に深鉢形土器の胴下半部を斜位に入れ、周りに土を充填させている。

【埋土】埋土、土器内ともに、地山塊を含む黒色シルトが堆積している。

【出土遺物】土器内部からの出土遺物はない。土器は、深鉢形土器胴下半部（第17図－２）で無文である。土器内底面は上げ底気味である。内外面ともに丁寧なミガキが施され、底面（接地面）もミガキ・ナデ等により平滑に仕上げられている。

【所見】土器の出土層位が他の土坑に比べ高いが、土器埋設遺構に比べると低く、似た土器を伴うＳＫ03土坑と同様の遺構と考える。

ＳＫ１８（第13図、図版３）

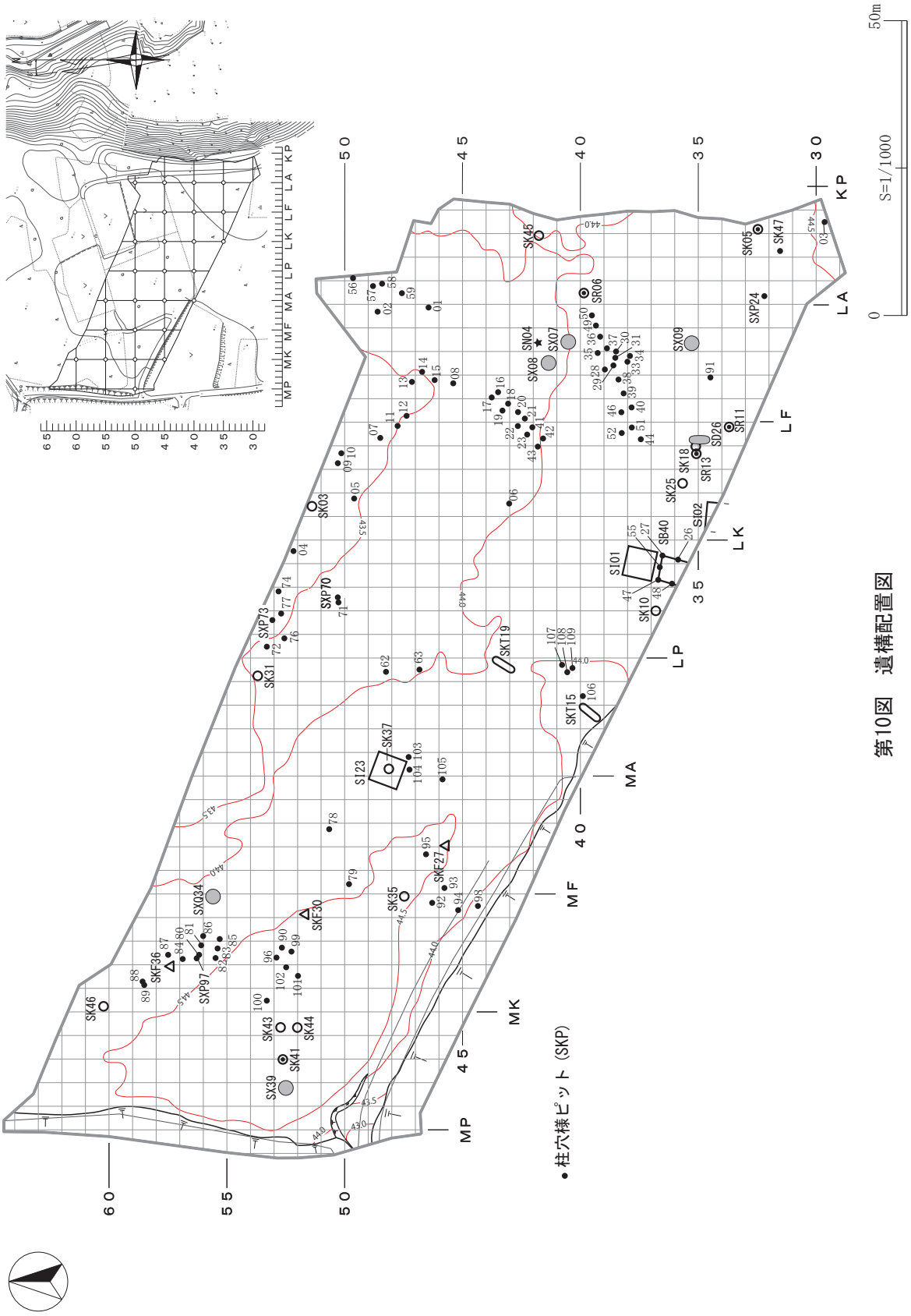
【位置】ＬＦ34・35、ＬＧ34・35

【検出の経緯と重複遺構】Ⅲ～Ⅳ層（漸移層～地山）で黒色シルトが方形状に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。ＳＤ26溝跡と重複し、本遺構が古い。

【規模・形態】平面形は、長軸（東－西）1.21m、短軸（北－南）1.09mの方形状である。深さは0.15mで、底面には起伏がみられる。

【埋土】単層である。遺構底面から上に濃い色調の黒色シルトが５cmほど堆積し、その上にⅡ層が落ち込むように堆積している。自然堆積と考えられる。

【出土遺物】なし。


S=1/1000
0
50m
KP
LA
LF
LK
LP
MA
MF
MK
MP
30
35
40
45
50
55
60
65
SK05
SK47
SXP24
SR06
SN04
SX07
SX08
SK45
SX09
SR11
SD26
SR13
SK18
SK25
SB40
SI01
SI02
SK10
SKT19
SKT15
SK03
SXP70
SXP73
SK31
SI23
SK37
SKF27
SK35
SKF30
SX034
SKF36
SXP97
SK46
SK43
SK44
SK41
SX39
●柱穴様ピット (SKP)

第10図　遺構配置図

【所見】Ⅱ層が、遺構埋土上に落ち込んでいることから縄文時代の遺構と考えられるが、性格は不明である。

ＳＫ２５（第11図、図版３）

【位置】ＬＨ35

【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）上面で黒色シルトが楕円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。古い撹乱を切って掘り込まれている。

【規模・形態】平面形は、長軸（東－西）0.73m、短軸（北－南）0.47mの楕円状である。深さは、0.2mで、底面は丸みを帯びるが起伏は少ない。

【埋土】２つに分層した。１、２層ともに極めて小さな地山塊を含む。人為堆積と考えられる。

【出土遺物】なし。

【所見】規模・形状などはＳＫ47土坑と似ており、遺物の有無に違いはあるもののＳＫ03土坑と同様の性格が考えられる。

ＳＫ３１ａ・ｂ（第11図、図版４）

【位置】ＬＰ53

【検出の経緯と重複遺構】確認調査で検出された遺構である。Ⅱ層（黒色シルト）で４つの石の重なりを確認し、遺構と判断した。断ち割りの結果、掘り込みを伴うことが判明し土坑と判断した。ａとｂに分けられ、小ピット状の部分をｂとした。ａとｂが重複し、ａの平面形が優先して見えたため、ａが新しいと判断した。

【規模・形態】ａは長軸（南－北）0.65m、短軸（東－西）(0.45)m、深さ0.28m、ｂは長軸（東北東－西南西）(0.26)m、短軸（北北西－南南東）(0.21)m、深さ0.27mの規模である。積石の長軸方向は、概ね北東－南西方向を示している。平面形は、ａ・ｂともに楕円形だったと考えられる。ａの壁の立ち上がりは底面から急角度で立ち上がるが、開口部付近でやや開く。ｂは残存部が少ないため形状は不明な部分が多い。ａ・ｂとも底面は概ね平らである。

【埋土】ａは３つに分層した。１、２層とも黒～黒褐色シルトを基調とする層であり、１層は炭化物を、２層は地山土を僅かに含む。３層は、木の根等により撹乱を受けた可能性がある。ｂは黒色シルトの単層で、混入物は認められない。１、２層ともにしまりは強い。ａについては人為堆積と考えるが、ｂは不明である。

【出土遺物】礫４点が出土した。各礫の長さは20㎝前後で、棒状のもの、断面が楔状のもの等があるが、全ての礫に平たい面が認められる。各礫の大きさは、Ｓ１が18.7×8.1×5.0㎝で1,025ｇ、Ｓ２が15.6×14.0×7.3㎝で2,230ｇ、Ｓ３が18.1×11.1×6.8㎝で1,840ｇ、Ｓ４が18.4×4.0×7.7㎝で2,160ｇである。Ｓ１には磨面が、Ｓ２は被熱の痕跡が認められる。

【所見】本遺構周辺から積石と同じレベルで縄文時代後期の遺物が出土しているため、同時期の遺構と考えられる。積石は土坑直上の縄文期の地表面付近にあることから、土坑の位置を示す目印として機能していたと推測する。周辺では同じくらいか一回り大きな礫が比較的多く出土しているため、北に接する深く削平された旧水田部分には、同様の遺構が存在していた可能性がある。また、本遺構近くからは板状土偶片が出土しているため、周辺域で祭祀等が行われた可能性もある。

ＳＫ３５（第12図、図版４）

【位置】ＭＦ47
【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）上面で黒色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。
【規模・形態】平面形は、長軸（北東－南西）0.6ｍ、短軸（北西－南東）0.56ｍの円形である。深さ0.31ｍで、底面はほぼ平らであり、壁は急角度で立ち上がる。
【埋土】２つに分層した。１・２層とも主たる砕屑物に副たる砕屑物である地山塊を一定量含むため、一括埋め戻しによる堆積の様相を示していると考える。
【出土遺物】なし。
【所見】覆土は、ＳＫＦ27・30フラスコ状土坑と似ており、遺構の形状・規模はＳＫ43土坑に似る。
ＳＫ４１（第12・17図、図版４・５・13・14）
【位置】ＭＬ・MM52
【検出の経緯と重複遺構】Ⅱ層（黒色シルト）下位で横倒しの縄文土器を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。
【規模・形態】平面形は、長軸（南－北）0.47ｍ、短軸（東－西）0.38ｍの円形である。深さは、0.11ｍで、底面には凹凸がある。底面は地山を数㎝掘り込んだ深さにある。
【埋土】２つに分層した。１層は黒褐色シルトで、本来下位の２層と同じ状態だったと考えられるが、土壌化の進行によりⅡ層との識別が困難である。２層は暗褐色シルトで、Ⅳ層塊を少量を含む人為堆積土と考える。
【出土遺物】凹凸のある底面に一部接するが、全体的には少し浮いた位置から横倒し状態の土器が出土した。第17図－４は深鉢形土器の胴部のみで半周分しかない。上からの圧力で潰されたためか、おおよその形を保ちつつ、やや捻れた状態で割れている。土器は無文地に沈線文が描かれている。間隔を空けて施された横位沈線間に、入り組み文風の文様と斜位沈線による文様が描かれている。土器内面には丁寧なミガキが施されている。これとは別個体の土器口縁部（第17図－３）が１点だけ出土している。連続的に山形突起が配置されるとみられる土器で、口縁に沿う沈線とその下位に沈線による渦巻文が施されている。
【所見】規模等から、近接するＳＫ43・44土坑等と同じ性格の遺構と考える。復元できた方の土器（第17図－４）には、口縁部・底部が見られず胴部のみで、かつ半周だけという特殊なあり方を示している。土器が遺構底面からやや浮いた状態にあることから、ａ；土坑底面に置かれた何らかのものに土器を被せた、ｂ；土坑底面に残された掘り上げ土上に土器を置いた、ｃ；土坑底面に残された掘り上げ土上に置いた何らかのものに土器を被せた、以上の３点が想定される。
ＳＫ４３（第12・17図、図版５・13）
【位置】ＭＫ53
【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）上面で黒褐色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。
【規模・形態】平面形は、一辺が0.5ｍ、深さ0.24ｍの隅丸方形であり、各辺は東西南北を示す。底面は一辺が0.4ｍ強の大きさで平らである。壁は底面付近で丸味を帯び、急角度で立ち上がる。遺構南東隅は撹乱を受けている。

【埋土】３つに分層した。底面直上に薄く堆積する３層上に横倒しの状態で深鉢形土器がある。土器の中からは何も出土せず、内部の土は粗鬆状態であった。深鉢形土器を設置後、１層で人為的に埋められたものと判断する。

【出土遺物】深鉢形土器が口縁部を西壁に接し、横倒しの状態で確認された。第17図－５は、緩やかな波状口縁からほぼ直線的に胴部中央に至り、そこから底部に向かってすぼまる器形である。文様は口縁部から胴部上半に限られ、波頂部下の円形文を起点に２条の平行沈線が引かれ、その下に２条１組の沈線で緩やかな弧状文が描かれる。

【所見】出土土器から、縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。

ＳＫ４４（第12・17図、図版５・巻頭図版）

【位置】ＭＫ51・52

【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）上面で黒褐色シルトが円形に広がっているの状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。確認精査の段階で、台付深鉢形土器の底部の一部が出土した。重複遺構はない。

【規模・形態】平面形は、長軸（北－南）0.57m、短軸（東－西）0.52mの円形、深さは、0.15mである。底面の広さは上面に比べ、長短軸ともに10㎝ほど狭くなる。底面は平らで、壁は急角度で立ち上がる。

【埋土】２つに分層した。１層は黒褐色土で地山塊を僅かに含む単一層である。土器内からは何も出土せず、２層は粗鬆状態であった。台付鉢形土器を倒立させた状態で設置した後、１層で人為的に埋め戻されたものと判断する。

【出土遺物】土坑西壁に接するように、完形の台付鉢形土器が倒立した状態で確認された。第17図－６は、波状口縁頂部に擬宝珠状の突起を持つ。外反する波状口縁部から頸部で一度緩やかにすぼまって、丸く膨らみのある胴部にいたる器形で、外に開く台が付く。緩やかな波状を描く口唇部に沿って二条一組の沈線で無文部を長方形に４区画し、その下には三条一組の沈線で弧状文が器面を大きく二分割した後、沈線間にこれも三条一組の沈線で「Ｓ」字や「Ｖ」字状文が施される。台部下半には平行沈線が引かれる。台部内面と接地面には網代痕が認められ、内面の網代痕は、一度土器製作時に網代状の敷物の上に置かれていたものを、上下逆にして土器の台部に使用したと思われる。本体内面には丁寧なミガキが施される。

【所見】出土土器から縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。

ＳＫ４５（第12・18図、図版６・13）

【位置】ＫＱ・ＫＲ41

【検出の経緯と重複遺構】伐根下のⅣ層（地山）上面で縄文土器を含む黒色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】平面形は、長軸（南－北）0.46m、短軸（東－西）（0.4）mの円形である。深さは0.07mで、底面は平らである。壁は底面付近で丸味を帯び立ち上がる。

【埋土】単層であり、黒褐色シルトに地山塊を微かに含む。埋土の残存量・情報量が少なく、根による影響もあり、人為堆積か自然堆積かを判断することはできなかった。

【出土遺物】土坑底面付近を中心に同一個体の土器片が集中的に出土した。土器は横倒しになり破損

した可能性があるが、ほぼ正位状態にある土器底部より下位からも土器片が無秩序に出土している。第18図－１は深鉢形土器の胴下半部である。胴部には太い平行沈線が施され、沈線間には細いＬＲ原体の横位回転による斜縄文が充填されている。土器表面にはミガキが施され、底面（接地面）もミガキ・ナデ等により平滑に仕上げられている。土器内面には炭化物が付着している。

【所見】土器片の出土レベルや掘り方底面のレベルが縄文時代の地表面より低く、地山を掘り込んでいる点から土坑と判断した。土器の出土状態が特殊であるため、土器埋納時に破損していた可能性もある。土坑の規模はＳＫ03土坑と類似する。

ＳＫ４６（第13・18図、図版６・13）

【位置】ＭＪ60

【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）上面で暗褐色系のシルトが径40㎝ほどの範囲に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】平面形は、長軸（北東－南西）0.39ｍ、短軸（北西－南東）0.36ｍの円形である。深さは、0.19ｍで、底面は丸味を帯び中央部が深くなる。底面の広さは上面に比べ、長短軸ともに10㎝ほど狭くなる。壁は底面から急角度で立ち上がる。

【埋土】３つに分層した。底面に薄く堆積する３層上に深鉢形土器がある。土器内の堆積土は硬く締まった状態で、炭化物など他の遺物は含んでいない。１層の極暗褐色土で人為的に埋め戻されたものと判断する。

【出土遺物】土坑中央部に深鉢形土器の胴部下半が底部を西側にした状態で確認された。第18図－２は上半を欠く深鉢形土器である。ＬＲ原体の横位回転による斜縄文が施され、底部外面は二次的な加熱で中央部が剥落している。内面の調整は丁寧なミガキが施されている。

【所見】出土土器から縄文時代後期の前半と考えられる。

ＳＫ４７（第13図、図版６）

【位置】ＫＲ31

【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）上面で黒色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】平面形は、長軸（東－西）0.58ｍ、短軸（北－南）0.55ｍで円形に近い。深さ0.2ｍで、底面は平らである。壁は急角度で立ち上がる。

【埋土】単層で、黒褐色シルトに地山塊・炭化物塊を含む。

【出土遺物】土坑中央部中層で炭化物塊が出土した。放射性炭素年代測定では、3,617±26BPの数値が得られている（第４章第２節）。

【所見】規模・形状等はＳＫ25土坑と似ており、遺物の有無に違いはあるもののＳＫ03土坑と同様の性格が考えられる。

（２）フラスコ状土坑（ＳＫＦ）

ＳＫＦ２７（第13・18図、図版７・14）

【位置】ＭＣ45

【検出の経緯と重複遺構】近代の溝を掘削したところ、溝底面で黒褐色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】開口部径0.69m、最大径0.9m、底面径0.56m、深さ0.61mの、断面形がフラスコ状の土坑である。最大径は、底部よりやや上の位置にある。底部施設は見られない。
【埋土】２つに分層した。２層は、焼土粒や炭化物など人々の活動の痕跡が残る遺構周辺の土を使用し、埋め戻しが行われたことを示している。２層上面には極めて薄い炭化物層が広がっていることから、この炭化物層を境として新たな埋め戻しが行われていると理解される。
【出土遺物】埋土から縄文時代後期前葉の土器片が出土しているが、少量で副葬品を示すような内容ではない。
【所見】ＳＫＦ30フラスコ状土坑と似た規模・形状をもつ小型のフラスコ状土坑である。遺構の規模や埋土の堆積状況から大型のＳＫＦ36フラスコ状土坑とは異なる使われ方をした可能性がある。２層出土炭化物の年代測定では、縄文時代後期前葉頃の年代結果が出ている。
ＳＫＦ３０（第13図、図版７）
【位置】ＭＧ・ＭＦ50
【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）上面で黒褐色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。
【規模・形態】開口部径0.93m、底面（最大）径1.17m、深さ0.49mの、断面形がフラスコ状の土坑である。底部施設はみられない。
【埋土】２つに分層した。壁面の崩落による大きな地山塊は見られず、地山塊は副たる砕屑物として主たる砕屑物と混在する状態を示すことから埋め戻しが行われた可能性がある。
【出土遺物】本遺構検出前に確認面より上の黒色土から磨製石斧が１点出土した。
【所見】ＳＫＦ27フラスコ状土坑と似た規模・形状をもつ小型のフラスコ状土坑である。遺構の規模や埋土の堆積状況から、大型のＳＫＦ36フラスコ状土坑とは異なる使われ方をした可能性があるが、磨製石斧を遺構内出土遺物と見るならば、出土状況はＳＫＦ36フラスコ状土坑と似た状況を示すといえる。底面出土炭化物の年代測定では、縄文時代後期前葉頃の年代結果が出ている。
ＳＫＦ３６（第14・18図、図版７・14）
【位置】ＭＩ・ＭＨ57
【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）上面で黒色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。
【規模・形態】開口部径1.33m、頸部径：0.99m、底面（最大）径1.65m、深さ1.4mの、断面形がフラスコ状の土坑である。坑の最狭部は確認面から0.3mの深さにある。底面中央には浅い窪みがあり、そこから放射状に５条の浅い溝が延びている。溝底面の傾斜は、中央の窪みに向かって緩やかに下っている。溝は、長さが0.57～0.77m、幅0.05～0.1m、深さ0.04mほどで、中央の窪みは、径0.25m、深さ0.08mほどの大きさである。
【埋土】16層に分層した。Ⅱ層由来土の流れ込みと壁面の崩落土による自然堆積で埋没している。
【出土遺物】埋土上位から磨製石斧、埋土下位から円盤状土製品・石匙が出土した他、埋土中から縄文時代後期前葉の土器片や石器剥片が出土した。第18図－９は、深鉢形土器の口縁部である。口縁と平行に２本の沈線が巡り、波頂部下位には入り組み文風の沈線文が施されている。内面は丁寧なミガキが施されている。第18図－11は、磨製石斧である。刃部には刃こぼれの痕跡が確認できる。

【所見】本遺跡のフラスコ状土坑の中では最大のものである。形状から堅果類の貯蔵施設と考える。埋土出土遺物には、円盤状土製品、磨製石斧・石篦など道具として完成品の遺物が含まれるが、それらの遺物が埋没過程において意図的に持ち込まれたのか否かは不明である。17・18層出土炭化物の年代測定では、縄文時代後期前葉頃の年代結果が出ている。

（３）陥し穴状土坑（ＳＫＴ）

ＳＫＴ１５（第14図）

【位置】ＬＲ39

【検出の経緯と重複遺構】Ⅲ層（漸移層）面で、黒色シルトが北東－南西方向に４ｍほど細長く広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】平面形は、上面の長さ（北東－南西）3.71ｍ、上面の幅（北西－南東）0.35ｍ、底面の長さ4.07ｍ、底面の幅0.05～0.13ｍの線状で、深さは、0.72ｍである。主軸方向はＮ－35°－Ｅである。底面の両端は上面よりも外側に張り出しており、長軸方向の断面形は、フラスコを横に延ばしたような形状である。北端は僅かに西側に湾曲している。

【埋土】２つに分層した。２層の黒褐色シルトは遺構廃絶後に、１層の黒色シルトは基本層のⅡ層が堆積したもので、いずれも自然堆積である。

【出土遺物】なし。

【所見】縄文時代であるが、詳細な時期については不明である。

ＳＫＴ１９（第14図、図版８）

【位置】ＬＰ42・43

【検出の経緯と重複遺構】Ⅳ層（地山）面で、黒色シルトが北東－南西方向に３ｍほど細長く広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】平面形は、上面の長さ（北東－南西）3.27ｍ、上面の幅（北西－南東）0.44ｍ、底面の長さ3.4ｍ、底面の幅0.05～0.1ｍの線状で、深さは、0.91ｍである。主軸方向はＮ－29°－Ｅである。底面の両端は上面よりも外側に張り出しており、長軸方向の断面形は、フラスコを横に延ばしたような形状である。

【埋土】４つに分層した。４層は開口時、３層は遺構廃絶後の堆積層であり、２層は壁崩壊土、１層は基本層のⅡ層が堆積したもので、自然堆積である。

【出土遺物】なし。

【所見】縄文時代であるが、詳細な時期については不明である。

（４）土器埋設遺構（ＳＲ）

ＳＲ０６（第15・19図、図版７・８・13）

【位置】ＫＴ39

【検出の経緯と重複遺構】Ⅱ層（黒色シルト）下位で土器胴下半部を検出し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】深鉢形土器の胴下半部を斜位に埋設したものである。掘り方は確認できなかった。

【埋土】土器内には、黒色シルトが堆積している。

【出土遺物】土器内部からの出土遺物はない。埋設された土器は、深鉢形土器の胴下半部（第19図－

１）である。ＬＲ原体による横位回転施文ののち、磨り消し、沈線による施文が行われている。沈線文は、間隔を空けて施された横位沈線の間に、入り組み文風の文様や斜位の沈線が施されている。沈線は二本一組が基本となっている。内面には丁寧なミガキが施され、底面（接地面）もミガキ・ナデ等により平滑に仕上げられている。

【所見】掘り方は、土器と同じくらいの大きさであったと考えられる。

ＳＲ１１（第15・19図、図版８・13）

【位置】ＬＦ33

【検出の経緯と重複遺構】Ⅱ層（黒色シルト）下位で土器胴下半部を検出し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】長軸（北東－南西）0.53m、短軸（北西－南東）0.45m、深さ0.1mほどの掘り方内に深鉢形土器の胴下半部を斜位に入れ、周りに土を充填させている。杉根の貫入による撹乱を受けているため保存状態は悪い。

【埋土】土器内には、黒褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】土器内部からの出土遺物はないが、土器内面に少量の炭化物が付着している。埋設された土器（第19図－２）は、深鉢形土器胴下半部で無文ある。土器内底面は上げ底気味である。内外面ともに丁寧なミガキが施され、底面（接地面）もミガキ・ナデ等により平滑に仕上げられている。

【所見】残存状態は悪いが、土器の角度・掘り方等から土器埋設遺構と判断できる。

ＳＲ１３（第15・19図、図版８・14）

【位置】ＬＧ35

【検出の経緯と重複遺構】Ⅱ層（黒色シルト）下位で土器胴下半部を検出し、精査を経て遺構と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】径0.55m、深さ0.14mほどの円形の掘り方をもつと考えられる。

【埋土】埋設土器内部、掘り方内部ともに黒色シルトが堆積している。

【出土遺物】土器内部からの出土遺物はない。埋設された土器（第19図－３）は、小型の深鉢形土器である。土器上半部の摩滅・劣化が著しく、接合できたのは胴下半部のみであった。一部で僅かに沈線を確認できるが、文様の詳細は不明である。底面は、ナデ・ミガキ等で平滑に仕上げられている。

【所見】掘り方が大きく土器も横位であるため、ＳＫ03土坑と同様の土坑の可能性も考えられる。

（５）溝状遺構（ＳＤ）

ＳＤ２６（第13図）

【位置】ＬＦ34・35

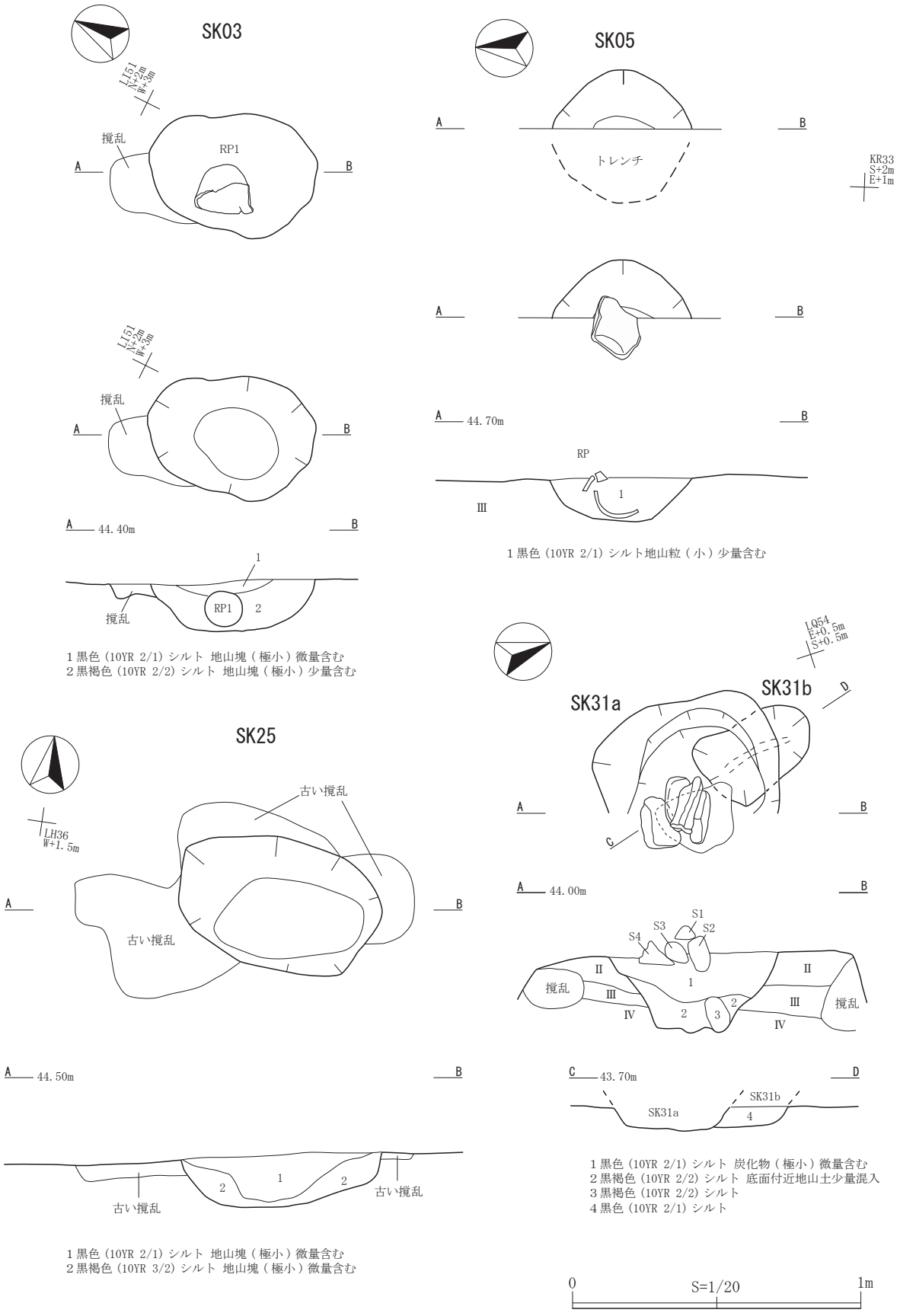
【検出の経緯と重複遺構】Ⅲ～Ⅳ層（漸移層～地山）で黒色シルトが線状に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。ＳＫ18土坑と重複し、本遺構が新しい。

【規模・形態】平面形は、長軸（北－南）(3.2) m、短軸（東－西）(0.59) m、深さ、0.09mの浅い溝である。底面はほぼ平らである。

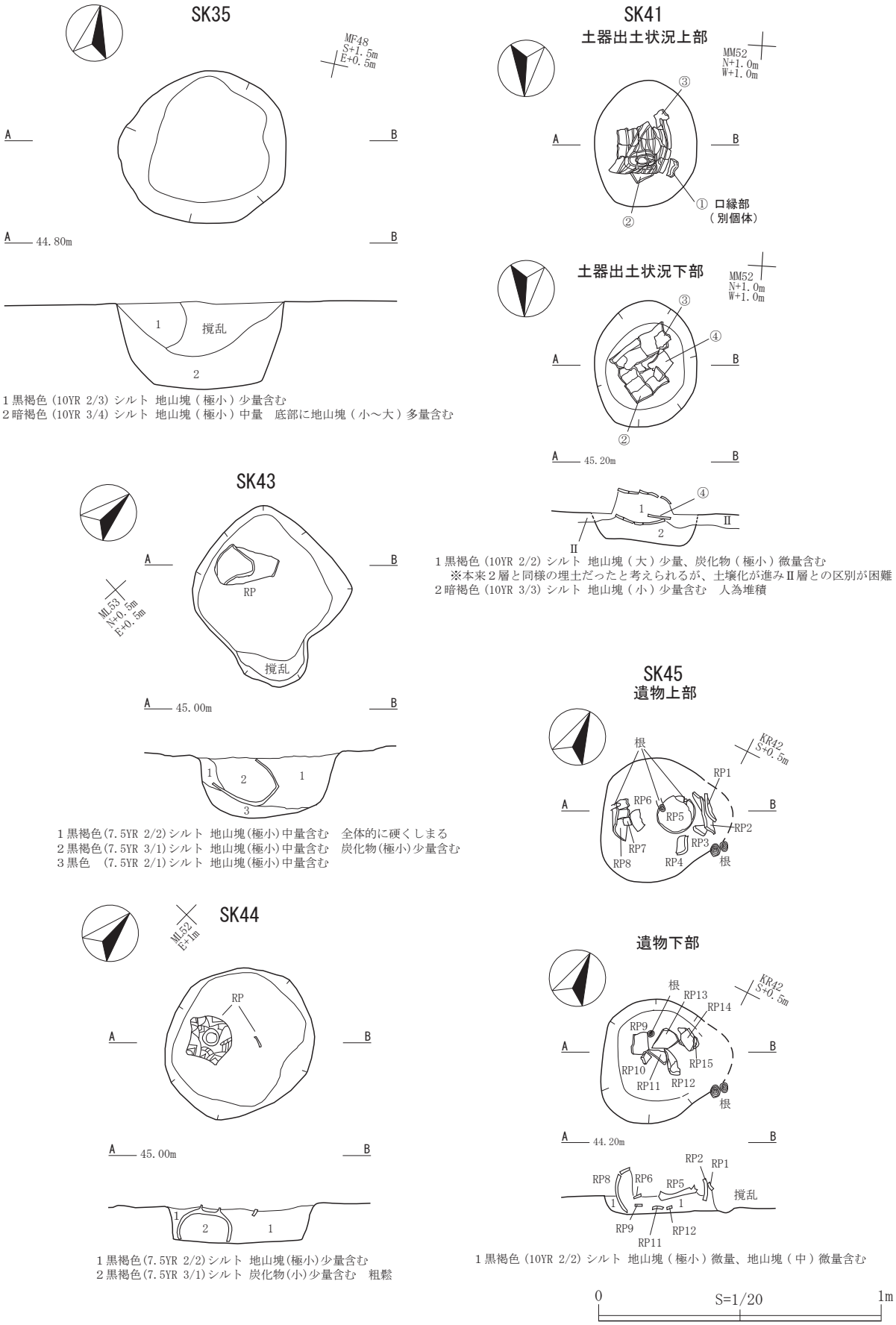
【埋土】単層で、黒みが強くしまりのある黒色シルトが堆積している。

【出土遺物】なし。

【所見】埋土上にⅡ層が堆積していることから縄文時代の遺構と推測されるが、性格は不明である。



第 11 図　SK03・05・25・31a・31b



１黒褐色（10YR 2/3）シルト 地山塊（極小）少量含む
２暗褐色（10YR 3/4）シルト 地山塊（極小）中量　底部に地山塊（小～大）多量含む

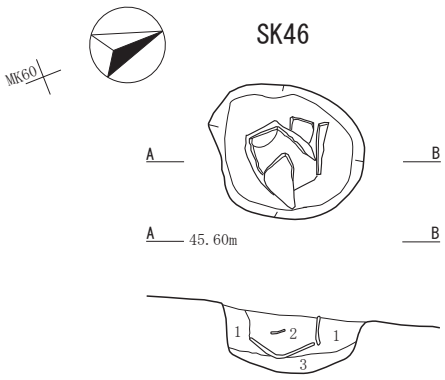
１黒褐色（10YR 2/2）シルト 地山塊（大）少量、炭化物（極小）微量含む
※本来２層と同様の埋土だったと考えられるが、土壌化が進みⅡ層との区別が困難
２暗褐色（10YR 3/3）シルト 地山塊（小）少量含む　人為堆積

１黒褐色(7.5YR 2/2)シルト 地山塊(極小)中量含む　全体的に硬くしまる
２黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(極小)中量含む　炭化物(極小)少量含む
３黒色　(7.5YR 2/1)シルト 地山塊(極小)中量含む

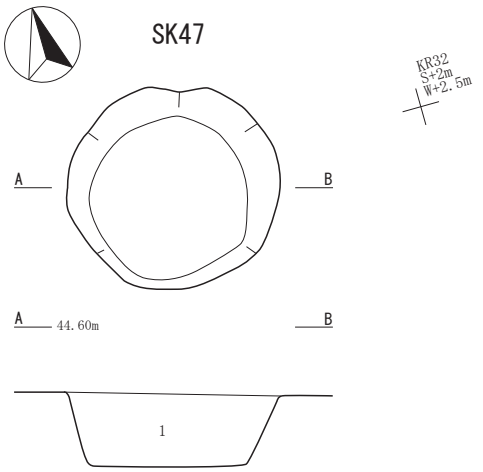
１黒褐色(7.5YR 2/2)シルト 地山塊(極小)少量含む
２黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 炭化物(小)少量含む　粗鬆

１黒褐色（10YR 2/2）シルト 地山塊（極小）微量、地山塊（中）微量含む

第 12 図　SK35・41・43・44・45

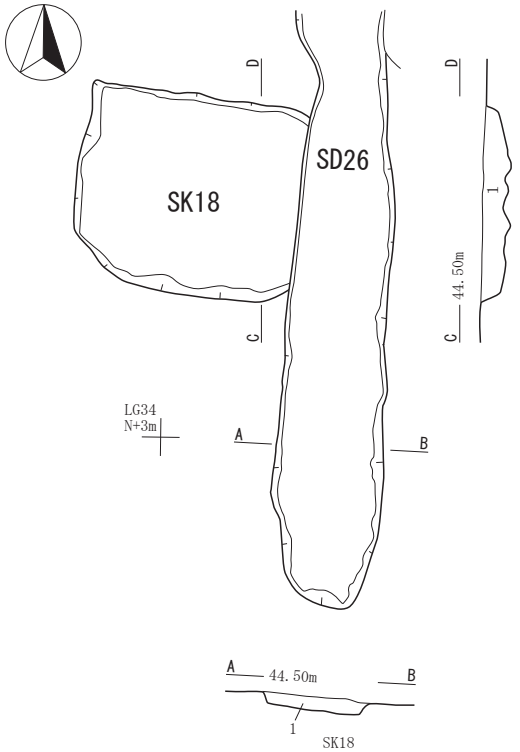


１極暗赤褐色(2.5YR 2/3)シルト 地山塊(極小)中量含む
　炭化物極小、少量含む　掘り方埋土か
２黒褐色(7.5YR 2/2)シルト 硬くしまりあり　炭化物など一切含まず
３黒色(7.5YR 2/1)シルト 地山塊(極小)少量含む

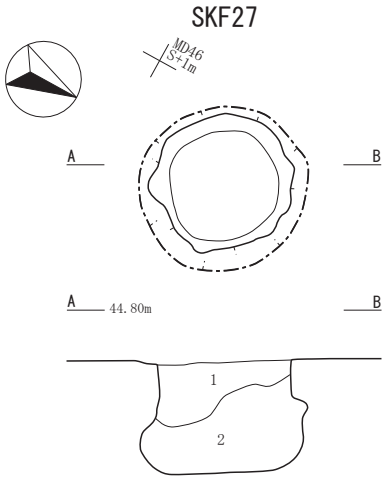


１黒褐色（10YR 2/3）シルト 地山粒（極小）小量含む

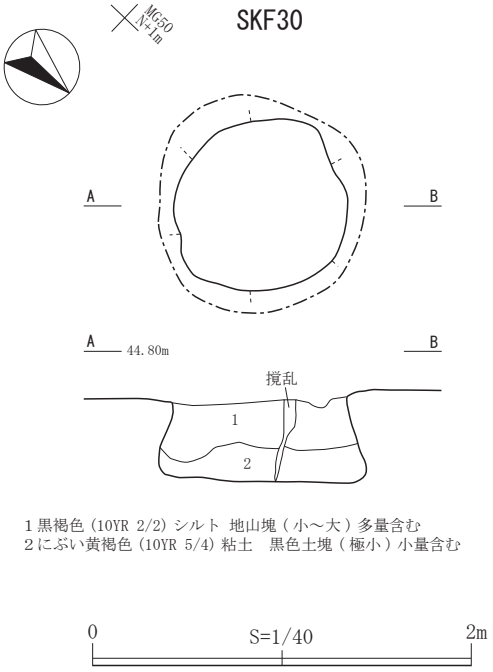
0　S=1/20　1m



SK18
１黒色（10YR 2/1）シルト
SD26
１黒色（10YR 1.7/1）シルト



１黒褐色（10YR 3/2）シルト 地山塊（小～大）中量含む
２にぶい黄褐色（10YR 4/3）シルト Ⅱ層地山の土の混合土
　地山塊（小～中）中量　焼土塊（極小）少量　炭化物（極小～小）中量含む

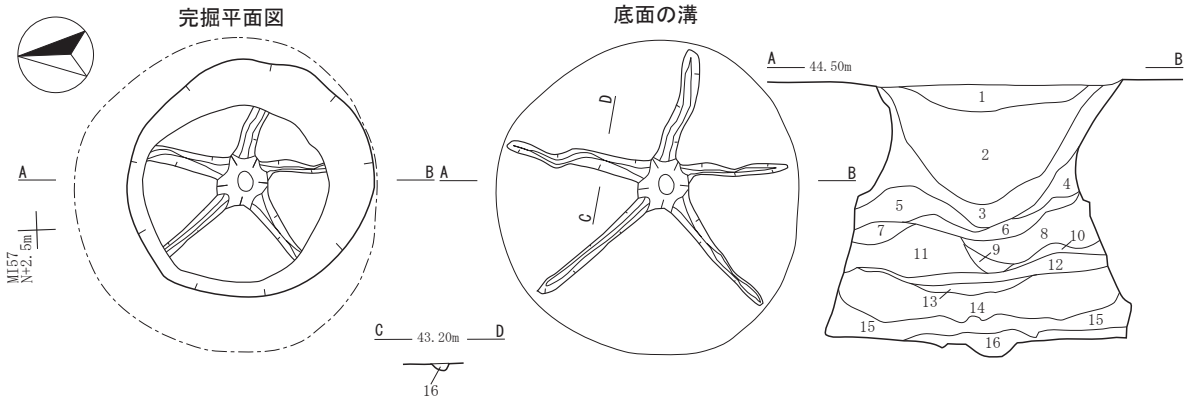


１黒褐色（10YR 2/2）シルト 地山塊（小～大）多量含む
２にぶい黄褐色（10YR 5/4）粘土　黒色土塊（極小）小量含む

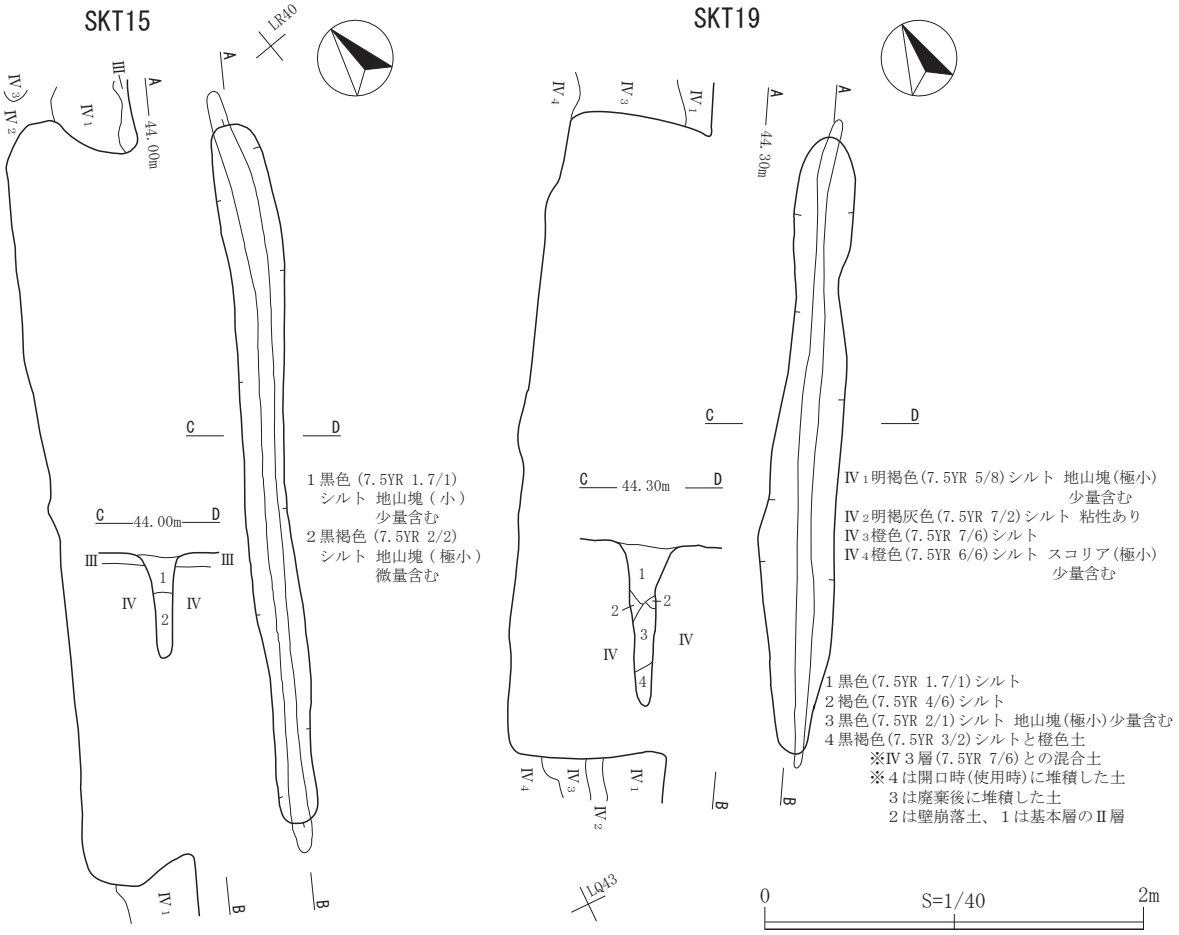
0　S=1/40　2m

第 13 図　SK46・47・18、SD26、SKF27・30

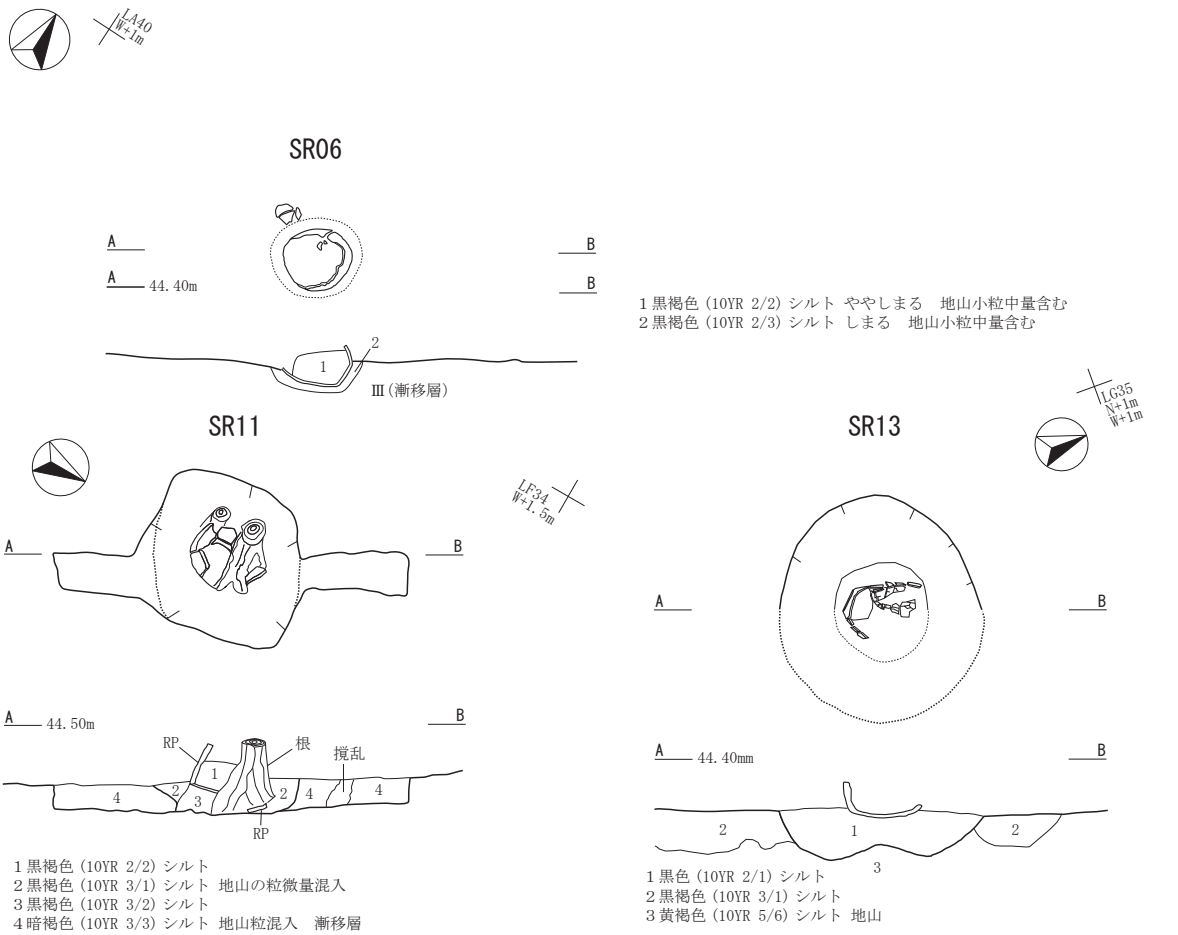
SKF36



１黒色（10YR 2/1）シルト 白色塊（極小）少量含む　Ⅱ層由来土を主体
２黒色（10YR 2/1）シルト 地山塊（極小～小）少量、炭化物（極小）微量含む　Ⅱ層由来土を主体とするが地山粒を含み若干黄色を帯びる
３黒褐色（10YR 2/2）シルト 地山塊（小～中）中量含む　２層と同様だが地山粒が多く、より黄色く見える
４黒褐色（10YR 2/3）シルト 地山塊（極小～小）多量含む　地山粒が多く黄色を帯びる
５黄褐色（10YR 5/6）シルト～砂 地山粒・塊（極小～中）多量に含む　Ⅱ層由来土、Ⅲ層由来土、層状に混入　壁面崩落土
６黒色（10YR 2/1）シルト 地山塊（極小～小）少量含む　Ⅱ層由来土の自然堆積
７暗褐色（10YR 3/3）シルト 地山粒・塊（極小～中）多量含む　Ⅳ層に近いⅢ層由来土を主体
８黄褐色（10YR 5/6）シルト～砂 地山粒・塊（極小～中）多量に含む　Ⅱ層由来土、Ⅲ層由来土、層状に混入　壁面崩落土
９黒色（10YR 2/1）シルト 地山塊（小～中）少量含む　黒みが強い
10 暗褐色（10YR 3/3）シルト 地山粒・塊（極小～中）多量含む　Ⅲ層由来土を主体とするが、地山粒・塊を含むため若干黄色を帯びる
11 黄褐色（10YR5/6）シルト～砂 地山粒・塊（極小～中）多量含む　Ⅱ層由来土、Ⅲ層由来土、層状に混入　壁面崩落土
12 黄褐色（10YR5/6）シルト～砂 地山粒・塊（極小～中）多量含む　Ⅱ層由来土、Ⅲ層由来土、ラミナ状に混入　壁面崩落土
13 黒色（10YR 2/1）シルト 地山塊（小）少量含む　混入物が少なくかつ均一　自然堆積
14 黒褐色（10YR 2/2）粘土～シルト 地山粒・塊（極小～中）少量含む　自然堆積
15 黒褐色（10YR 2/2）シルト 地山塊（小～中）多量含む　14 層より地山塊が大きい　壁面からの崩落土か　焼土塊（中）を多量含む
16 黒色（10YR 2/1）シルト 地山粒（極小～小）少量含む　自然堆積か



第 14 図　SKF36、SKT15・19



第 15 図　SR06・11・13

（６）石器集中地点（ＳＸＱ）

ＳＸＱ３４（第16図、図版８）

【位置】ＭＦ55

【検出の経緯と重複遺構】西側Ⅱ～Ⅲ層で石器の集中地点を確認し、石器製作跡と判断した。重複遺構はない。

【規模・形態】遺物は、長軸（北西－南東）2.5m、短軸（北東－南西）1.4mほどの範囲に分布する。

【出土遺物】剥片が52点、時期不明の縄文土器２点が出土した。剥片は全て暗褐色の頁岩で、同一母岩から剥離されたものであり、表皮を残すものも含まれる。二次加工のある剥片は確認できなかった。

（７）遺物集中地点（ＳＸ）

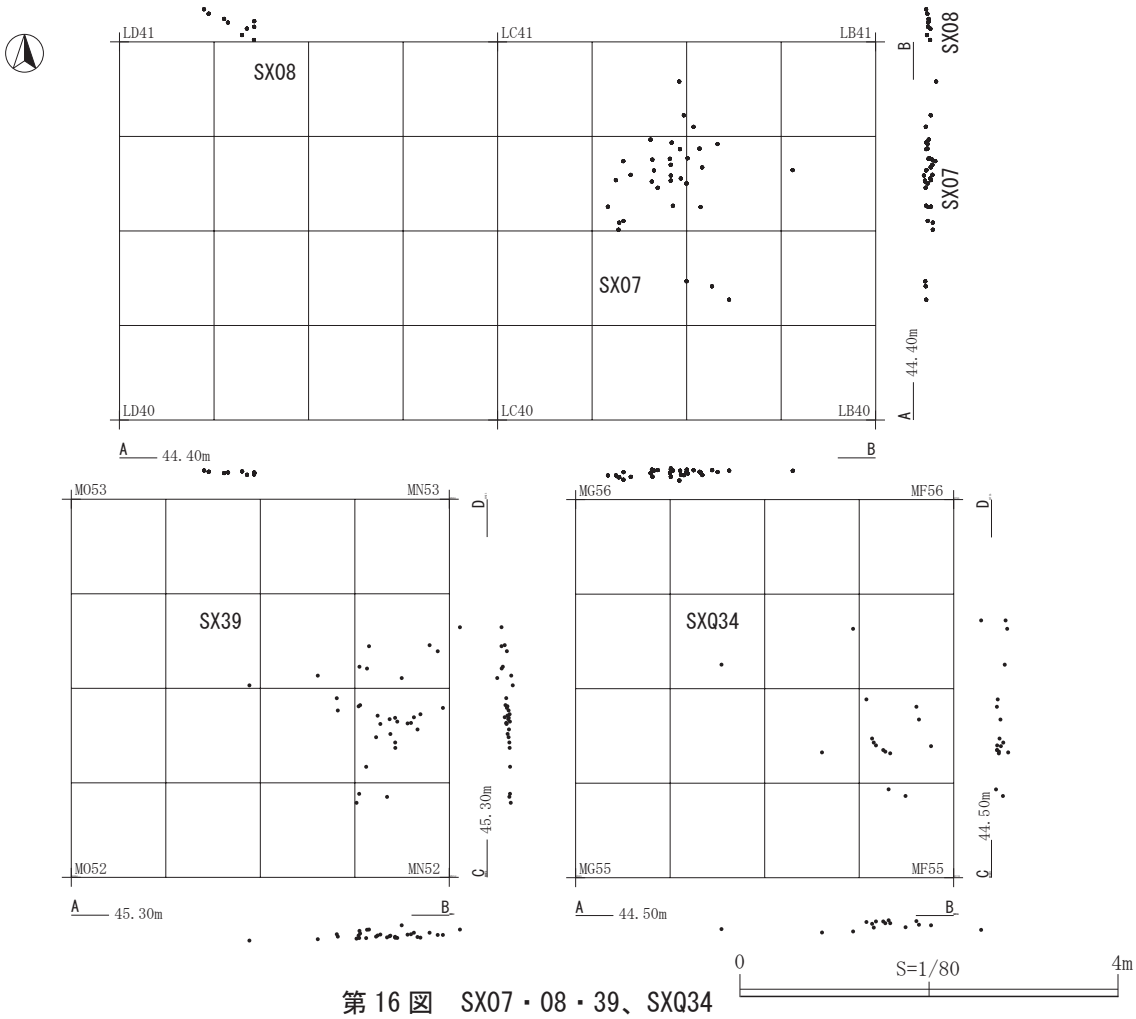
ＳＸ０７（第16・19図、図版８・14）

【位置】ＬＢ40

【検出の経緯と重複遺構】東側Ⅱ層で、土器の集中地点を確認した。重複遺構はない。

【規模・形態】遺物は、長軸（北－南）2.4m、短軸（東－西）2.2mほどの範囲に分布する。

【出土遺物】口縁部、底部を含む縄文時代後期初頭の土器片が46点出土した。第19図－５は、口縁に沿う粘土紐の貼付帯、波頂部直下に環状の貼付と垂下する貼付帯が施され、波頂部口唇には２条の沈線による刻みが施されている。口縁に沿う貼付帯下にはＬＲ原体による側面圧痕が施されている。第19図－７～９、11は同一個体である。粘土紐の貼付の後、ＬＲ縦位回転→沈線→磨消の順に施文され



第 16 図　SX07・08・39、SXQ34

たとみられ、貼付帯上にはＬＲ縦位回転の痕跡が残されている。内面のミガキは良好である。

【所見】出土遺物の年代から、縄文時代後期初葉の遺構と判断する。

ＳＸ０８（第16・19図、図版14）

【位置】ＬＣ41

【検出の経緯と重複遺構】東側Ⅱ層で、土器の集中地点を確認した。重複遺構はない。

【規模・形態】遺物は、長軸（北西－南東）0.7m、短軸（北東－南西）0.3mほどの範囲に分布する。

【出土遺物】縄文時代後期前葉の同一個体の土器片が12点出土し、６点が接合した。第19図－12は、壺形土器の口頸部である。頸部に２条の沈線が巡っているほかは無文である。

【所見】出土遺物の年代から、縄文時代後期前葉の遺構と判断する。

ＳＸ３９（第16・19図、図版８・14）

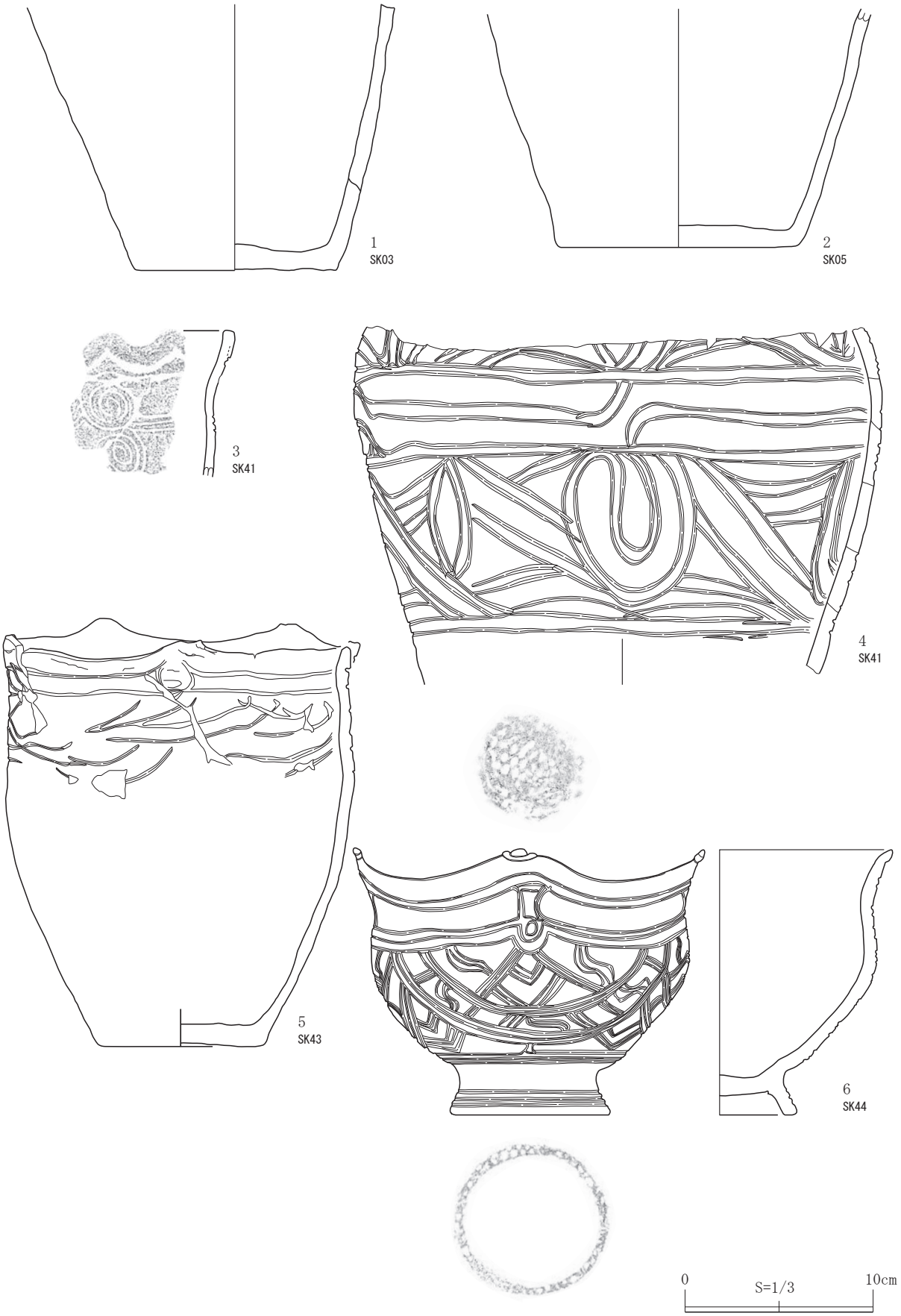
【位置】ＭＭ・ＭＮ52

【検出の経緯と重複遺構】西側Ⅱ～Ⅲ層で、土器の集中地点を確認した。重複遺構はない。

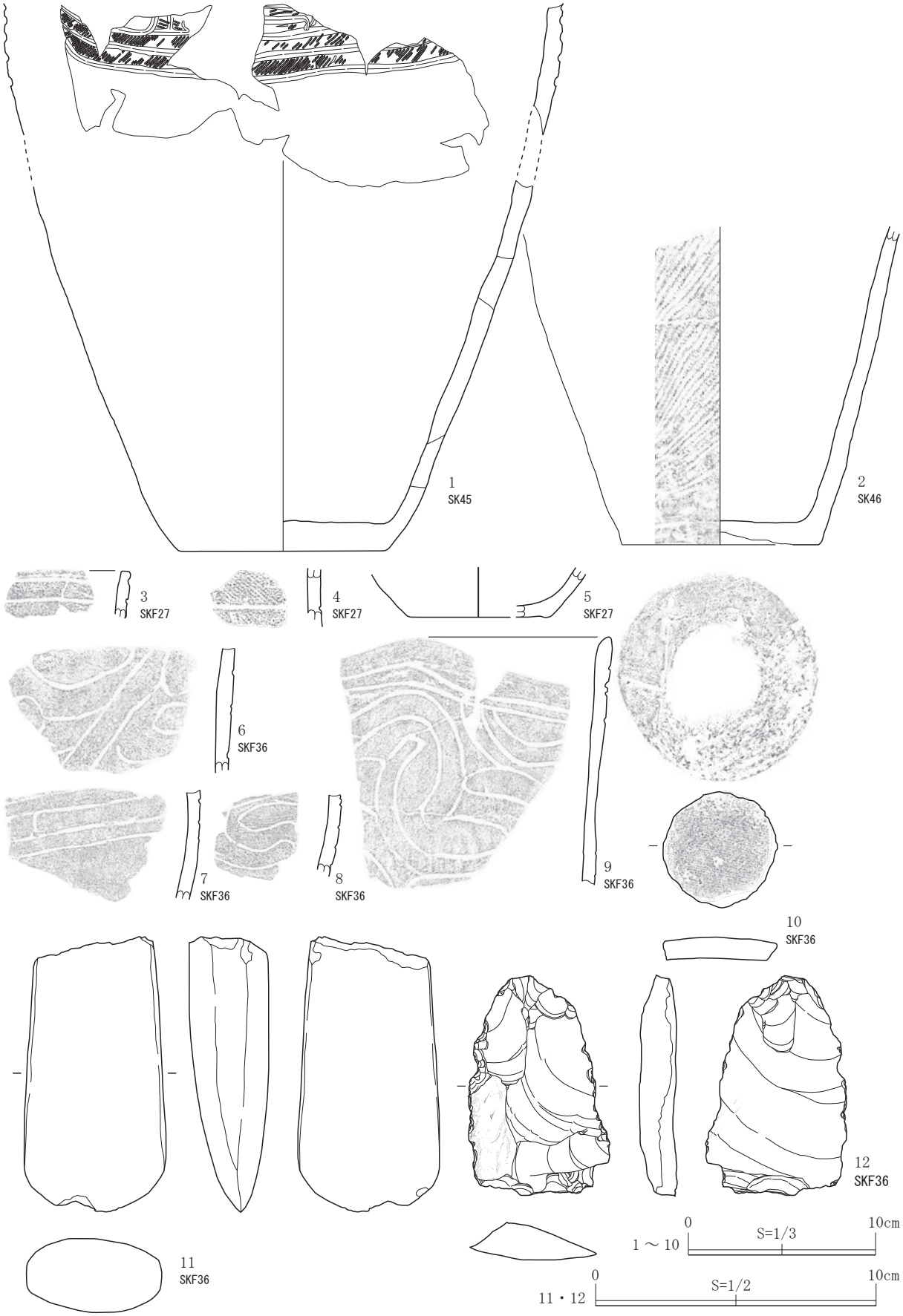
【規模・形態】遺物は、長軸（北東－南西）2.2m、短軸（北西－南東）1.7mほどの範囲に分布する。

【出土遺物】土器片が69点出土した。複数個体の土器片が含まれ、口縁部、胴部、底部等各部位の土器片がある。文様は、沈線が施されたもの（第19図－14・15・17）、単軸絡条体の回転施文による網目状文が施されたもの（第19図－16）がある。

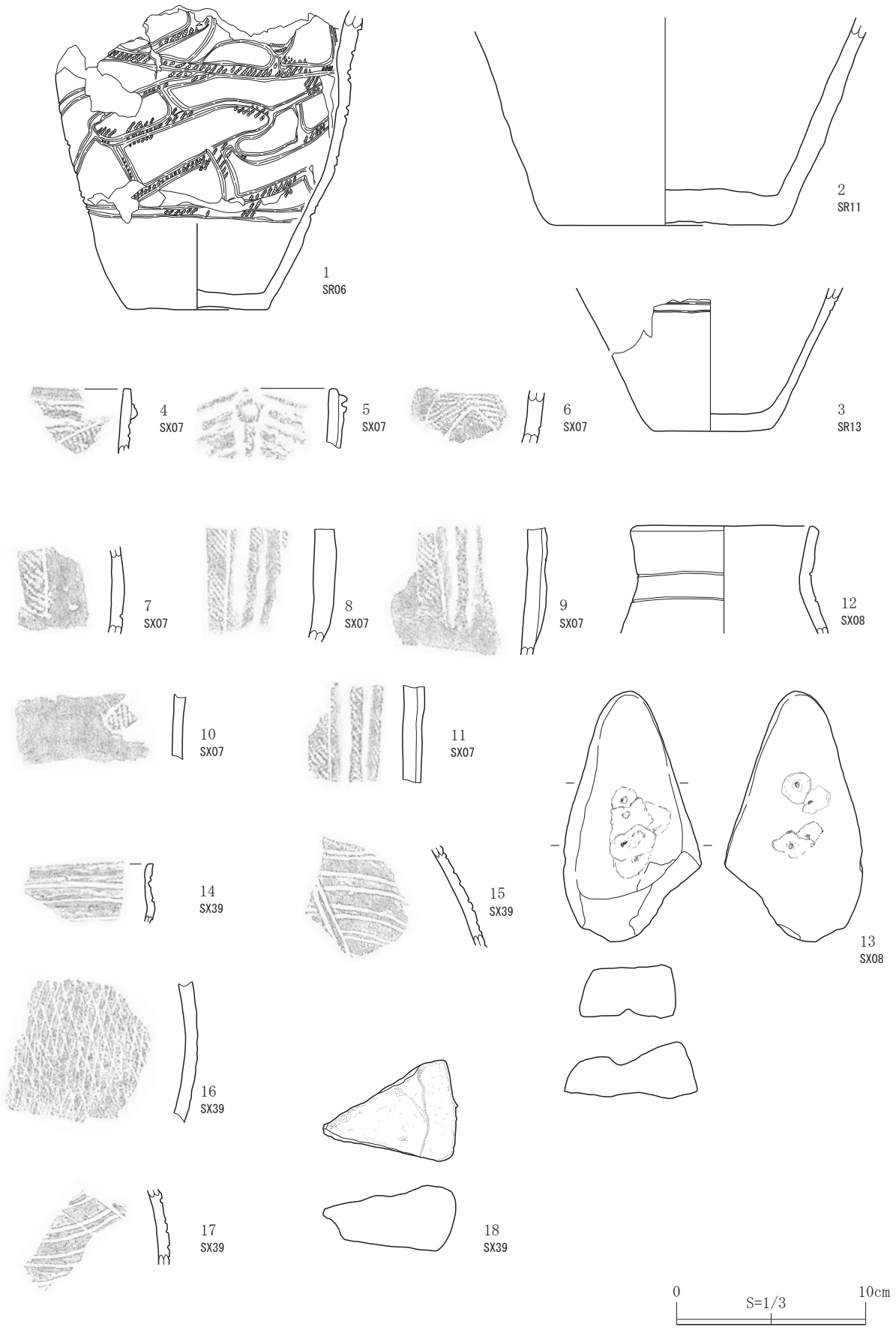
【所見】出土遺物の年代から、縄文時代後期前葉の遺構と判断する。



第 17 図　遺構出土遺物（SK03・05・41・43・44）



第 18 図　遺構出土遺物（SK45・46、SKF27・36）



第 19 図　遺構出土遺物（SR06・11・13、SX07・08・39）

３　平安時代

（１）竪穴建物跡（ＳＩ）

ＳＩ０１ａ・ｂ（第20～23・28図、図版９・15）

【位置】ＬＫ・ＬＬ36、ＬＫ・ＬＬ37、ＬＫ・ＬＬ38

【検出の経緯】Ⅳ層(地山)上面で、黒色シルトが４ｍほどの方形に広がっている状態を確認した。さらに、この広がりを囲むように北・東・西に壁溝と思われる幅20～30㎝の溝を確認した。

【重複】２枚の貼り床層とそれぞれに対応する柱穴から、新旧２つの時期に分けられ、同じ場所で建て替えが行われていることが判明した。古い方をａ、新しい方をｂとする。建て替えの手法は、ａ竪穴を10～15㎝ほど埋め戻して新たな床面とし、当初のプランの外側に竪穴を広げ壁溝を巡らせ一回り大きなｂ竪穴を構築している。これにより、古いａ竪穴に伴う遺構は貼り床２によって完全に覆われ、また、ａ竪穴の壁も内部空間の拡張に伴う掘削により上部が失われた状態となっている。以下、ａとｂに分け個別に詳細を報告する。

ＳＩ０１ａ（貼り床１上面を床面とする竪穴建物跡）

【規模・形態】平面形は、東・西壁が4.3ｍ、北・南壁が4.7ｍと方形に近い。主軸方向はＮ－17°－Ｅである。床面（貼り床１上面）からｂの床面までの高さは10～15㎝ほどである。なお、床面（貼り床１上面）から掘り方底面までの深さは20㎝前後である。

【柱穴】主柱穴はＰ６・１・４・13の４基であり、柱間隔は、Ｐ６－2.1ｍ－Ｐ１、Ｐ13－2.15ｍ－Ｐ４、Ｐ６－2.65ｍ－Ｐ13、Ｐ１－2.0ｍ－Ｐ４で、台形様に配置される。

【カマド・土坑】カマドは、ＳＩ01ｂへの建て替えに際して取り壊されたと想定される。Ｋ２・３土坑の埋土中に焼土塊や地山塊が多量に含まれていることから、取り壊したカマドの構築材等で埋め戻したものと推測する。カマドの位置は、ＳＩ01ｂカマド火床面（カマド14層）下で検出した焼土面（カマド18層）が本遺構のカマドに伴う火床面と推測されるため、ＳＩ01ｂとほぼ同じ位置である南壁の西よりにあったと推定する。本遺構の火床面直下には深さ５㎝ほどの浅い窪みがある。

Ｋ１、Ｋ５土坑が本遺構に伴う。これらの土坑埋土には焼土塊が含まれるため、カマドを取り壊した際に生じたカマド構築材の残骸で土坑を埋めた可能性がある。

【埋土】床面（貼り床１）上に地山塊を含む黒色シルト８層（貼り床２）が堆積している。ＳＩ01ｂの床面整地地業に伴う人為堆積土と判断する。

【出土遺物】ＳＩ01ａに伴う遺物は確認できなかった。

ＳＩ０１ｂ（貼り床２上面を床面とする竪穴建物跡）

【規模・形態】平面形は、北・南壁が6.0ｍ、東・西壁が5.6ｍと方形に近い。主軸方向はＮ－17°－Ｅである。床面（貼り床２上面）から竪穴掘り込み確認面までの高さは30～35㎝ほどである。南壁の西寄りにカマドが付設されている。

【壁溝】ＳＩ01ａの掘り込みから東・西側では0.5ｍ、北側では1.2ｍ外側に、幅20～30㎝、深さ5～10㎝の壁溝が、東（5.1ｍ）－北（5.2ｍ）－西（5.1ｍ）とＳＩ01ａを囲むようにコ字状に巡っている。壁溝の底面には板壁の痕跡と考えられる溝に平行する細長い落ち込みがあり、この中で東と西の隅の痕跡だけが、壁溝とほぼ直角に交わっている。この部分の板材痕跡の断面観察により、根入れの深さは1.1ｍで、先端部が尖っていることが判明した。隅に配置された厚手の板材が主柱として機能し、

壁板を支えていたものと推定される。

【柱穴】主柱穴は、Ｐ５・Ｐ３・Ｐ２・Ｐ12の４本である。柱間隔は、Ｐ５－4.0m－Ｐ３、Ｐ５－2.8m－Ｐ12、Ｐ12－3.8m－Ｐ２、Ｐ２－2.8m－Ｐ３で、長方形に配置される。

【カマド】南壁の西寄りに設けられているが、カマドの覆土は天井部の崩落土であるカマド７層が主体で壊れた状態にあり、高さ20cmほどの土堤状の盛り上がりが0.9×2.3mのカマド周辺を囲む状態で確認された。燃焼部では、１.0×0.5mの範囲に火床面である硬化した焼土（カマド14層）が確認できるが、その下位には、先述したＳＩ01ａに伴う煉瓦状に非常に硬くしまった火床面（カマド18層）がある。煙道は、天井が崩落した状態にあるため、底面のみ確認できた。煙道は燃焼部から南側に1.3～1.4mの長さで延び、南端の煙出し部は、0.5×0.4mの方形で煙道底面から0.2mほどの深さのピット状の掘り込みとなる。煙道の幅は、0.5m前後である。

【埋土】住居内の覆土は全体的に地山塊を含んでいるが、自然堆積の状況を示していて、基本層のⅡ層面から掘り込まれたと判断する。４層中から６層にかけては部分的に、火山灰である５層が厚さ５cmほど堆積している。分析の結果、この火山灰は西暦915年に降下した十和田ａテフラ（Ｔｏ-ａ）であることが判明した。

【出土遺物】土師器坏や甕の破片が100点ほどと須恵器１点が出土している。第28図－１は須恵器壺の体部上半の破片で、丁寧なロクロ調整が行われ、胎土は緻密で焼成も極めて良い。肩の張る短頸壺と考えられる。土師器の坏はロクロ調整で、底部切り離しが回転糸切りである。２の坏は灯明皿に転用されている。土師器の甕は外面ヘラケズリ、内面ナデが施されている。13・15の甕はタタキ目のある長胴甕である。

【所見】南側に隣接するＳＢ40と一体をなす構造の竪穴建物と推測される。出土遺物は、９～10世紀初頭に収まる内容であり、本遺構廃絶後の堆積層から十和田ａテフラが検出されている点とも矛盾しない。

ＳＩ０２（第23・29図、図版11・16）

【位置】ＬＩ・ＬＪ34

【検出の経緯】Ⅲ層（漸移層）面で、調査区南側境界に接して黒褐色シルトが直角三角形様に広がっている状態を確認し、精査により竪穴建物跡の角周辺部であることが判明した。

【重複】なし。

【規模・形態】確認できた規模は北壁で3.6m、東壁で2.4mで、方形プランをなす竪穴建物の北東隅に相当する範囲と推測するが、壁溝や確実な柱穴は確認できなかった。

【埋土】調査区境界部の土層断面観察から、本遺構はⅡ層ないしはⅢ層から掘り込まれたと判断できる。埋土は黒褐色シルトの単層で、地山塊・炭化物が含むことから、人為的に埋め戻されたものと判断する。

【出土遺物】Ｐ１の上面の１層中から土師器坏と甕の破片が６点出土している。第29図－１は外面ヘラケズリ、内面がヘラミガキが施される甕、２はロクロ調整、３は底部切り離しが回転糸切りによる坏で、９世紀後葉～10世紀初頭に位置づけられる。

【所見】古代の竪穴建物跡の北東隅と推測され、カマドはＳＩ01同様に南壁に付設されるものと想定される。遺物の特徴からＳＩ01と同時期に廃絶されたものと判断する。

ＳＩ２３（第24・25・29図、図版10・15・16）

【位置】ＬＴ47・48、ＭＡ47・48

【検出の経緯】確認調査トレンチ精査中に焼土塊を検出し、Ⅳ層（地山）上面で周辺を精査したところ、黒色シルトが方形状に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。

【重複】ＳＫ37と重複し、ＳＫ37が本遺構を切っている（ＳＩ23→ＳＫ37）。

【規模・形態】長軸（南南東－西南西）4.9m、短軸（北北東－南南西）4.3m、深さ0.1mで方形である。主軸方位は、Ｎ－19°－Ｅである。

【埋土】８つに分層した。基本的にはⅣ層由来土塊を含む黒色シルトを主体とした人為堆積層と判断する。竪穴内南東部床面上では、焼土塊を含む褐色シルトおよび黒褐色シルトが円形状に広がっている部分を確認し、精査の結果土坑（Ｋ１、Ｋ３）の埋め戻しに伴う最上層の堆積層であることが判明した。カマドの構築材に由来する可能性がある。

【構造】４基の主柱穴と４基の壁柱穴で構成され、壁柱穴間には壁溝が巡る。南側の主柱穴２基（Ｐ14・15）と壁柱穴２基（Ｐ９・19）は現状の竪穴掘り込みの外にあるため、竪穴内部に段上の構造があった可能性がある。竪穴の壁溝は西壁側が不明瞭であり、そのほか東壁の北よりと南よりでは途切れている。北壁の壁溝は二重になっているようにも見えるため、壁の改修等を示す可能性がある。なお、壁溝や竪穴の掘り方には明瞭な工具痕が確認できる。その形状から、鋤で掘削された可能性が高い。

【カマド】南壁の西寄りにカマド跡がある。破壊されているため、袖部が僅かに残存する程度である。煙道や煙出しは確認できなかった。カマド焚き口付近に火床面があるが、竪穴掘り込み外にも焼土が存在し、Ｐ14との位置関係から南壁に対して斜めにカマドが構築されていた可能性がある。

【床面】黒色シルトとⅣ層（地山）由来土の混合土により、貼り床が広範囲に施されている。掘り方は深さ10㎝前後で、深い所では20㎝に達する。掘り方直上や貼り床層から遺物は出土しなかった。

【付属施設】本遺構に伴う土坑を４基、ピットを21基、溝１基を検出した。このうち、Ｐ５・12、Ｐ４・13は柱の差し替えによる重複と見られる。Ｐ13は柱穴様の土坑であるが、埋土から棒状礫が出土し、カマド崩壊土上に刺し込まれていた棒状礫と接合した（第29図－６、図版15）。ともに被熱しているため支脚として使用されていた可能性が高いが、一部に磨石として使用したとみられる磨面が認められることから、磨石から支脚への転用と考えられる。Ｋ３は柱穴様の土坑で、埋土上には、焼土塊を含む層が堆積している。Ｋ２・４は浅い掘り込みの土坑である。Ｄ１は、外延溝の可能性があるが、掘り込みの浅さ、長さ等で疑問が残る。

【出土遺物】埋土やカマド周辺から遺物が出土した。コンテナ１箱ほどである。カマド火床面付近で土師器坏・甕が出土した（第29図）。第29図－４は、土師器の坏である。ロクロ整形後、内外面にミガキを施している。５は坏で、ロクロ整形、底部の切り離しが回転糸切り技法による。６は、断面が隅丸四角形の磨石である。支脚へ転用されたためか全体的に被熱している。一面に平滑な磨り痕が確認できる。７は叩き目をもつ砲弾形のカメ胴部片とみられる。その他の出土遺物としては、カマド火床面採取土から炭化したアワが１点出土している（第４章第１節参照）。

【所見】本遺構を含む周辺域は、現代の開墾時の影響によるものとみられる削平がⅣ層上面にまで及び、遺構上部は飛ばされた状態にある。また、耕作機器の影響とみられる規則的な筋状の撹乱痕も一部で確認できる。以上の影響により本遺構の保存状態は良いとはいえず、不明な点も少なくないが、

南側の主柱穴２基が南壁の推定線上に位置する点が本竪穴建物跡の特徴といえる。これはＳＩ01ｂとも共通する点である。カマド底面出土炭化物の放射性炭素年代測定では、1,240±20BPの数値が得られている（第４章第２節）。

（２）掘立柱建物跡（ＳＢ）

ＳＢ４０（第20・26図、図版９）

【位置】ＬＬ35・36、ＬＫ35・36

【検出の経緯】ＳＩ01の南側のⅣ層（地山）上面で５基の柱穴を確認し、精査によりＳＩ01と一連の構造をとる掘立柱建物跡であることが判明した。

【重複】なし。

【規模・形態】桁方向が調査区境界にあるため本来の規模は不明であるが、梁行２間、桁行は１間以上あるものと想定される。各々の柱間隔はＰ１－3.2m－Ｐ２、Ｐ３－3.1m－Ｐ４、Ｐ２－4.7m－Ｐ４、Ｐ１－2.2m－Ｐ５、Ｐ３－2.2m－Ｐ５である。主軸方向はＮ－10°－Ｅである。Ｐ１・３・４は上面で径30cmほどの円形であるが、Ｐ３は１辺が40cmの方形である。深さは、確認面から30～40cmだが、Ｐ５は20cmと他の柱穴よりも浅いため、梁を支える補助的な柱の可能性がある。

【埋土】いずれも黒色(7.5YR1.7/１)土で地山塊を含むことから、人為的に埋め戻されており、調査区際で確認されたＰ４の断面から、これらの柱穴がⅡ層あるいはⅢ層上面から掘り込まれたものと判断できる。

【出土遺物】なし。

【所見】ＳＩ01と一体となる掘立柱建物跡であり、ＳＩ01同様、西暦915年の十和田火山噴火時には既に廃絶されていた建物と考えられる。

（３）土坑（ＳＫ）

ＳＫ１０（第27・29図、図版11・15）

【位置】ＬＭ・ＬＮ36

【検出の経緯】基本土層畦のⅢ層面で黒色の円形の落ち込みを確認し、周辺の精査を経て遺構と判断した。

【重複】なし。

【規模・形態】平面形は、長軸（北－南）0.8m、短軸（東－西）0.77mの円形で、深さは、0.4mである。底面は平らで、壁は急角度で直線的に立ち上がる。

【埋土】黒色(7.5YR2/1)土が主体で地山塊や炭化物を含んでいる。２層は底面直上に厚さ５cmほどで堆積しており、褐色土と橙色土の混合土で焼土や炭化物が含まれることから人為的に埋め戻されたと判断する。

【出土遺物】第29図－９の土師器坏は１層下部より出土しており、ロクロ調整で底部の切り離しは回転糸切りによる。

【所見】付近にはＳＩ01以外に古代の遺構が存在せず、出土遺物の土師器坏も９～10世紀に位置づけられることから、ＳＩ01と同時期と判断する。

ＳＫ３７（第27・29図、図版11・16）

【位置】ＬＴ47
【検出の経緯】ＳＩ23竪穴建物跡埋土中で、黒色シルトが方形状に広がっている状態を確認し、精査を経て土坑と判断した。
【重複】ＳＩ23を埋土を掘り込んでいるため、ＳＩ23より新しい。
【規模・形態】平面形は、長軸（北西－南東）1.52m、短軸（南西－北東）（1.39）mで、隅丸方形または、扇形に近い形だったと推測される。深さは0.17mである。底面は北東部がやや窪んでいるが、下位にあるＳＩ23Ｋ１埋土の沈下の影響を受けた可能性がある。壁の立ち上がりは、北東部以外は急角度で立ち上がる。
【埋土】３つに分層した。全て埋め戻しによる堆積と考える。
【出土遺物】両面にミガキが施された土師器椀口縁が１点（第29図－10）出土した。
【所見】本遺構を含む周辺域は、開墾時の影響によるものとみられる削平がⅣ層上面にまで及び、遺構上部は飛ばされた状態にある。残存する情報が少なく、遺構の性格は不明である。
（４）柱穴様特殊ピット（ＳＸＰ）
　特殊ピットとしたものは、柱が斜めに入れられた柱穴と推測される遺構であり、４基検出した。柱の角度は、25°～70°で、当初から斜めの角度で柱材を設置しているのが特徴である。この種の遺構の中でＳＸＰ70には柱根が残存し、年代測定では本遺跡検出の竪穴建物跡出土炭化物と大差ない数値が示された（第４章第２節）。このため、同種の他の遺構も同時期のものとみなしここで扱うことにする。
ＳＸＰ２４（第27図、図版11）
【位置】ＫＴ32
【検出の経緯】Ⅳ層（地山）上面で黒褐色シルトが円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。
【重複】なし
【規模・形態】平面形は、長軸（北－南）0.66m、短軸（東－西）0.39mの楕円形で、深さは、0.47mである。底面は遺構南側上端部から南方向に７㎝ほどオーバーハングした位置にあり、北から南に向けて約50°の角度で遺構が掘り込まれている。西側の壁は急角度である。
【埋土】２つに分層した。１層は柱痕跡、２層は掘り方埋土と考えられる。
【出土遺物】なし。
【所見】掘り込みが明確で、壁面も安定しているため、当初から柱を斜めに差し込むための穴として掘り込まれたものであることがわかる。掘り込みの方向から、柱は北に傾くように設置されたと推定できる。
ＳＸＰ７０（第27図、図版11）
【位置】ＬＭ50
【検出の経緯】Ⅳ層（地山）上面で黒色シルトが楕円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。
【重複】ＳＫＰ71と重複し、本遺構が新しい。
【規模・形態】平面形は、長軸（東－西）0.71m、短軸（北－南）0.53mで円形に近く、深さは、1.

06ｍである。底面は遺構東側上端部から東方向に30㎝ほどオーバーハングした位置にあり、西から東に向けて約70°の角度で遺構が掘り込まれている。底面付近には、柱根が残存する。

【埋土】黒色シルトの単層であるが、壁面付近で地山塊が少量認められる。黒色シルトのみの部分が柱痕跡、地山を含む部分が掘り方埋土の可能性がある。

【出土遺物】底面付近から柱根が出土し、樹種同定の結果、トチノキであることが判明した（第４章第１節）。また、放射性炭素年代測定では、1,274±24BPという数値が得られている（第４章第２節）。

【所見】特異な形状ではあるが、掘り込みが明確で、壁面も安定しているため、柱の抜き取りに伴う壁面の乱れによって結果的に生じた形状ではないことがわかる。本遺構は、当初から柱を斜めに差し込むための穴として掘り込まれたものであり、掘り込みの方向から柱は西に傾くように設置されたと推定できる。

ＳＸＰ７３（第27図、図版11）

【位置】ＬＮ53

【検出の経緯】Ⅳ層（地山）上面で黒色シルトが楕円形に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。

【重複】なし。

【規模・形態】平面形は、長軸（北東－南西）0.85ｍ、短軸（北西－南東）0.65ｍの楕円形であり、深さは、0.42ｍである。遺構内北東側に狭い底部があり、南西から北東に向かって約35°の角度で遺構が掘り込まれている。

【埋土】２つに分層したが、主体となるのは１層の黒色シルトであり、自然堆積の様相を示す。

【出土遺物】なし。

【所見】特異な形状ではあるが、掘り込みが明確で壁面も安定しているため、柱の抜き取りに伴う壁面の乱れによって結果的に生じた形状ではないことがわかる。本遺構は当初から柱を斜めに差し込むための穴として掘り込まれたものであり、掘り込みの方向から柱は南西に傾くように設置されたと推定できる。

ＳＸＰ９７（第27図、図版11）

【位置】ＭＨ56

【検出の経緯】Ⅳ層（地山）上面で、黒色系のシルトが径0.8ｍほどの範囲に広がっている状態を確認し、精査を経て遺構と判断した。

【重複】なし。

【規模・形態】平面形は径0.8ｍほどの円形で、深さは1.13ｍである。底面は南東側にオーバーハングした位置にあり、北西から南東に向かって約25°の角度で遺構が掘り込まれている。この角度に対応して斜傾する底面は、径35～40㎝の大きさである。底面は硬化しており、中央部には柱当たりと思われる青灰色のグライ化部分が認められる。

【埋土】１・２層とも黒褐色の土で締まりがあり地山塊が含まれることから、人為的に埋め戻されたものである。

【出土遺物】なし。

【所見】特異な形状ではあるが、掘り込みが明確で壁面も安定しているため、柱の抜き取りに伴う壁

面の乱れによって結果的に生じた形状ではないことがわかる。斜傾する底面と柱当たりから、当初から柱を斜めに差し込むための穴として掘り込まれたものであり、掘り込みの方向から柱は北西に傾くように設置されたと推定できる。埋土の堆積状況から、柱が抜き取られ埋め戻しが行われたと推測される。

４　時期不明

（１）焼土遺構（ＳＮ）

ＳＮ０４（第30図、図版12）

【位置】ＬＢ41

【検出の経緯】Ⅱ層（黒色シルト）中で赤みがかった褐色シルトが円状に広がっている状態を確認し、焼土遺構と判断した。

【重複】なし。

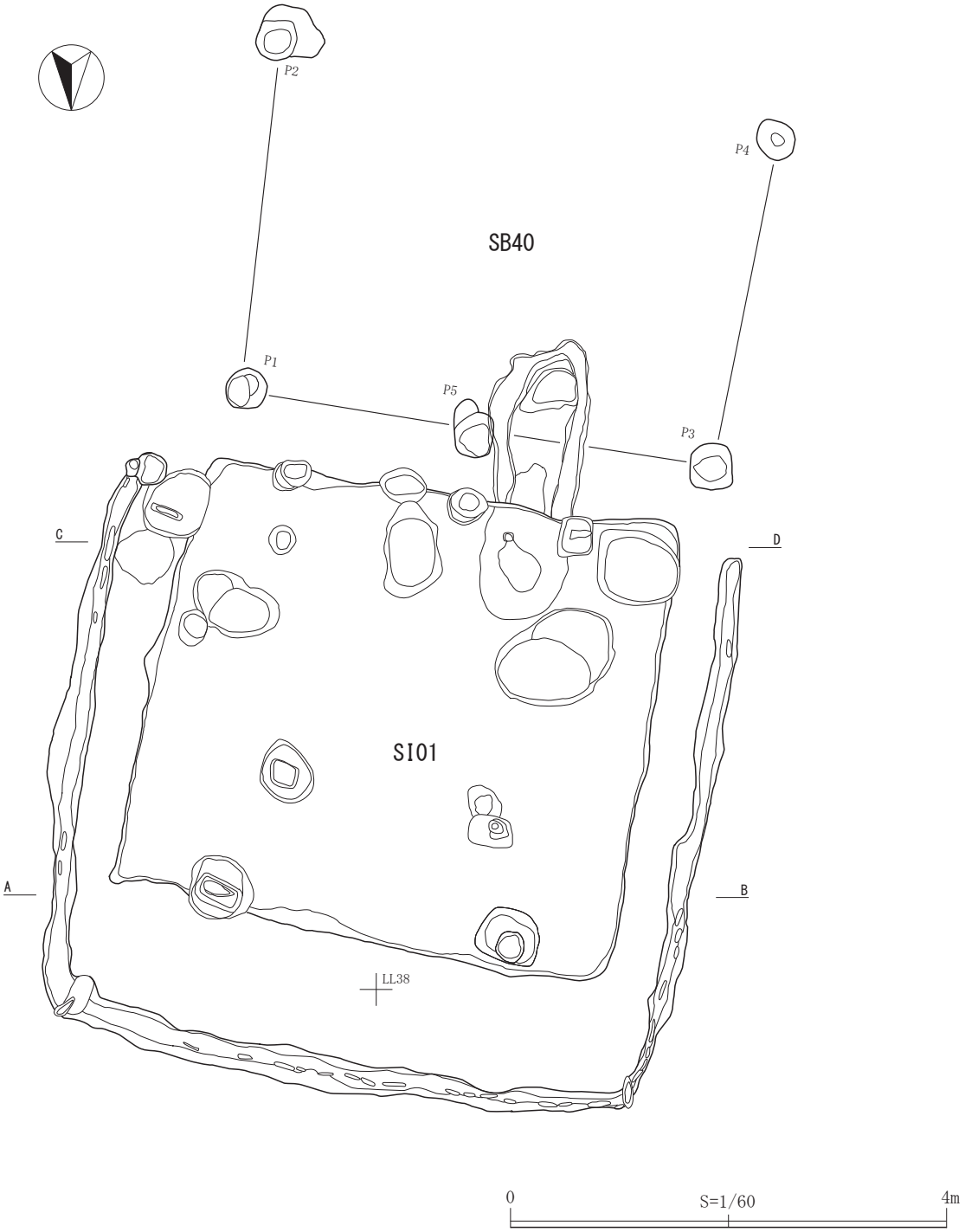
【規模・形態】平面形は、長軸（南－北）0.33ｍ、短軸（東－西）(0.24)ｍで楕円形の広がりをもつ。被熱深度は0.06ｍほどである。

【出土遺物】なし。

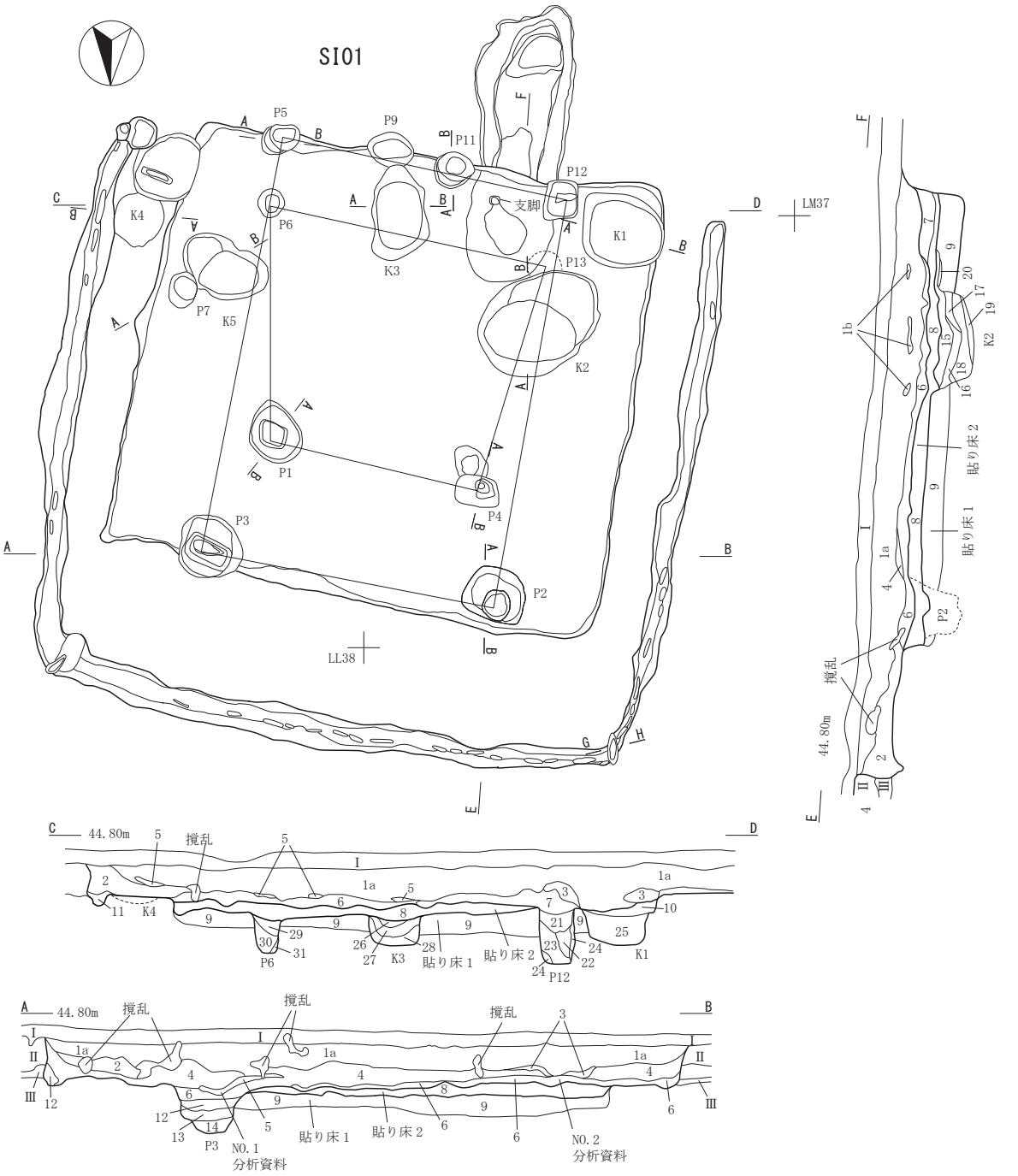
【所見】Ⅱ層上部にて確認されたが、周囲に遺物の集中地点等は見られず、時期の特定はできなかった。

（２）柱穴様ピット（ＳＫＰ　第30図、第２表）

調査区の東側を中心に96基の柱穴様ピットを検出した。ほとんどのピットが、縄文～古代の遺物包含層である黒色シルト由来とする埋土を基調とし、地山塊を含む。柱痕跡と掘り方埋土を判別できるものは少なかった。調査区東側（41～44ライン）、調査区西側（55～52ライン）の一部では、並行して列状に延びる配置も確認できるが、その時期や性格を明らかにすることはできなかった。



第 20 図　SI01、SB40



1ａ黒色（7.5YR 2/1）シルト
1ｂ黒色（7.5YR 2/2）シルト
2黒色（7.5YR 1.7/1）シルト 地山塊（小）中量含む
3黒色（7.5YR 1.7/1）シルト＋明黄褐色（2.5YR 6/8）シルト（火山灰？）
4黒褐色（7.5YR 3/1）シルト 地山塊（小）中量含む
5明黄褐色（2.5Y 6/8）シルト（火山灰）
6極暗褐色（7.5YR 2/3）シルト 地山塊（小）多量含む
7にぶい赤褐色（5YR 4/4）シルト 焼土　褐色（7.5YR 4/4）焼土
8黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊（小）中量含む
9褐色（10YR 4/6）シルト 地山塊（中）多量含む
10 黒褐色（7.5YR 2/2）シルト
11 黒褐色（7.5YR 2/2）シルト 地山塊（小）中量含む
12 黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊（中）多量含む
13 黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊
14 黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊（中）多量含む
15 黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊（小）少量含む
16 黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊（中）多量含む
17 褐色（7.5YR 4/4）シルト 赤褐色（5YR 4/8）焼土塊（小）少量含む
18 黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊（小）少量含む
19 黒褐色（7.5YR 2/2）シルト 明赤褐色（5YR 5/6）シルト 地山塊（小）多量含む
20 明赤褐色（5YR 4/4）シルト 焼土

P7
21 黒色（7.5YR 1.7/1）シルト 地山塊（極小）多量含む
22 黒色（7.5YR 1.7/1）シルト 明褐色（7.5YR 5/8）焼土塊（中）中量含む
23 明褐色（7.5YR 5/8）シルト 黒色（7.5YR 1.7/1）シルト塊（極小）中量含む
24 褐色（10YR 4/6）シルト 地山塊（中）多量含む

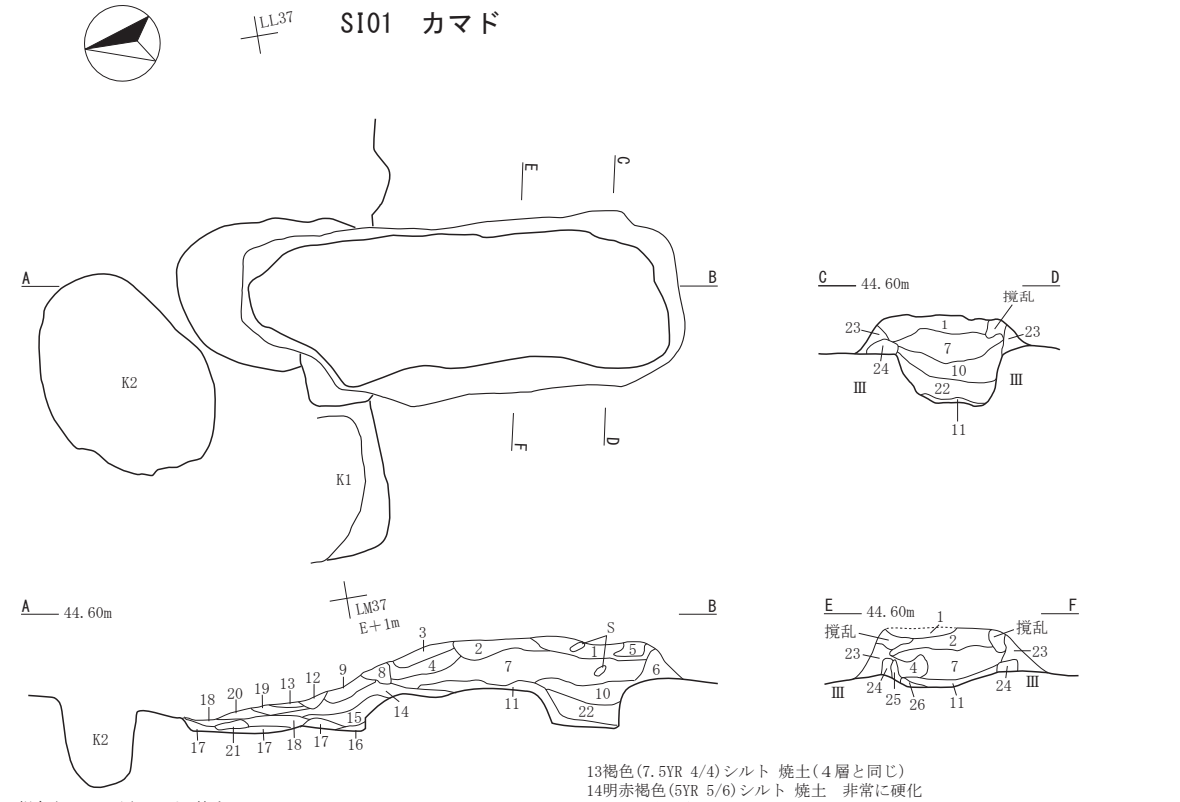
K1
25 黒色（7.5YR 1.7/1）シルト 明褐色（7.5YR 5/8）焼土塊（極小）微量含む
　赤褐色（5YR 4/8）焼土塊（小）少量含む

K3
26 黒褐色（7.5YR 3/1）シルト
27 暗褐色（7.5YR 3/4）シルト 明褐色（7.5YR 5/8）焼土塊（極小）微量含む
　褐色（7.5YR 4/4）地山塊（小）微量含む
28 黒色（7.5YR 2/1）シルト 明褐色（7.5YR 5/8）焼土塊（極小）微量含む

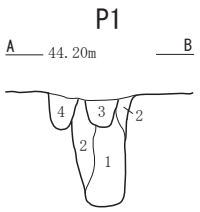
P6
29 黒褐色（7.5YR 3/1）シルト
30 黒色（7.5YR 2/1）シルト 地山塊（極小）多量含む

0　S=1/60　4m

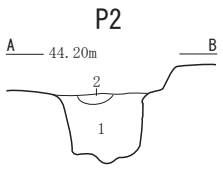
第 21 図　SI01



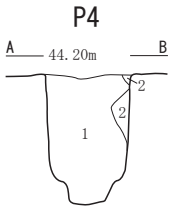
１褐色(7.5YR 4/4)シルト 焼土
２黒褐色(7.5YR 3/2)シルト 焼土
３褐色(7.5YR 4/3)シルト 焼土
４褐色(7.5YR 4/6)シルト 焼土
５褐色(7.5YR 4/6)シルトと黒色(7.5YR 2/1)シルトの混合土(撹乱)
６黒色(7.5YR 1.7/1)シルト(基本層Ⅱ層に由来か)
７にぶい赤褐色(5YR 4/4)シルト 焼土
８暗褐色(7.5YR 3/3)シルト ７層の焼土
９褐色(7.5YR 4/6)シルト 焼土(４層と同じか)
10黒褐色(7.5YR 3/2)シルト 赤褐色(5YR 4/8)焼土塊(小)中量含む
11暗褐色(7.5YR 3/3)シルト 硬くしまる
12暗褐色(7.5YR 3/3)シルト 褐色(7.5YR 4/4)焼土(Ⅰ層由来か)
塊(小)微量含む
13褐色(7.5YR 4/4)シルト 焼土(４層と同じ)
14明赤褐色(5YR 5/6)シルト 焼土　非常に硬化
15にぶい赤褐色(5YR 4/4)シルト 焼土
16黒褐色(7.5YR 2/2)シルト 明赤褐色(5YR 5/6)14層由来焼土塊(小)多量含む
17暗褐色(7.5YR 3/4)シルト 明赤褐色(5YR 5/6)14層由来焼土塊(小)多量含む
18橙色(7.5YR 6/8)シルト
19黒褐色(7.5YR 2/2)シルト にぶい赤褐色(5YR 4/4)７層由来焼土塊(小)微量含む
20黒褐色(7.5YR 3/2)シルト 明褐色(7.5YR 5/6)地山塊(極小)少量含む
21暗褐色(7.5YR 3/3)シルト 明褐色(7.5YR 5/6)地山塊(小)多量含む
22褐色(7.5YR 4/6)シルト 焼土　明赤褐色 (5YR 5/6)焼土塊(小)中量含む
23黒褐色(7.5YR 2/2)シルト 地山塊(極小)中量含む
24黒褐色(7.5YR 3/2)シルト 地山塊(極小)中量含む
25暗褐色(7.5YR 3/3)シルトと３層との混合土
26褐色(7.5YR 4/4)シルト
Ⅲ漸移層



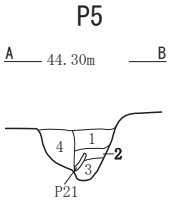
１黒褐色(7.5YR 3/1)シルト
２黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(小)多量含む
３黒色(7.5YR 2/1)シルト
４黒色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(極小)少量含む



１黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(小)少量含む
２オリーブ褐色(2.5Y 4/6)シルト 火山灰か



１黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(小)微量含む
２黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(小)多量含む

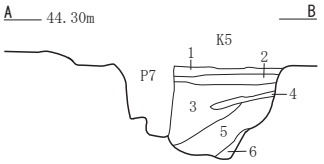


１黒色(7.5YR 2/1)シルト
２黒褐色(7.5YR 3/1)シルト
３黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(小)少量含む
４黒色(7.5YR 2/1)シルト 地山塊(極小)多量含む

0　S=1/40　1m

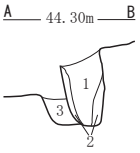
第22図　SI01 カマド・柱穴

K5・P7



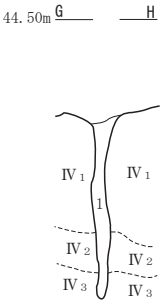
１黒色(7.5YR 1.7/1)シルト 地山塊(極小) 微量含む
２黄褐色(7.5YR 8/8)シルト 地山塊で構成
３黒褐色(7.5YR 3/2)地山塊(極小)中量含む
明赤褐色(５YR 5/3)焼土塊(極小)中量含む
炭化物(極小)中量含む
４黄橙色(7.5YR 8/8)シルト 地山塊 で構成
５黒褐色(7.5YR 2/２)シルト 地山塊(極小)少量含む
６黒色(7.5YR 2/1)シルト 地山塊(極小)少量含む

P11



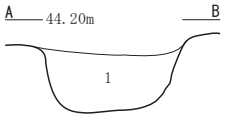
１暗褐色(7.5YR 3/3)シルト
明褐色(7.5YR 5/8)の地山塊(小)少量含む
２橙色(7.5YR 6/6)粘質土　掘り方埋土
３黒色(7.5YR 1.7/1)シルト

SI01 北西隅壁板痕跡



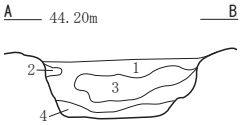
１黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(極小)少量含む
IV1 明褐色(7.5YR 5/8)シルト 黄橙色(7.5YR 7/8)の地山塊(極小)少量含む
IV2 暗褐灰色(7.5YR 7/2)シルト 粘質あり　植物の根を多量含む
IV3 橙色(7.5YR 7/6)シルト スコリア(極小)中量含む

K1



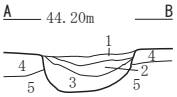
１黒色(7.5YR 1.7/1)シルト
明褐色(7.5YR 5/8)焼土塊(極小)微量含む
赤褐色(5YR 4/8)焼土塊(小)少量含む

K2



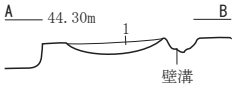
１黒色(7.5YR 1.7/1)シルト
２黒色(7.5YR 1.7/1)シルト 地山塊(極小)多量含む
３黒色(7.5YR 1.7/1)シルト 明褐色(7.5YR 5/8)焼土塊(中)中量含む
４明褐色(7.5YR 5/8)シルト 黒色(7.5YR 1.7/1)シルト塊(極小)中量含む

K3



１黒褐色(7.5YR 3/1)シルト
２暗褐色(7.5YR 3/4)シルト
明褐色(7.5YR 5/8)焼土塊(極小)微量含む
褐色(7.5YR 4/4)地山塊(小)微量含む
３黒色(7.5YR 2/1)シルト
明褐色(7.5YR 5/8)焼土塊(極小)微量含む
４黒褐色(7.5YR 3/1)シルト
褐色(7.5YR 4/4)シルト 地山塊(中)多量含む
５褐色(7.5YR 4/4)シルト 地山

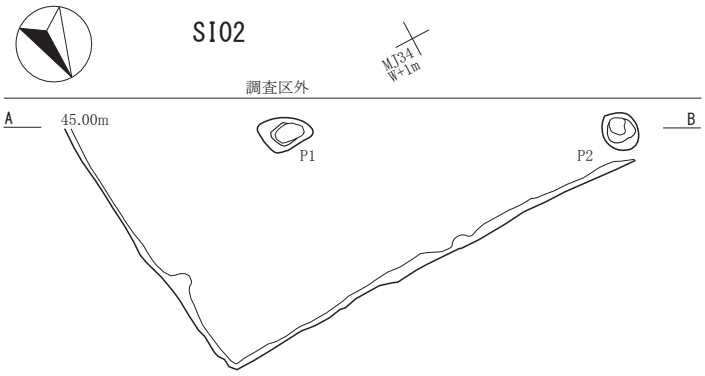
K4



１褐色(7.5YR 4/6)焼土

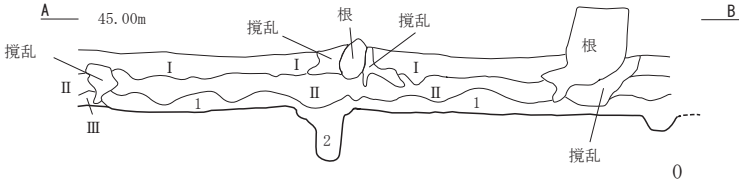
0　S=1/40　1m

SI02



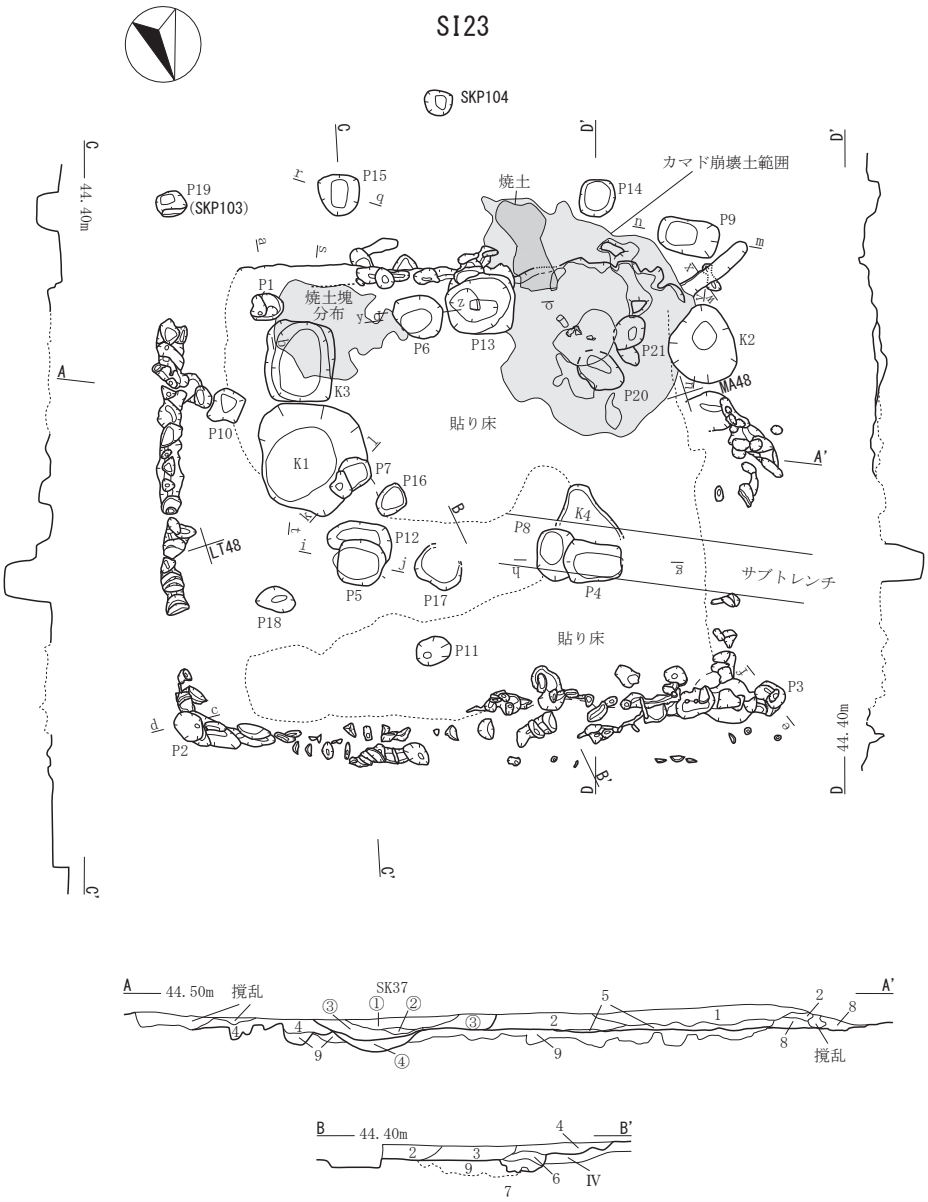
Ⅰ黒色(7.5YR 2/1)シルト 基本層位Ⅰ層
Ⅱ黒色(7.5YR 1.7/1)シルト 基本層位Ⅱ層
Ⅲ黒褐色(7.5YR 3/1)シルト＋褐色(7.5YR 4/3)シルト
基本層位Ⅲ層（漸移層）

SI02埋土
１黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(小)中量含む
炭化物(極小)微量含む
２黒褐色(7.5YR 3/1)シルト 地山塊(極小)多量含む
炭化物(極小)微量含む



0　S=1/60　4m

第 23 図　SI01 柱穴・土坑、SI02

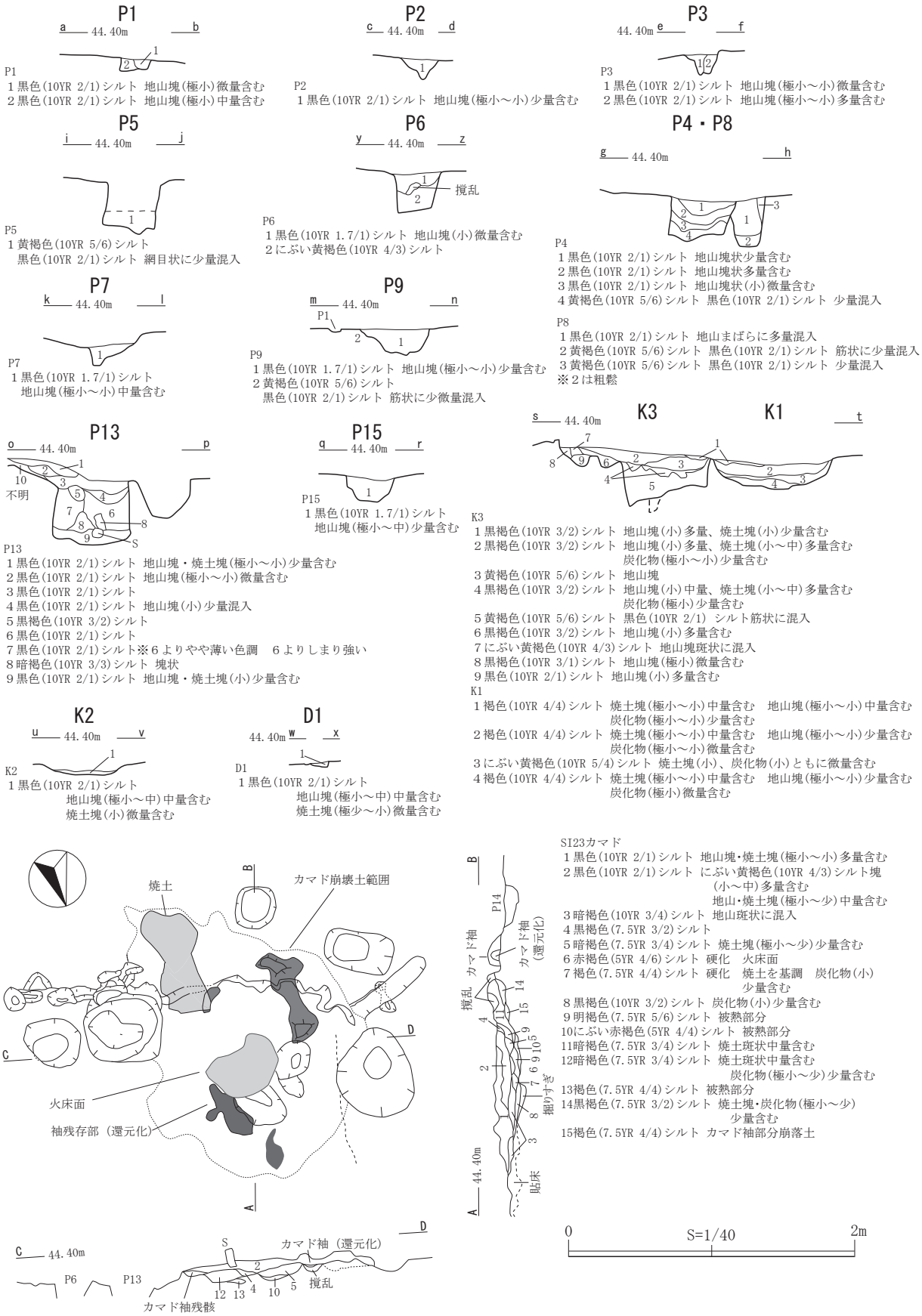


① 黒色(10YR 2/1)シルト 地山塊状に多量混入
② 黄褐色(10YR 5/6)シルト 地山塊(軽石含む)
③ 黒色(10YR 2/1)シルト 地山塊(極小～小)少量含む
④ SI23 K1の２層

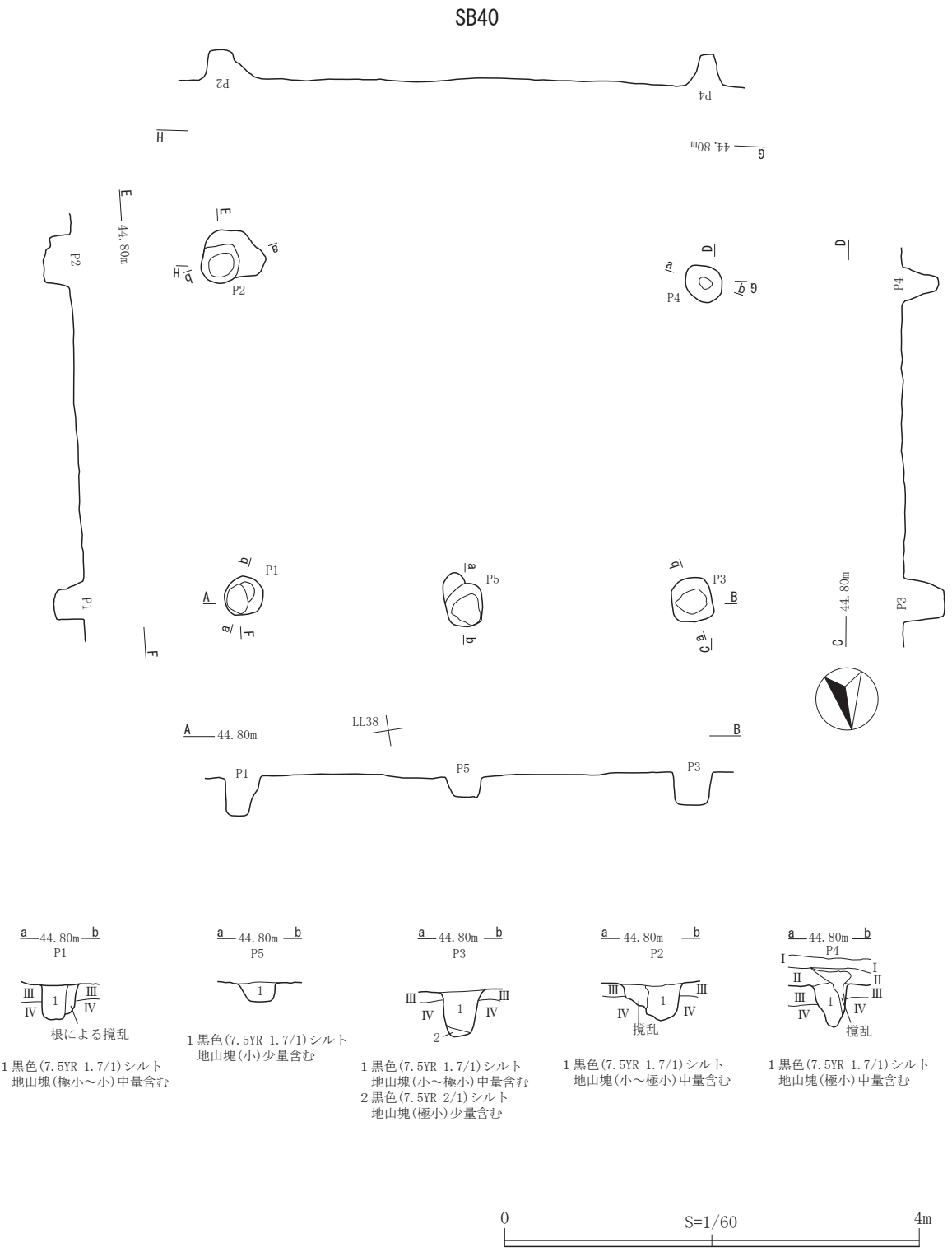
SI23埋土
１黒色(10YR 2/1)シルト 地山塊(極小)少量含む
２黒色(10YR 2/1)シルト 地山塊(極小～小)中量含む
３黒色(10YR 2/1)シルト 地山塊(極小～小)少量含む
４黒褐色(10YR 2/2)シルト 地山塊(極小～小)中～多量含む
５黒色(10YR 2/1)シルト 地山塊(極小)微量含む
６黄褐色(10YR 5/6)シルト(地山塊) 黒色(10YR 2/1)シルト微量混入
７黄褐色(10YR 5/6)シルト(地山塊) 黒色(10YR 2/1)シルト 中量含む
８黒色(10YR 2/1)シルト 黄褐色(10YR 5/6)シルト 微量含む
９黄褐色(10YR 5/6)シルト(地山塊)と黒色(10YR 2/1)シルトの混合土

0　S=1/60　4m

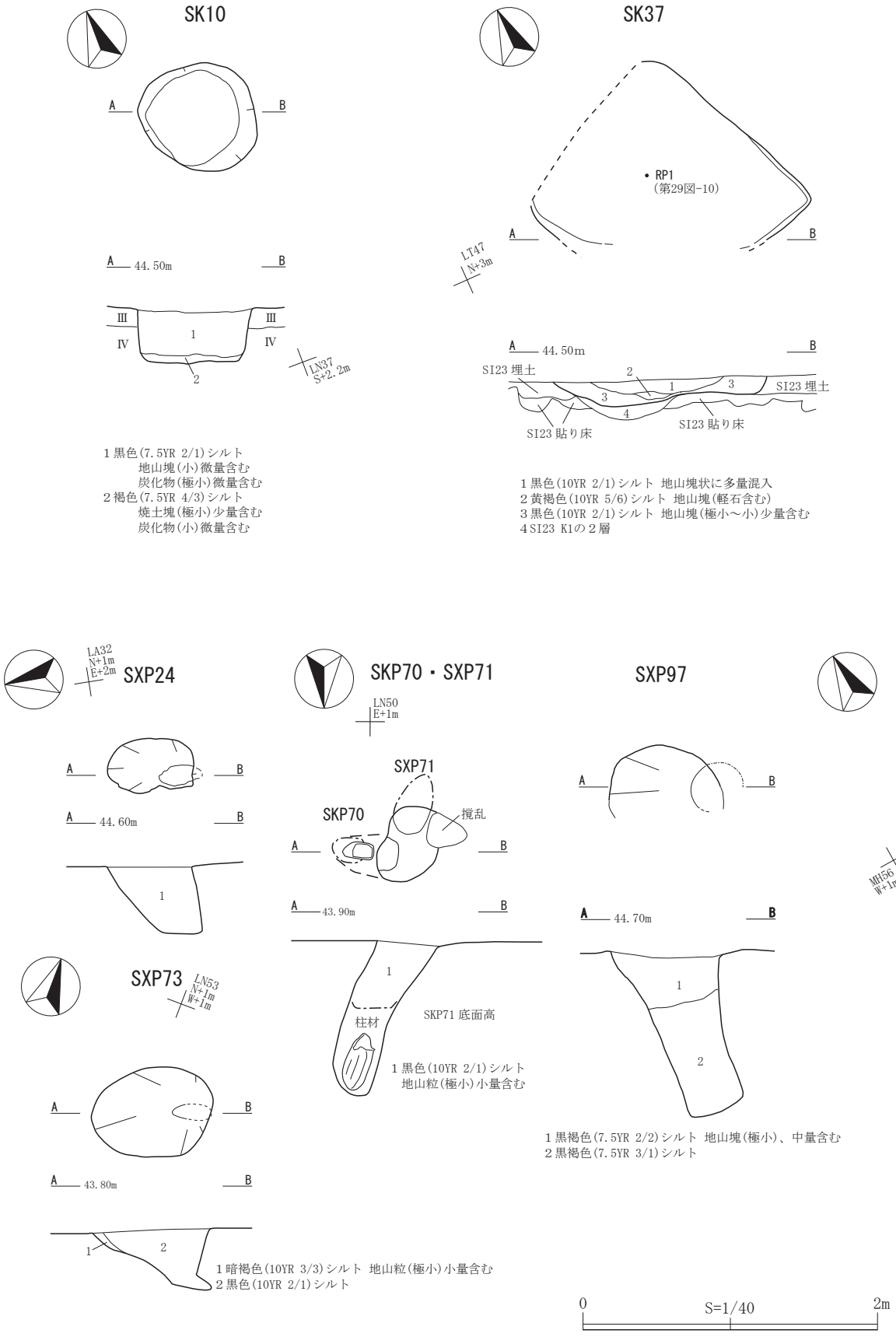
第24図　SI23



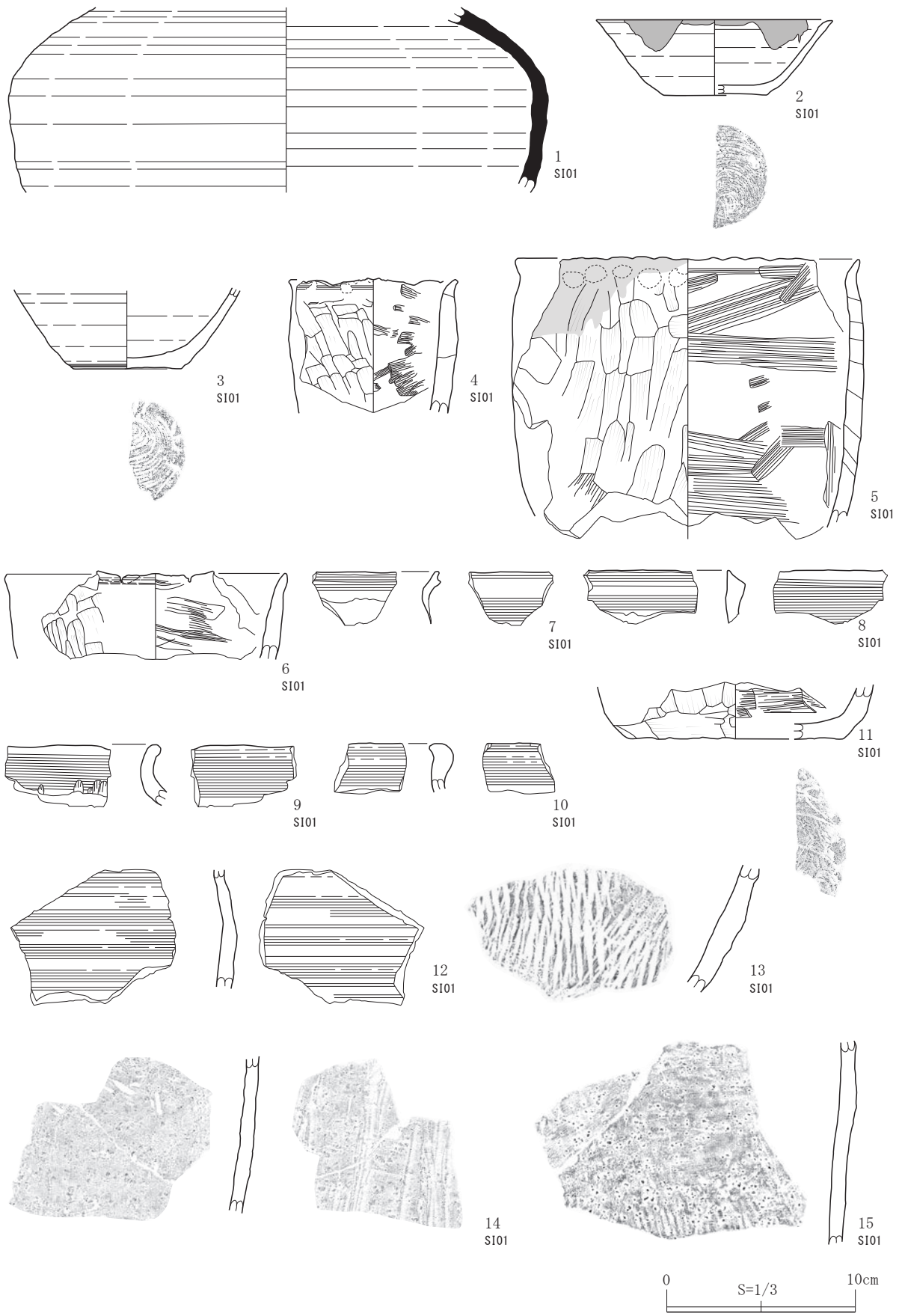
第 25 図　SI23 柱穴・土坑・溝・カマド


SB40
P1
P2
P3
P4
P5
LL38
A
B
C
D
E
F
G
H
44.80m
根による撹乱
撹乱
1 黒色(7.5YR 1.7/1)シルト
地山塊(極小～小)中量含む
1 黒色(7.5YR 1.7/1)シルト
地山塊(小)少量含む
1 黒色(7.5YR 1.7/1)シルト
地山塊(小～極小)中量含む
2 黒色(7.5YR 2/1)シルト
地山塊(極小)少量含む
1 黒色(7.5YR 1.7/1)シルト
地山塊(小～極小)中量含む
1 黒色(7.5YR 1.7/1)シルト
地山塊(極小)中量含む
0
S=1/60
4m

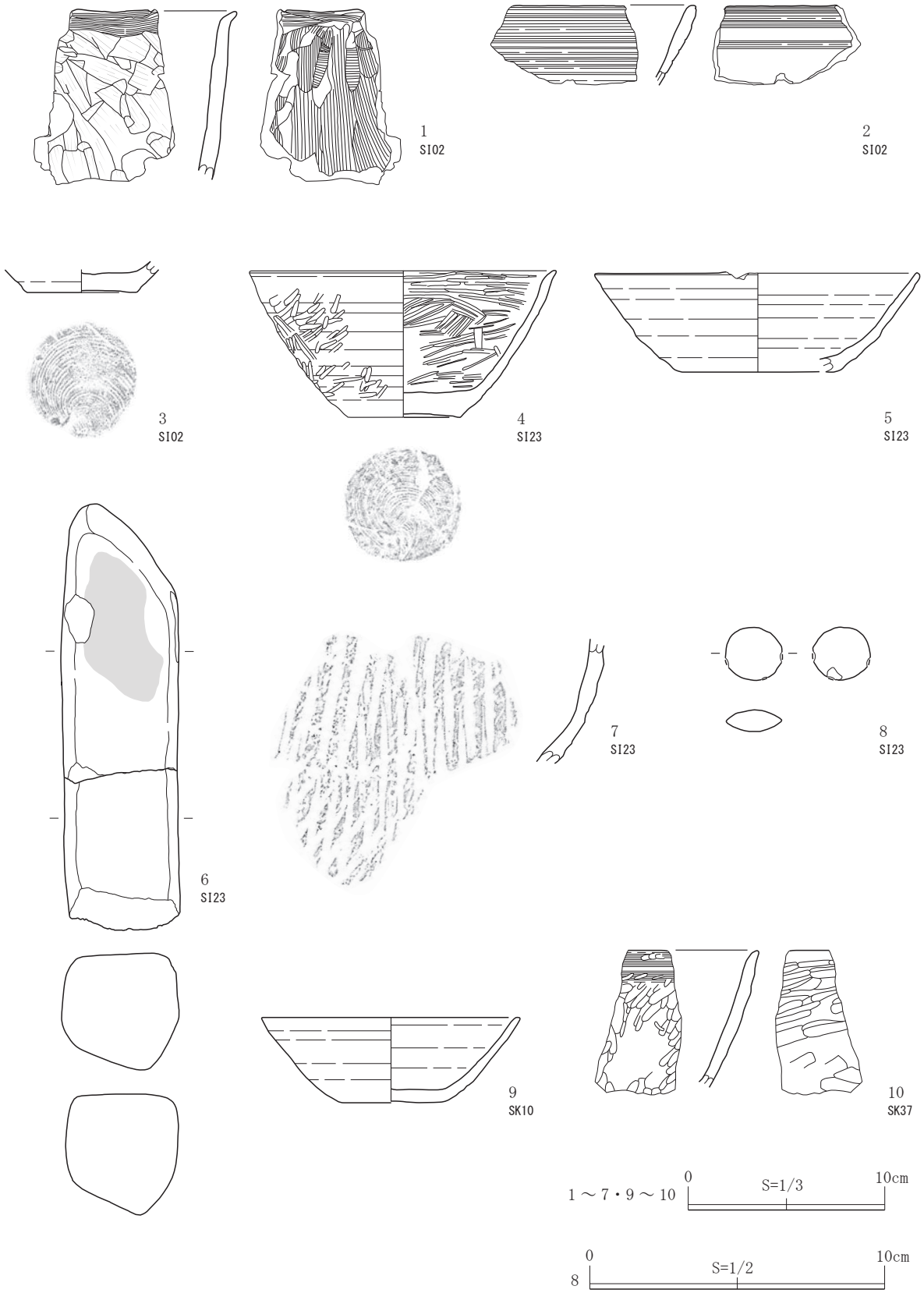
第 26 図 SB40



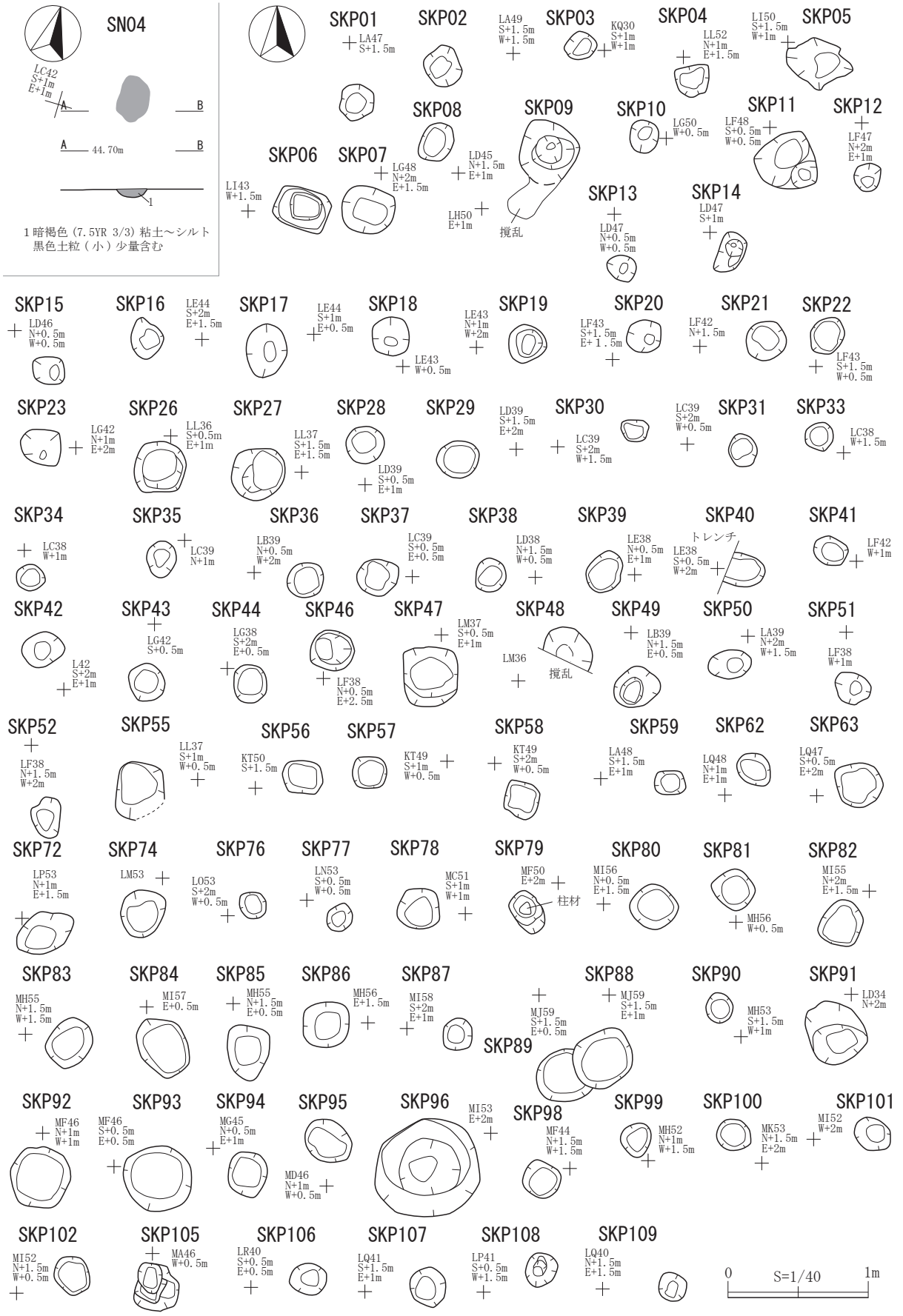
第 27 図　SK10・37、SXP24・71・73・97、SKP70



第 28 図　遺構出土遺物（SI01）



第 29 図　遺構出土遺物（SI02・23、SK10・37）



第 30 図　SN04、SKP01 ～ 109

第２表　柱穴様ピット一覧表

ピット番号	グリッド	確認面	長軸(m)	長軸方向	短軸(m)	短軸方向	深さ(m)	備　考
０１	LA46	Ⅳ地山	0.27	北東－南西	0.25	北西－南東	0.21	
０２	LA48	Ⅳ地山	0.29	北西－南東	0.26	北東－南西	0.11	
０３	KQ29	Ⅳ地山	0.22	北東－南西	0.20	北西－南東	0.16	
０４	LK52	Ⅳ地山	0.28	北東－南西	0.26	北西－南東	0.14	
０５	LI49	Ⅳ地山	0.49	北西－南東	0.36	北東－南西	0.18	
０６	LI42～43	Ⅳ地山	0.39	北西－南東	0.30	北東－南西	0.19	
０７	LF48	Ⅳ地山	0.39	北西－南東	0.34	北東－南西	0.12	
０８	LD45	Ⅳ地山	0.30	北東－南西	0.23	北西－南東	0.16	
０９	LG50	Ⅳ地山	0.47	北西－南東	0.44	北東－南西	0.19	
１０	LG50	地山	0.24	北東－南西	0.21	北西－南東	0.10	
１１	LF47	地山	0.45	北西－南東	0.44	北東－南西	0.20	
１２	LE47	地山	0.20	北－南	0.20	西－東	0.14	
１３	LD47	地山	0.22	北西－南東	0.19	北東－南西	0.17	
１４	LC46	地山	0.31	北東－南西	0.19	北西－南東	0.17	
１５	LD46	地山	0.23	北－南	0.21	西－東	0.15	
１６	LD43	地山	0.30	北西－南東	0.24	北東－南西	0.17	17～23・41～43と柵列の可能性あり
１７	LD43	地山	0.39	西－東	0.30	北－南	0.19	16・18～23・41～43と柵列の可能性あり
１８	LE43	地山	0.28	西－東	0.27	北－南	0.21	16～17・19～23・41～43と柵列の可能性あり
１９	LE43	地山	0.29	北東－南西	0.28	北西－南東	0.23	16～18・20～23・41～43と柵列の可能性あり
２０	LE42	地山	0.25	北－南	0.24	西－東	0.17	16～19・21～23・41～43と柵列の可能性あり
２１	LE42	地山	0.30	北東－南西	0.29	北西－南東	0.16	16～20・22～23・41～43と柵列の可能性あり
２２	LF42	地山	0.29	北東－南西	0.23	北西－南東	0.09	16～21・23・41～43と柵列の可能性あり
２３	LF42	地山	0.30	北西－南東	0.26	北東－南西	0.28	16～22・41～43と柵列の可能性あり
２６	LK35	Ⅲ(漸移層)	0.38	北－南	0.37	西－東	0.33	
２７	LK36	Ⅲ(漸移層)	0.40	北東－南西	0.37	北西－南東	0.31	
２８	LC38	地山	0.28	北－南	0.27	西－東	0.22	
２９	LC38	地山	0.30	北－南	0.26	西－東	0.25	36～40・49～50と柵列の可能性あり
３０	LC38	地山	0.19	北東－南西	0.17	北西－南東	0.07	
３１	LC38	地山	0.24	北西－南東	0.20	北東－南西	0.11	
３３	LC38	地山	0.21	北東－南西	0.21	北西－南東	0.09	
３４	LC37	地山	0.21	北西－南東	0.19	北東－南西	0.11	
３５	LC39	地山	0.26	北東－南西	0.21	北西－南東	0.22	
３６	LB39	地山	0.28	北東－南西	0.25	北西－南東	0.11	29・37～40・49～50と柵列の可能性あり
３７	LB38	地山	0.32	北東－南西	0.27	北西－南東	0.21	29・36・38～40・49～50と柵列の可能性あり
３８	LD38	地山	0.24	西－東	0.22	北－南	0.28	29・36～37・39～40・49～50と柵列の可能性あり
３９	LD38	地山	0.30	北東－南西	0.24	北西－南東	0.25	29・36～38・40・49～50と柵列の可能性あり
４０	LE37	地山	0.28	北西－南東	0.24	北東－南西	0.22	29・36～39・49～50と柵列の可能性あり
４１	LF42	地山	0.24	北西－南東	0.19	北東－南西	0.17	16～23・42～43と柵列の可能性あり
４２	LF41	地山	0.28	北東－南西	0.24	北西－南東	0.28	16～23・41・43と柵列の可能性あり
４３	LG41	地山	0.27	北西－南東	0.25	北東－南西	0.27	16～23・41～42と柵列の可能性あり
４４	LF37	地山	0.28	西－東	0.24	北－南	0.32	
４６	LE38	地山	0.30	北西－南東	0.28	北東－南西	0.27	
４７	LL36	Ⅲ	0.42	西－東	0.39	北－南	0.41	
４８	LL35	Ⅲ	0.38	北西－南東	0.29	北東－南西	0.31	
４９	LA39	地山	0.33	北東－南西	0.27	北西－南東	0.24	
５０	LA39	地山	0.32	北東－南西	0.21	北西－南東	0.28	
５１	LF37	地山	0.27	北西－南東	0.22	北東－南西	0.25	
５２	LF38	地山	0.29	北東－南西	0.27	北西－南東	0.24	
５５	LL36	地山	0.42	北東－南西	0.35	北西－南東	0.19	
５６	KS49	地山	0.29	北西－南東	0.23	北東－南西	0.08	
５７	KT48	地山	0.25	北－南	0.23	西－東	0.09	
５８	KT48	地山	0.27	北東－南西	0.25	北西－南東	0.15	
５９	KT47	地山	0.22	北東－南西	0.19	北西－南東	0.16	
６２	LP48	Ⅲ	0.28	北東－南西	0.27	北西－南東	0.11	
６３	LP46	地山	0.36	北西－南東	0.33	北東－南西	0.10	
７２	LO53	地山	0.46	北東－南西	0.29	北西－南東	0.19	
７４	LM52	地山	0.34	西－東	0.33	北－南	0.14	
７６	LO52	地山	0.19	北東－南西	0.19	北西－南東	0.12	
７７	LN52	地山	0.23	北東－南西	0.18	北西－南東	0.09	
７８	MC50	地山	0.31	北東－南西	0.30	北西－南東	0.18	
７９	ME49	地山	0.32	北西－南東	0.20	北東－南西	0.62	
８０	MH56	地山	0.31	北西－南東	0.31	北東－南西	0.15	81・82・83・85・86と共に掘立柱建物を構成する可能性あり
８１	MH56	地山	0.29	北西－南東	0.26	北東－南西	0.25	80・82・83・85・86と共に掘立柱建物を構成する可能性あり
８２	MH55	地山	0.33	北東－南西	0.30	北西－南東	0.08	80・81・83・85・86と共に掘立柱建物を構成する可能性あり
８３	MH55	地山	0.35	北東－南西	0.30	北西－南東	0.22	80・81・82・85・86と共に掘立柱建物を構成する可能性あり
８４	MH56	地山	0.45	北西－南東	0.35	北東－南西	0.14	
８５	MG55	地山	0.39	北東－南西	0.31	北西－南東	0.16	80・81・82・83・86と共に掘立柱建物を構成する可能性あり
８６	MG55	地山	0.34	北－南	0.32	西－東	0.17	80・81・82・83・85と共に掘立柱建物を構成する可能性あり
８７	MH57	地山	0.23	北東－南西	0.21	北西－南東	0.16	
８８	MI58	Ⅲ	0.43	北東－南西	0.39	北西－南東	0.35	89を切る
８９	MI58	Ⅲ	0.39	北東－南西	0.38	北西－南東	0.35	88に切られる
９０	MH52	地山	0.22	北西－南東	0.20	北東－南西	0.10	
９１	LD34	地山	0.46	北西－南東	0.41	北東－南西	0.35	
９２	MF46	地山	0.45	北東－南西	0.43	北西－南東	0.34	
９３	ME45	地山	0.51	北西－南東	0.47	北東－南西	0.38	
９４	MF45	地山	0.31	北東－南西	0.28	北西－南東	0.18	
９５	MD46	地山	0.36	北西－南東	0.30	北東－南西	0.26	
９６	MH52	Ⅲ	0.77	北東－南西	0.70	北西－南東	0.84	
９８	MF44	地山	0.27	北西－南東	0.25	北東－南西	0.14	
９９	MH52	地山	0.24	北東－南西	0.22	北西－南東	0.14	
１００	MJ53	地山	0.27	北東－南西	0.25	北西－南東	0.10	
１０１	MI51	地山	0.28	北西－南東	0.23	北東－南西	0.19	
１０２	MI52	地山	0.28	北西－南東	0.24	北東－南西	0.11	
１０５	MA45	地山	0.34	北東－南西	0.33	北西－南東	0.20	
１０６	LQ39	地山	0.27	北東－南西	0.24	北西－南東	0.15	
１０７	LP40	地山	0.27	北西－南東	0.26	北東－南西	0.17	
１０８	LP40	地山	0.30	北東－南西	0.22	北西－南東	0.14	
１０９	LP40	地山	0.21	北西－南東	0.20	北東－南西	0.14	

５　出土遺物

（１）縄文時代

①土器（第17図、第18図１～９、第19図１～12・14～17、31～36図１～９）

Ⅰ～Ⅳ群に大別した。Ⅰ群が早期、Ⅱ群が前期、Ⅲ群が中期、Ⅳ群が後期となる。Ⅱ・Ⅳ群の土器は、文様等の特徴により細別した。

Ⅰ群土器

第31図－１の丸底の底部１点のみである。器形や胎土、焼成の特徴等から当期の土器と判断した。

Ⅱ群土器

ａ類：０段多状の原体を横位回転施文したもの（第32図－１）

第32図－１は胎土に繊維を含む。０段多条原体の横位回転文によるものとみられる節の細長い斜行縄文が施されているが、摩耗により詳細は不明である。前期前半頃の土器と推測される。

ｂ類：太い隆帯が貼付されるもの（第31図－２）

第31図－２は、横位の隆帯が巡る土器である。隆帯上には指頭状の圧痕が施される。地文として太いＬ原体とみられる単軸絡条体の回転による文様が施される。体土には繊維を含む。円筒下層ｂ式に相当する。

Ⅲ群土器

沈線間に原体の縦位回転文を充填させたもの（第31図－３、第32図－２、６、７）

第31図－３は、緩く外反する口縁部下に、太い沈線による区画で「Ｊ」字状の無文部を連続的に展開させ、沈線間にＬＲ縦位回転文を充填させている。当群は、中期末の大木10式に相当する。

Ⅳ群土器

ａ～ｌの12群に分けた。

ａ類：隆帯と原体の側面圧痕が施されるもの（第19図－４・５、第32図－21～24）

ｂ類：沈線間に縄文が充填され無文帯に縦位の隆帯が施されるもの（第19図－６～11）

ｃ類：単軸絡条体の回転施文による地文上に沈線文が施されるもの（第32図－３・15・20）

ｄ類：原体の縦位回転による結節回転文を施されるもの（第32図－18）

ｅ類：斜行縄文による地文上に細い沈線文が施されるもの（第32図－５・８～10・14）

ｆ類：磨り消し縄文と細い沈線文が施されるもの（第32図－11～13・16・17）

ｇ類：方形状の区画沈線文が施されるもの（第32図－25～27）

ｈ類：磨り消し縄文と太い沈線文が施されるもの（第18図－４、第33図－３～16、18、21）

ｉ類：隆帯に沿う沈線と無文帯で文様構成されるもの（第33図－１・２・17）

ｊ類：沈線文が施されるもの（第17図－３～６、第18図－３・５～９、第19図－３・12・14・15・17、第31図－４・５・７、第33図－19・20、22～27、第34図－１～30、第35図－１～13）

ｋ類：間隔の狭い平行する沈線間に縄文が施されるもの（第18図－１、第19図－１、第35図－14・15）

ｌ類：地文または・無文のもの（第18－２、第19図－２・16、第31図－６・８～10、第36図－１～９）

ａ～ｆ類が後期初葉、ｇ・ｈ・ｉ類がそれに続く段階、ｊ・ｋ類が後期前葉に位置付けられる。Ⅳ群で中心をなすのはｊ類である。沈線には、円形文、楕円文、方形文、平行沈線文、弧線文、入り組み文、三角文等様々な種類があり、小片では器形や部位、詳細な時期を特定するのが困難であるが、

概ね十腰内Ⅰ群の範疇に含まれるものである。出土した当期の土器には、深鉢、鉢、台付鉢、壺等多くの器種が含まれている。朱塗りされた第34図－１は祭祀行為を窺わせる遺物であり、第33図－25～27の同一個体と思われる口縁部は、隆沈文によって彫りの深い重厚な造形をもつ。

第35図－16～29は、上記分類には入れなかった特徴的な口縁をもつ土器である。口縁部に粘土紐による装飾を施すもの、平行沈線を施したもの等がある。

１類には、後期初葉から前葉にかけての土器が含まれる。斜行縄文、原体の回転方向を変えた羽状縄文、単軸絡条体の縦位回転文、網目状文、無文のもの等がある。折り返し口縁をもつものが多い。

②ミニチュア土器（第36図－10～12、図版18）

第36図－10・12には底部付近に沈線が施されている。10は底面中央に円形の窪みがある。

③土製品（第18図－10、第36図－13～22、図版18・19）

土偶は２点出土した。１点は板状土偶で、もう１点は遮光器土偶である。36図－13は、中央部に連鎖状の沈線が縦走し、それ以外の部分には、格子状の沈線が充填される。14は、遮光器土偶の肩部付近とみられる。被熱を受けた痕跡があり、ただれがみられる。15は、器種不明の土製品である。扁平なつまみ状の張り出しがあり、２つの穿孔が確認できる。

円盤状土製品は８点出した。全て土器片を打ち欠いて製作されたものである。第36図－16～20は土器片を打ち欠き作製した円盤状土製品である。沈線等の特徴から縄文時代後期前葉のものとみられる。

第36図－21・22も器種不明の土製品である。胎土や重量感が似ており、同一個体の可能性がある。

④石器（第18図－11・12、第19図－13・18、第37～42図、図版21・22）

出土した石器には、石鏃、石槍、石匙、トランシェ様石器、石篦、スクレイパー、石核、磨製石斧、磨石、凹石、石皿、石錘等がある。なお、以下に記載する出土点数は遺構の内外を含めた数である。

石鏃（第37図－１～３、図版21）

７点出土し、掲載したのは３点である。茎部のわかるものは、全て有茎鏃である。

石槍（第37図－４・５、図版21）

２点出土した。２点とも細身でやや肉厚である。２点とも基部周辺が欠損している。

石匙（第37図－６～12、図版21）

11点出土し、掲載したのは７点である。第37図－６・７は、縦長剥片を素材とした薄手の石匙で、深い細部調整が施されている。早期・前期に特徴的な石匙である。８・11は刃部の作り出しが急角度である。９・12は粗雑な作りで入念な細部調整が施されていない。９は打点の反対方向につまみ部を作り出している。

トランシェ様石器（第38図－１・２、図版21）

２点出土した。一次剥離面による鋭利な刃部が作り出されている。

石篦（第18図－12、第38図－３～７、図版21）

13点出土し、掲載したのは６点である。片面調整のものと両面調整のものがある。第38図－７は細長い形状の石篦で、刃部を下にして地中に突き刺さるような状態で出土した。

スクレイパ-（第38図－８・９、第39図－１～６、図版21）

28点出土し、掲載したのは８点である。刃部の位置は、素材の周縁、側縁、端部にみられる。第38図－８、第39図－１は素材の周縁に連続的な細部調整による刃部が作り出されている。第39図－４は

縦長剥片の端部に刃部を作り出したエンドスクレイパーである。

石核（第40図－１・２、図版21）

14点出土し、掲載したのは２点である。２点とも頁岩で礫皮を残す。第40図－１は、連続する礫皮面を２つ残しており、このうちの一つの礫皮面を打面とした剥片剥離が行われている。２は残存する礫皮の位置関係から、拳大の原石を素材としていたと推測される。

磨製石斧（第18図－11、第41図－１～４、図版22）

７点出土し、掲載したのは５点である。第41図－１は、断面が楕円形の重厚な石斧である。３・４は、離れた位置から出土した２点が接合したものであり、断面が直線的な側縁をもつ。

磨石（第29図－６、第41図－５・６、第42図－１～３、図版15・22）

８点出土し、掲載したのは６点である。第41図－５は、断面が三角形で、稜部に使用面をもつ縄文時代早期に特徴的な磨石である。

凹石（第19図－13、第42図－４～６、図版22）

８点出土し、掲載したのは４点である。平らな面の中央部付近に敲打の痕跡がみられる。第42図－４は、側面に磨り面が見られる。

石皿（第19図－18、第42図－７、図版22）

２点出土した。２点とも縁辺部の小片である。ＳＸ39出土のものは劣化が著しい。

石錘（第42図－８・９、図版22）

４点出土し、掲載したのは２点である。第42図－９は両側縁の打ち欠きによる抉りの他、上下辺の中央部にも敲打痕がみられる。

⑤石製品（第42図－10・11、図版22）

６点出土した。円盤状石製品が１点、用途不明の石製品が１点、球状礫４点である。42図－11は縁辺を粗く打ち欠いた円盤状の石製品である。

（２）平安時代

①土器（第28・29・43図、図版20）

土師器（第28図－２～15、第29図－１～５、７・９・10、第43図－１～４）

坏は、底部が残存している個体の全てが、回転糸切り手法によるものである。甕はロクロ調整のものと非ロクロ調整のものがある。ロクロ調整の甕には、胴過半部にタタキ目をもつものがみられる。非ロクロのものは、ナデ、ケズリ調整を施し、口縁部が僅かに屈曲するものが多い。

須恵器（第28図－１、第43図－５）

３点のみの出土に留まった。第28図－１は、丁寧な作りで短頸壺と考えられる。

②土製品（第29図－８、第43図－６・７、図版20）

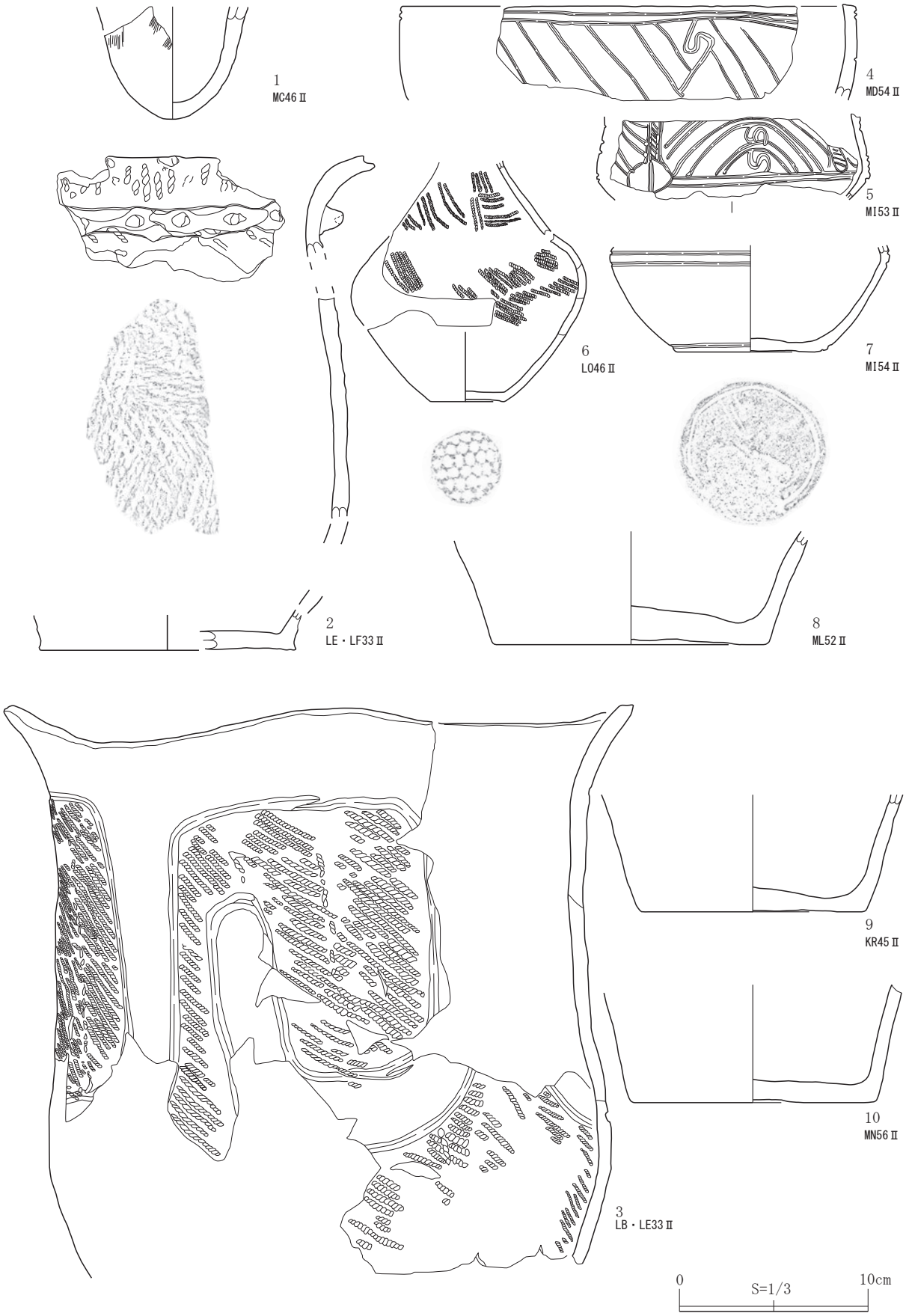
碁石とみられる土製品がＳＩ23埋土上面から１点出土した。赤褐色を帯びている。その他、土錘が２点出土している。

③石器（第43図－８～10、図版22）

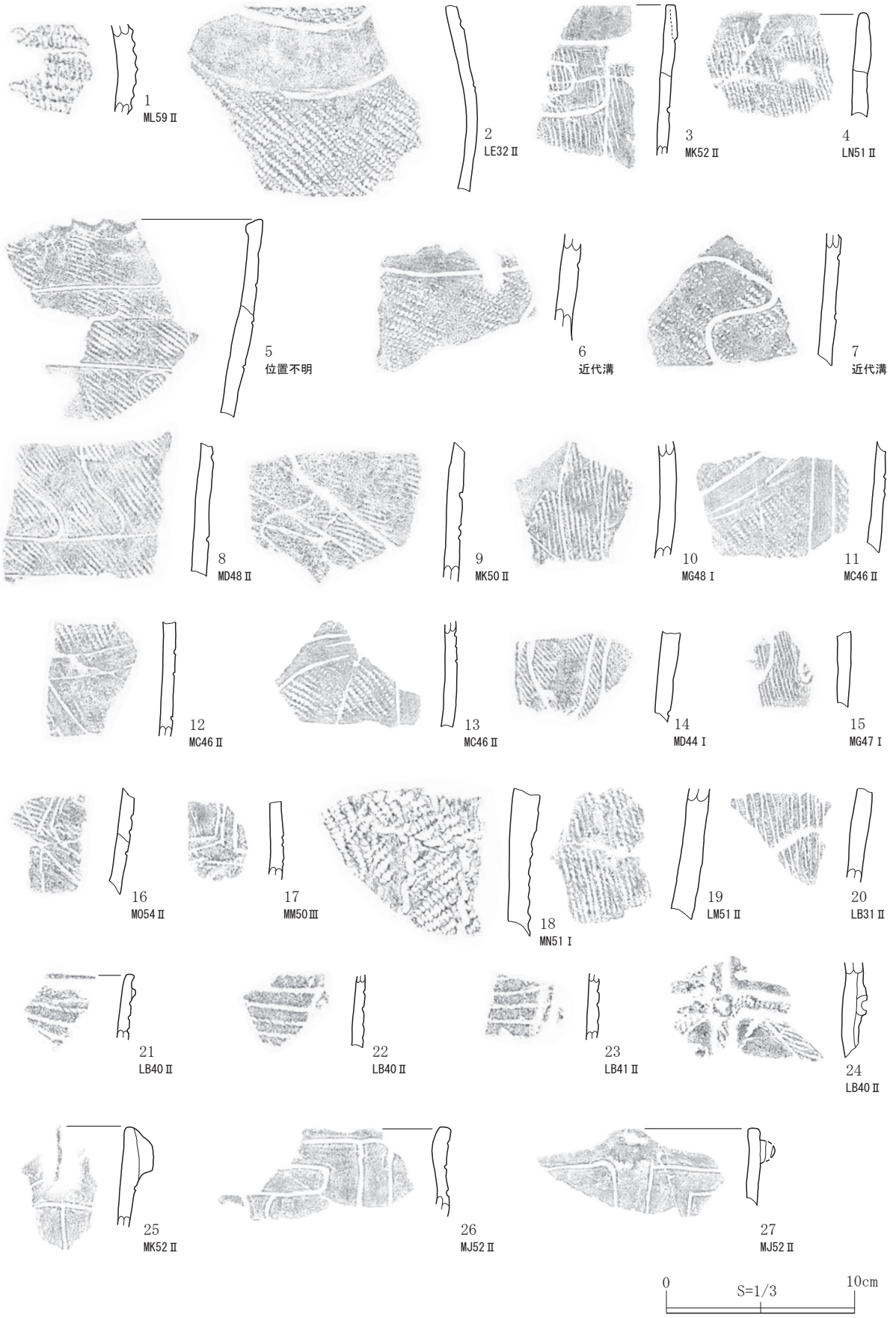
砥石が７点出土した。掲載したのは３点である。ガジリや劣化による傷が目立つものが多い。

（３）時期不明石製品（第43図－11、図版22）

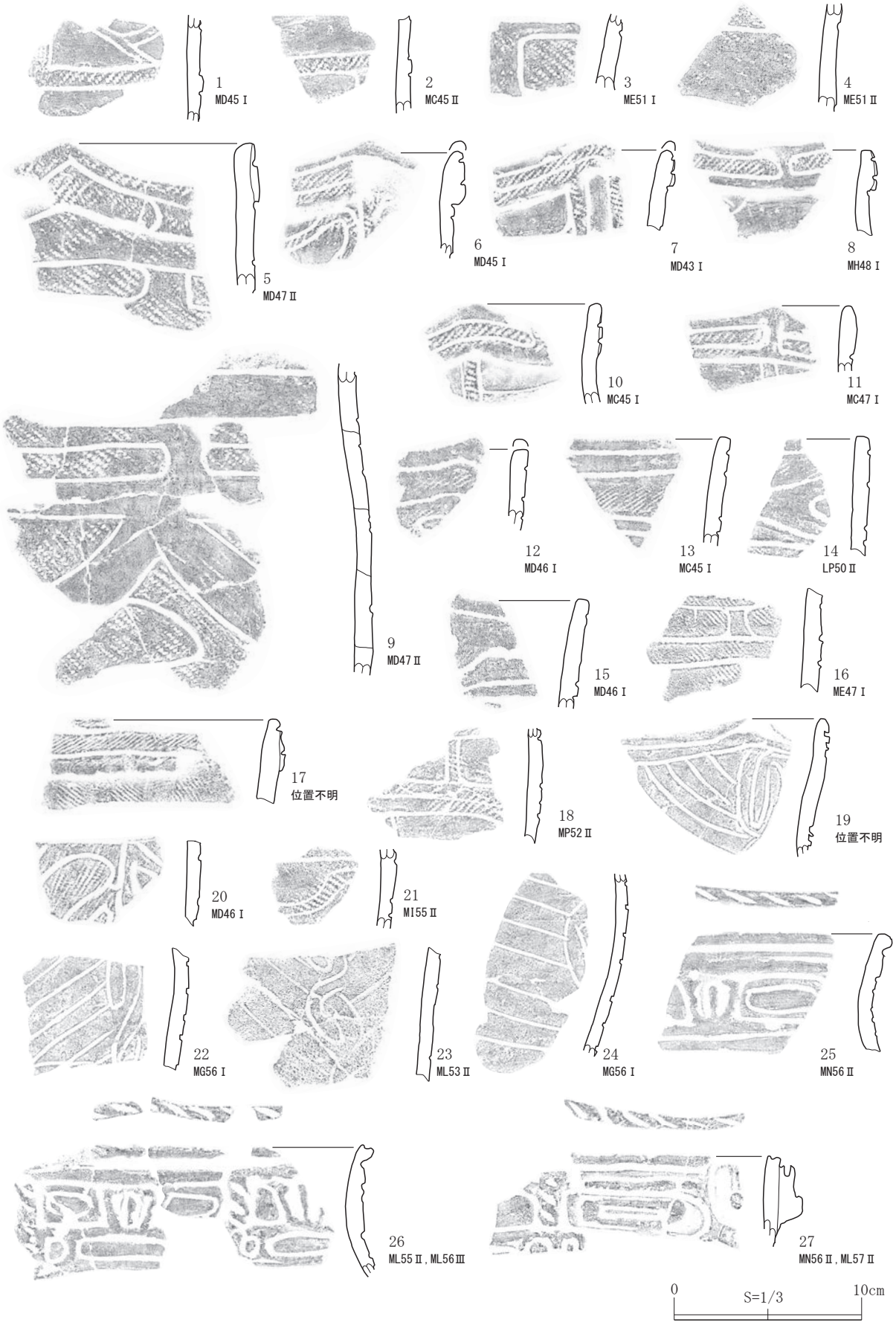
中央部に窪みがある硯の形に似た凝灰岩製の石製品である。



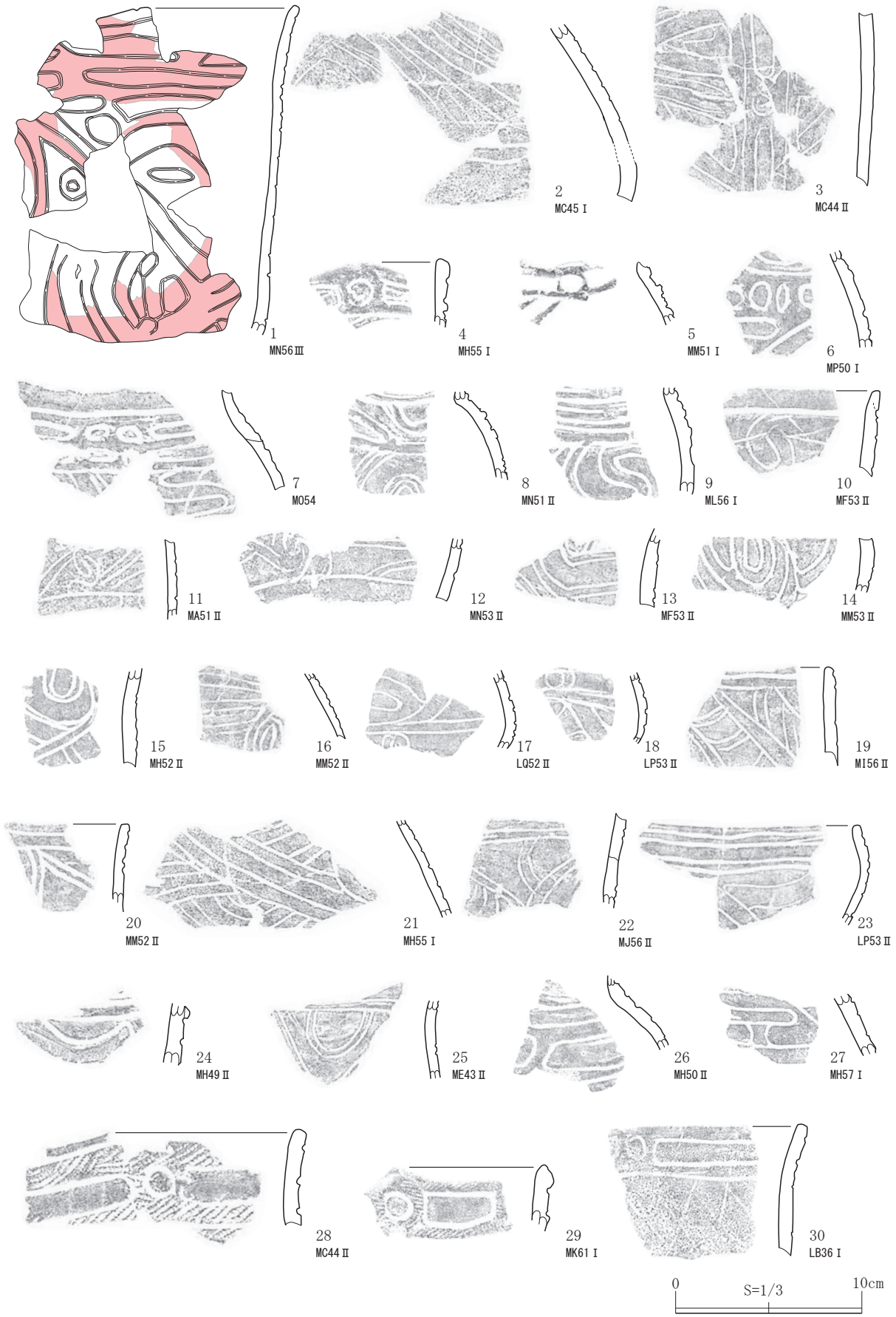
第 31 図　遺構外出土遺物（縄文時代１）



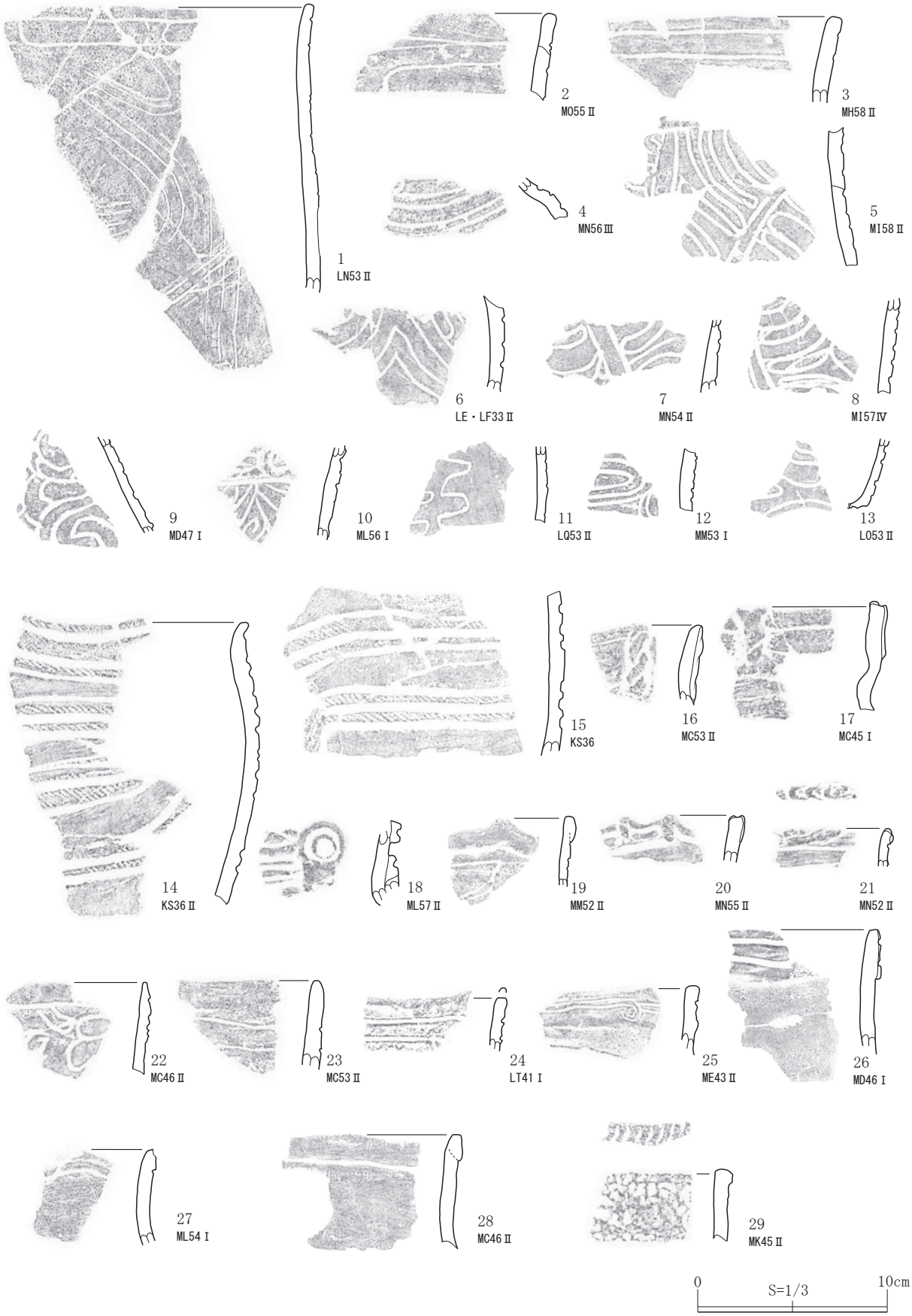
第 32 図　遺構外出土遺物（縄文時代２）



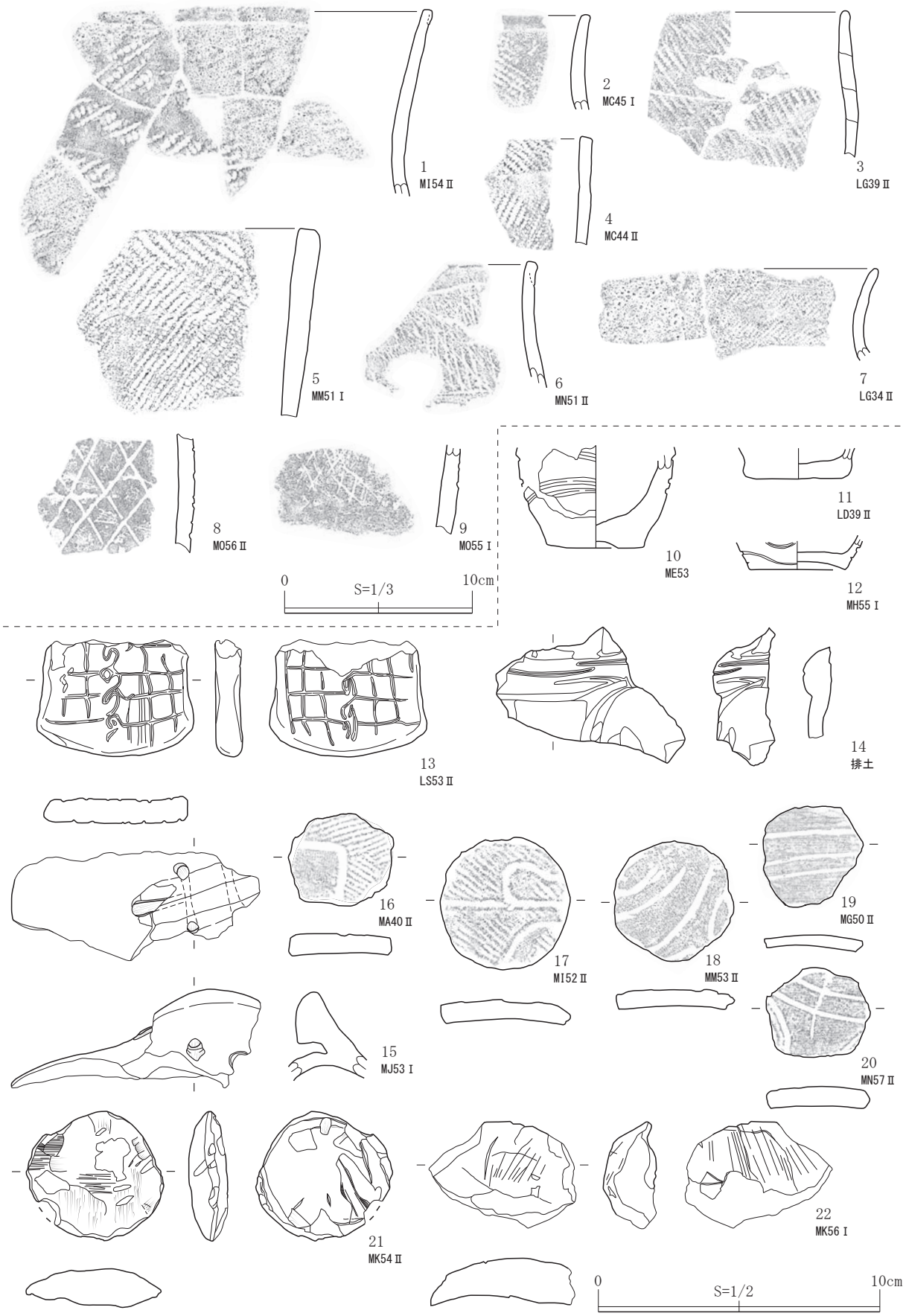
第 33 図　遺構外出土遺物（縄文時代３）



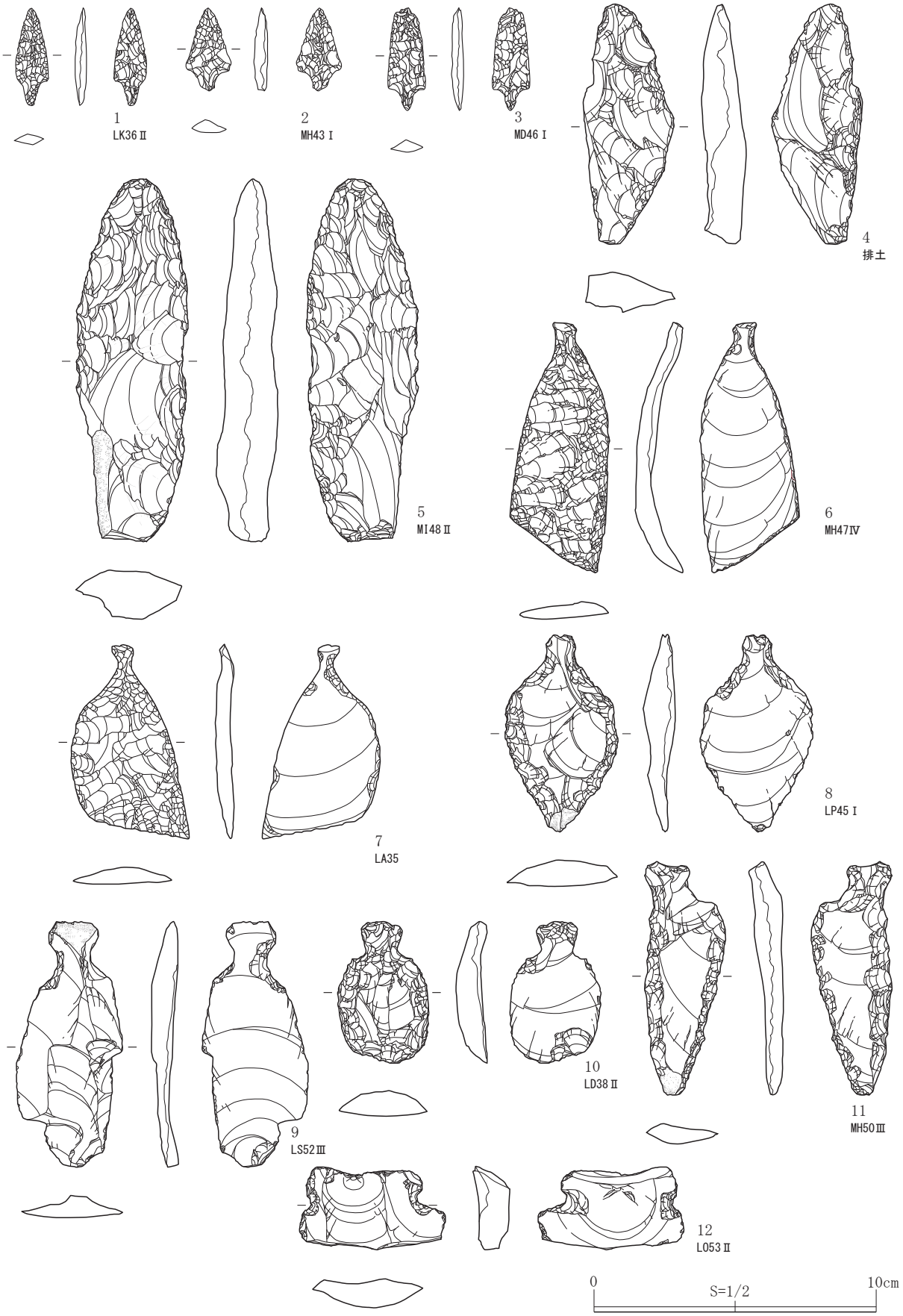
第 34 図　遺構外出土遺物（縄文時代４）



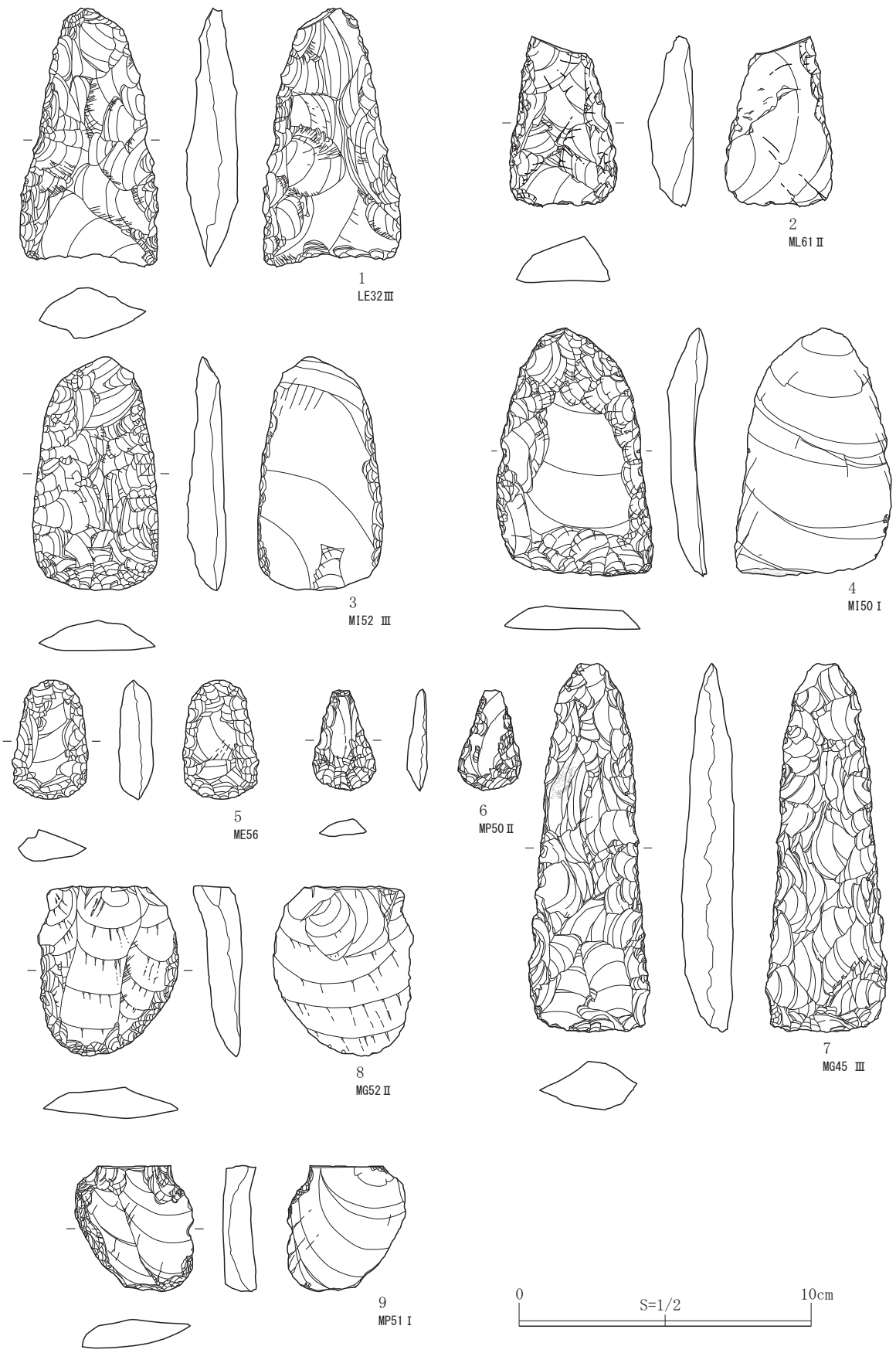
第 35 図　遺構外出土遺物（縄文時代５）



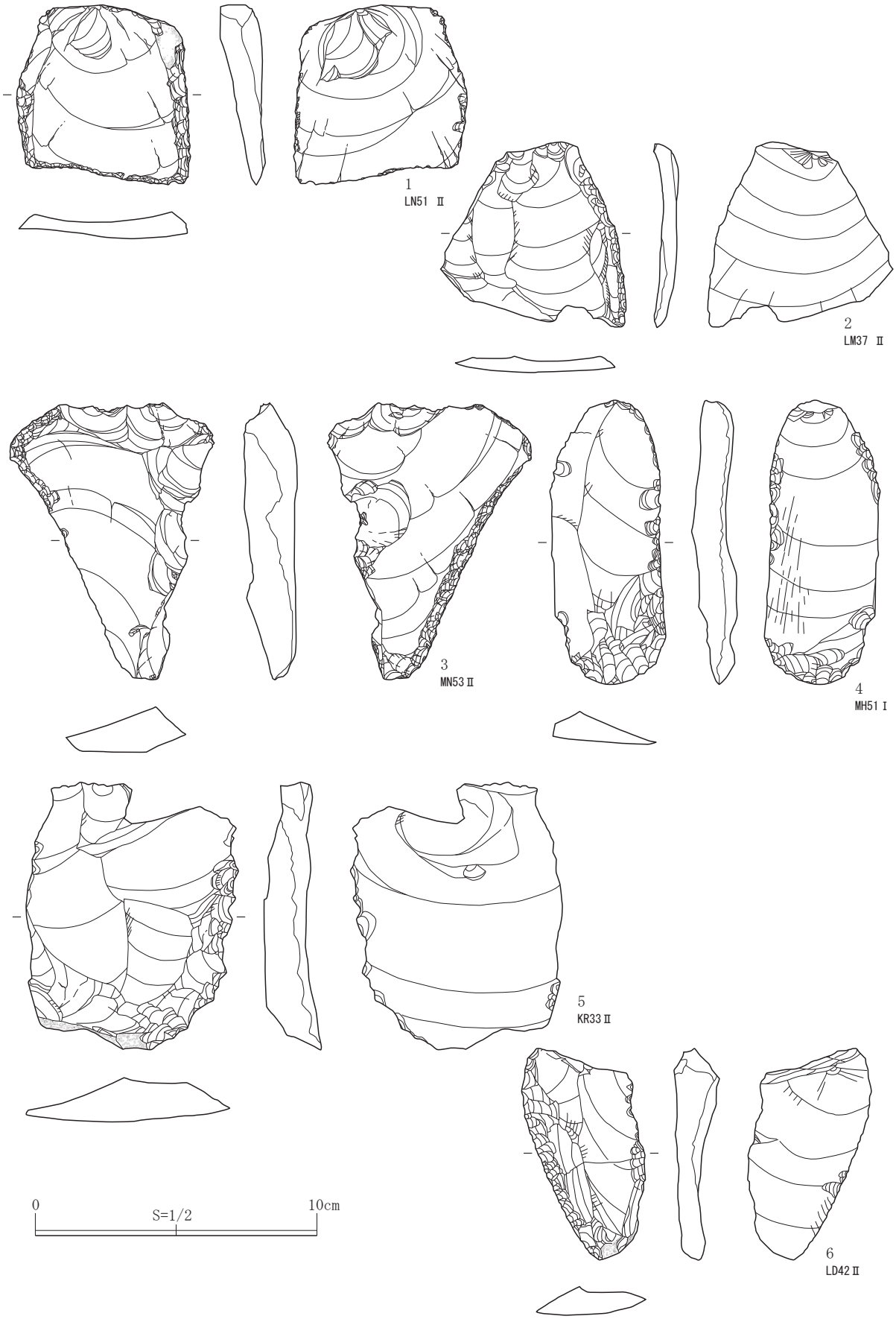
第 36 図　遺構外出土遺物（縄文時代６）



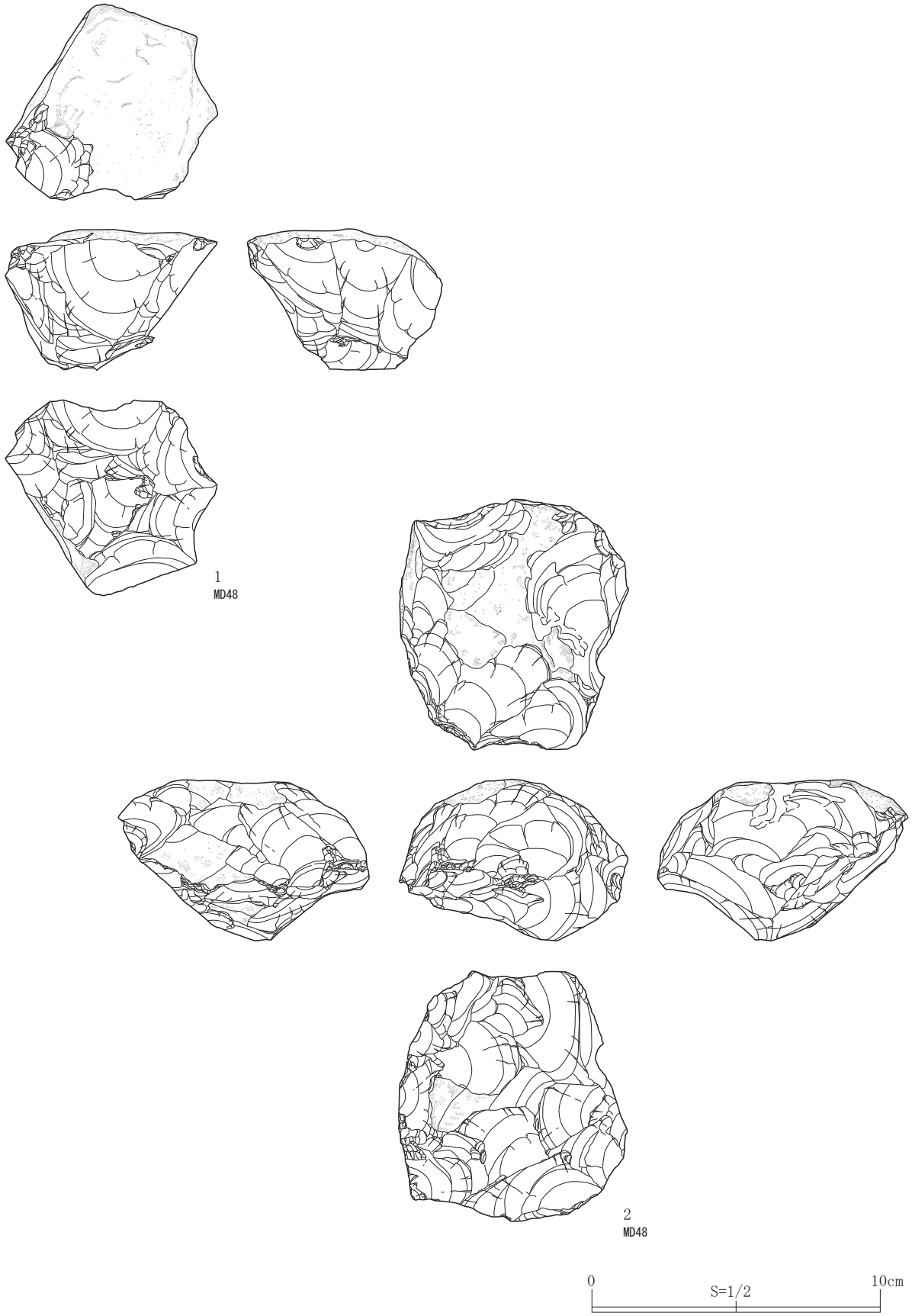
第 37 図　遺構外出土遺物（縄文時代７）



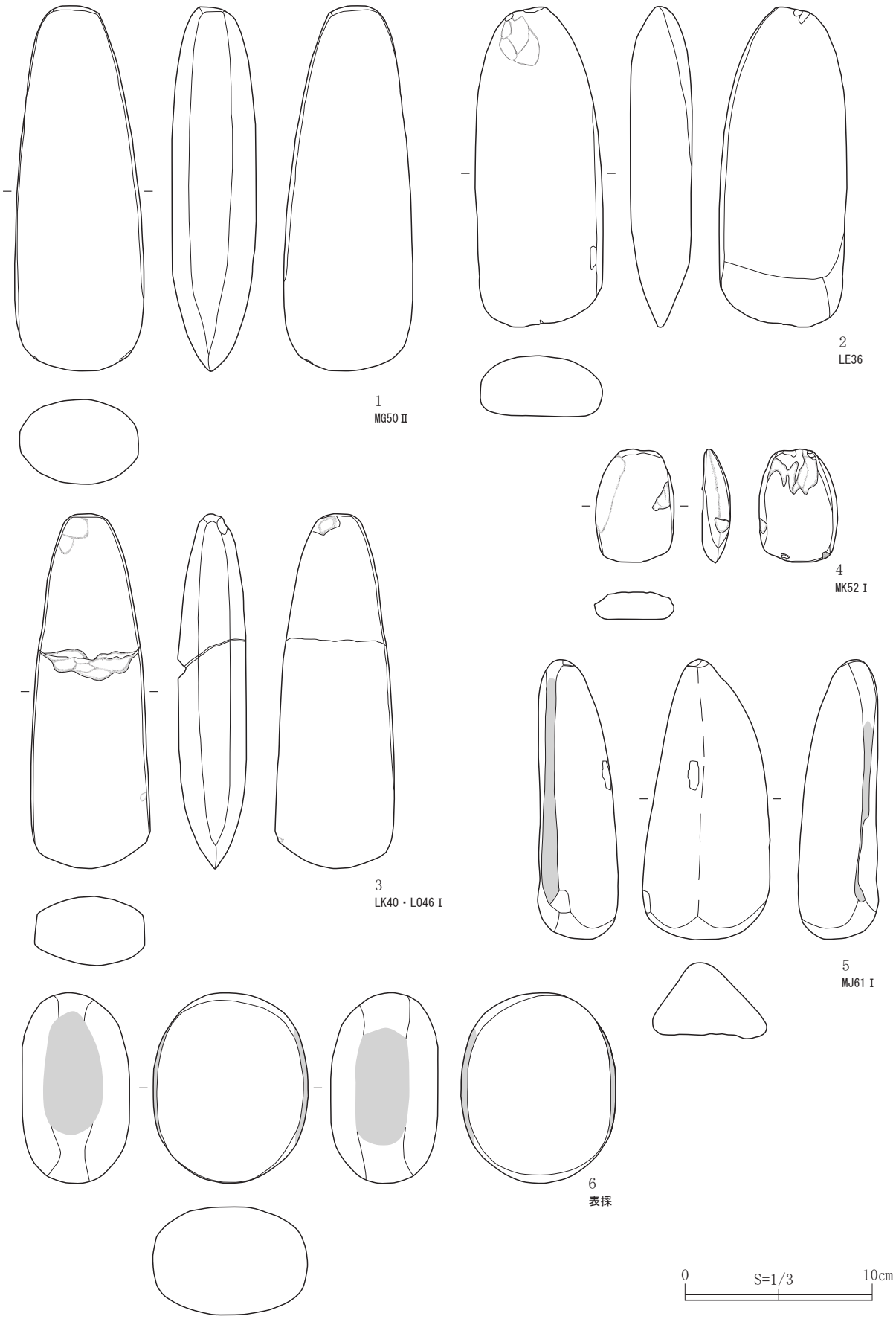
第 38 図　遺構外出土遺物（縄文時代８）



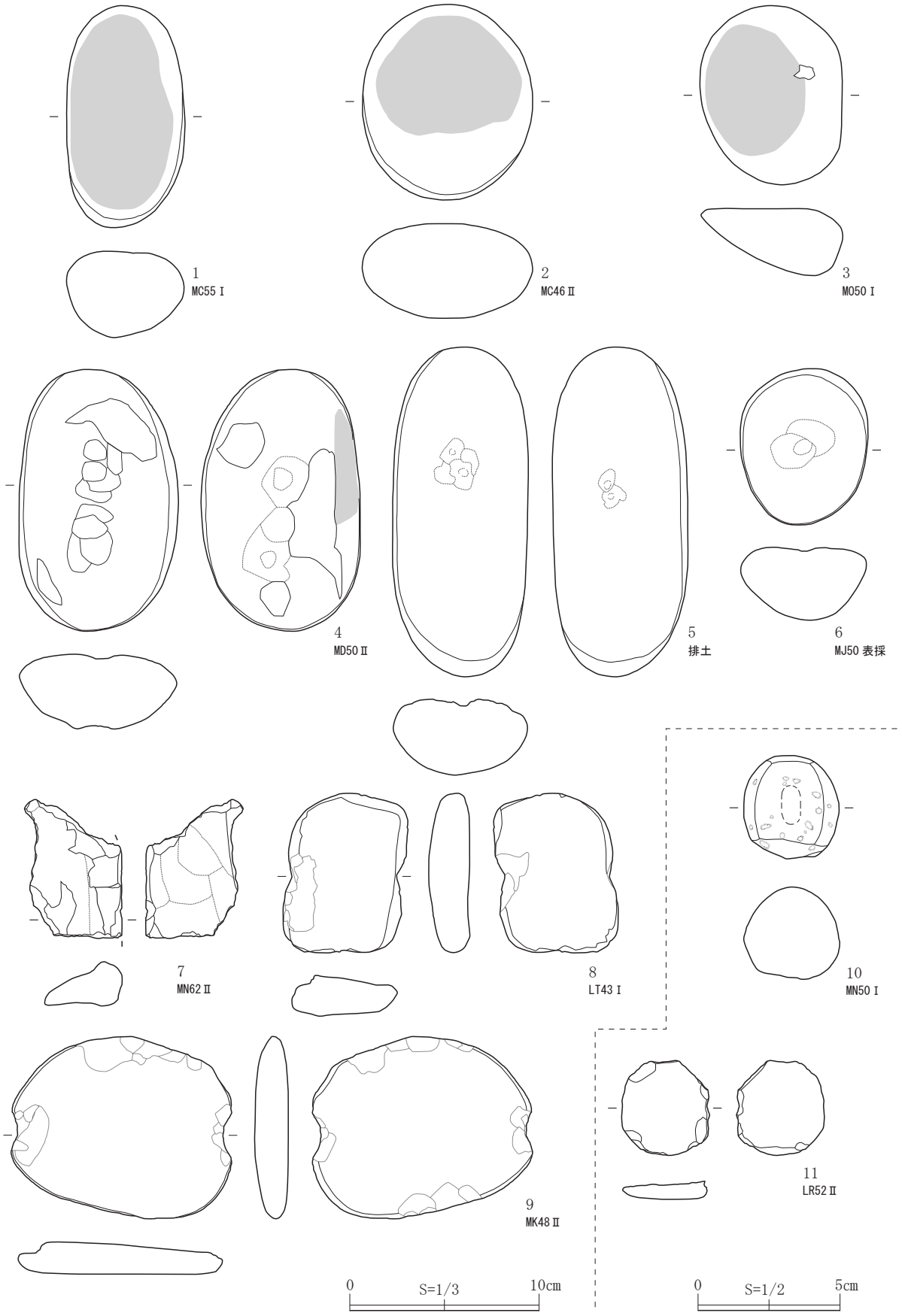
第 39 図　遺構外出土遺物（縄文時代９）



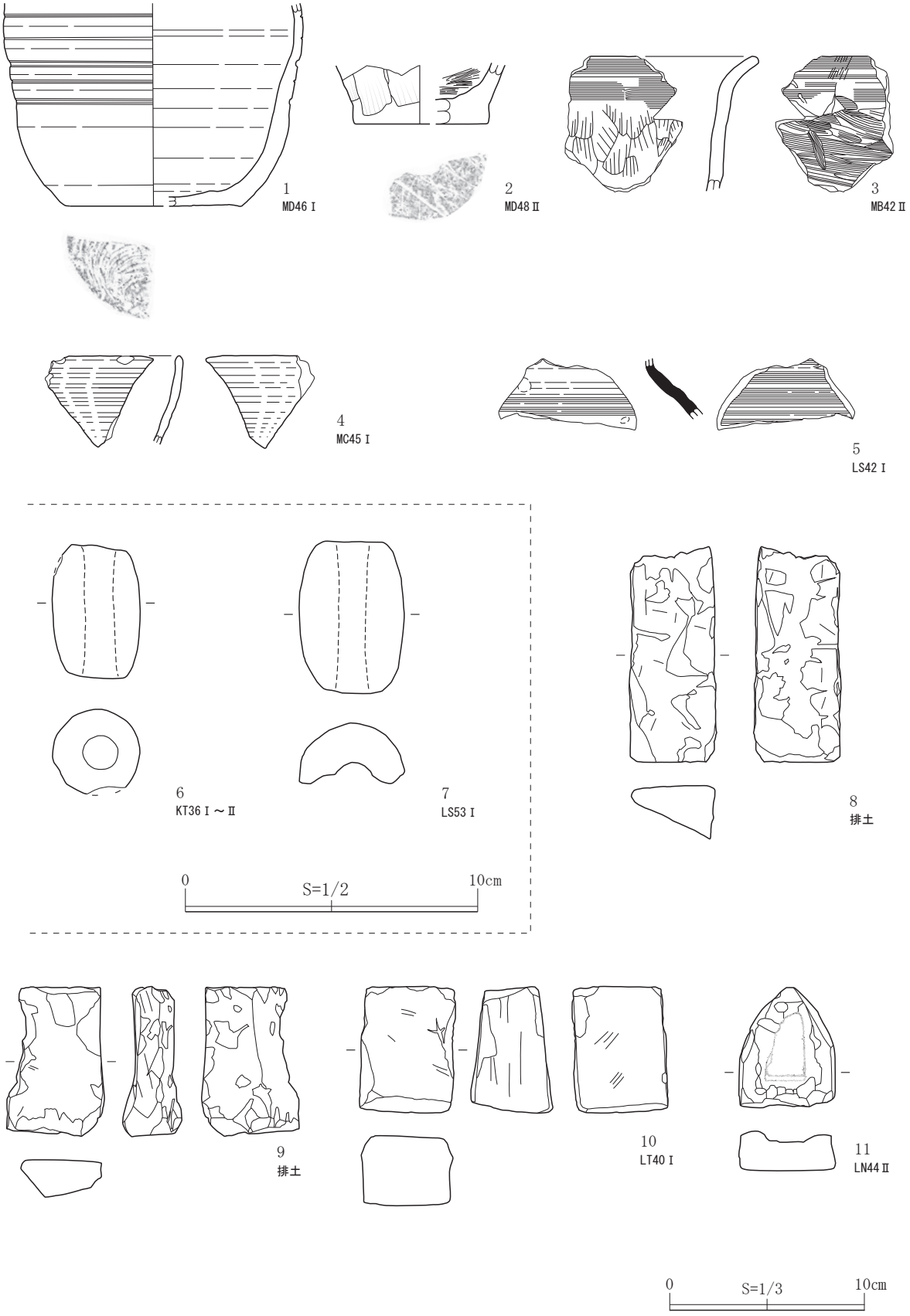
第 40 図　遺構外出土遺物（縄文時代 10）



第 41 図　遺構外出土遺物（縄文時代 11）



第 42 図　遺構外出土遺物（縄文時代 12）



第 43 図　遺構外出土遺物（平安時代）

第３表　土器観察表（１）

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	器種	部位	分類	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	文　様	備　考
17-1	13	SK03	底面付近	深鉢	胴部下半	Ⅳ l	－	108.0	－	無文	・内外面に煤状炭化物 ・底部外面端部に溝状の凹
17-2	13	SK05	底面	深鉢	胴部下半	Ⅳ l	－	126.0	－	無文	・外面に煤状炭化物
17-3	14	SK41	2層	深鉢	口縁～胴部上半	Ⅳ j	－	－	－	口縁部：波状、折り返し口縁 胴部：渦巻文が二段に描かれる。上段は半時計回り、下段のそれは時計回りの渦巻き	
17-4	13		2層	深鉢	胴部	Ⅳ j	－	－	－	横位沈線間に入り組み文風の沈線文　多段化した文様構成	
17-5	13	SK43	3層直上	深鉢	口縁部～底部	Ⅳ j	185.0	84.0	219.0	口縁部：5単位の波状 頸部：波状頂部下の円文を中心として二条の平行沈線 胴部上半：二条一組の沈線による緩い弧状文	
17-6	巻頭	SK44	3底面	台付鉢	口縁部～底部	Ⅳ j	188.0	84.0	142.0	口縁部：4単位の波状、波頂部に擬宝珠状の突起 頸部：波頂部下の方形と円形文を中心に細長い無文部 胴部：三条一組の沈線による弧状文が器面を二分割し、その間を沈線で「S」・「V」字状文が描かれる	
18-1	13	SK45	底面付近	深鉢	胴部下半	Ⅳ k	－	112.0	－	平行するLR縄文帯	
18-2	13	SK46	3層直上	深鉢	胴部下半	Ⅳ l	－	106.0	－	LR縄文の横位回転	
18-3	14	SKF27	埋土	壺？	口縁部	Ⅳ j	－	－	－	口唇：平坦 頸部：平行沈線	
18-4	14		埋土	深鉢	胴部	Ⅳ h	－	－	－	RL縄文→横走と縦走沈線	
18-5	－		埋土	壺？	底部	Ⅳ l	－	(26.0)	－	無文	内外面ミガキ顕著
18-6	14	SKF36	埋土	深鉢	底部	Ⅳ j	－	－	－	沈線文	
18-7	14		埋土	深鉢	胴部下半	Ⅳ j	－	－	－	平行沈線	
18-8	14		埋土	壺？	胴部	Ⅳ j	－	－	－	末端が入り組む横位の沈線文	
18-9	14		埋土	深鉢	口縁部～胴部上半	Ⅳ j	－	－	－	口唇部：面取 口縁部：波状 胴部：波頂部下に末端が入り組む縦位の沈線文と弧状文	
19-1	13	SR06	漸移層	深鉢	胴部～底部	Ⅳ k	－	73.0	－	波状口縁か、斜行する二条一組の沈線で長方形や「Ｊ」字状の無文部を区画、沈線間には横位回転によるＬＲ縄文が充填される。	
19-2	13	SR11	漸移層	深鉢	胴部下半	Ⅳ l	－	116.0	－	無文	
19-3	14	SR13	Ⅱ層下位	深鉢	胴部下半	Ⅳ j	－	62.0	－	二条の平行沈線	
19-4	14	SR13	Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅳ a	－	－	－	口唇：平坦 胴部：隆帯上にLR押圧縄文、沈線内にLR縄文	
19-5	14	SX07	Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	Ⅳ a	－	－	－	口唇：平坦 口縁：隆帯上にLR押圧縄文、隆帯以下にLR押圧縄文とLR縄文	
19-6	14		－	深鉢	胴部	Ⅳ b	－	－	－	沈線間に横位→斜位回転によるLR縄文が充填	
19-7	14		－	深鉢	胴部	Ⅳ b	－	－	－	沈線間に縦位回転によるLR縄文が充填	
19-8	14		Ⅱ層下位	深鉢	胴部	Ⅳ b	－	－	－	沈線間に縦位回転によるLR縄文が充填 隆帯上にもLR縄文	
19-9	14		Ⅱ層下位	深鉢	胴部下半	Ⅳ b	－	－	－	沈線間に縦位回転によるLR縄文が充填 隆帯上にもLR縄文	
19-10	14		Ⅱ層下位	深鉢	胴部	Ⅳ b	－	－	－	沈線間に斜位回転によるLR縄文が充填	
19-11	14		Ⅱ層下位	深鉢	胴部	Ⅳ b	－	－	－	沈線間に縦位回転によるLR縄文が充填 隆帯上にもLR縄文	
19-12	14	SX08	Ⅱ層下位	壺	口縁部	Ⅳ j	(100.0)	－	－	頸部に二条の平行沈線	

第４表　土器観察表（２）

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	器種	部位	分類	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	文　様	備　考
19-14	14	SK39	Ⅱ層下位	鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取→平滑　口縁部：横位の平行沈線	・内外面に煤状炭化物 ・底部外面端部に溝状の凹
19-15	14		Ⅱ層下位	壺？	胴部	Ⅳj	－	－	－	二条一組の平行沈線、弧状文と縦位の沈線	19-17と同一個体
19-16	14		Ⅱ層下位	深鉢	胴部	Ⅳl	－	－	－	L原体による網目状撚糸文	
19-17	14		Ⅱ層下位	壺？	胴部	Ⅳj	－	－	－	二条一組の平行沈線、弧状文と縦位の沈線	19-15と同一個体
31-1	16	MC46	Ⅱ	丸底深鉢	底部	Ⅰ	－	－	－	無文で底面が摩滅　割れ口は鋭い　胎土に繊維を含まないように見えるが、外面には繊維状の痕跡が微量認められる	最深部を中心に炭化物様のものが付着
31-2	16	LE･LF33	Ⅱ	深鉢	口縁・胴部・底部	Ⅱb	－	(136.0)	－	太いL原体による絡条体回転文　横位の隆帯隆帯上に指突	接合しないが、同一個体の口縁部、胴部、底部が出土
31-3	16	LB･LE33	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	Ⅲ	(335.0)	－	－	口唇部：平坦 胴部：連続する「J」字状文、結節のLR原体の縦位回転で充填	
31-4	16	MD54	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	Ⅳj	(242.0)	－	－	口唇部：平坦 胴部：横走平行沈線＋斜行沈線＋縦位の入組文	
31-5	16	MI53	Ⅱ	鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	胴部：「S」字状文　幾重の弧状文　縦位・横位の沈線	大きな瘤が剥落した部分で縦に貫通する孔があることから、釣手形土器の可能性もあり
31-6	16	LO46	Ⅱ	壺	胴部	Ⅳj	－	(40.0)	－	胴部：RL縄文	底部外面：網代痕 底部内面：漆付着
31-7	17	MI54	Ⅱ	鉢	胴部	Ⅳj	－	(76.0)	－	胴部：二条の平行沈線､底部付近に一条の沈線	底部外面：笹葉状圧痕→端部に沿って円形の沈線
31-8	17	ML52	Ⅱ	深鉢	底部	Ⅳl	－	(146.0)	－	無文	底部外面：笹葉状圧痕
31-9	17	KR45	Ⅱ	深鉢	底部	Ⅳl	－	(120.0)	－	内外面：磨き顕著	
31-10	17	MN56	Ⅱ	深鉢	底部	Ⅳl	－	(130.0)	－	内外面：磨き顕著	
32-1	17	ML59	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅱa	－	－	－	縄文	胎土：繊維混入
32-2	17	LE32	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅲ	－	－	－	LR縄文→沈線内磨り消し	内面：磨き
32-3	17	MK52	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳc	－	－	－	口唇部：面取､平滑　口縁部：折り返し､R撚糸→矩形区画→部分的に磨り消し	内面：磨き
32-4	17	LN51	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳl	－	－	－	口唇部：丸み　口縁部：R撚糸文	
32-5	17	－	－	深鉢	口縁部	Ⅳe	－	－	－	口唇部：刻み　口縁部：RL縄文→平行沈線・沈線による楕円区画	
32-6	17	MB～MFライン近代溝	溝埋土	深鉢	胴部	Ⅲ	－	－	－	LR縄文→沈線→磨り消し	内面：磨き
32-7	17		溝埋土	深鉢	胴部	Ⅲ	－	－	－	LR縄文→「Ｊ」字状文	内面：磨き
32-8	17	MD48	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	LR縄文→横位と縦位「S」字状沈線	
32-9	17	MK50	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	LR縄文→横位沈線を縦位の「S」字状沈線で繋ぐ	外面：煤状炭化物
32-10	17	MG48	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	LR縄文→沈線による曲線文	外面：煤状炭化物
32-11	17	MC46	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	沈線による楕円形区画→LR縄文	
32-12	17	MC46	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳf	－	－	－	平行沈線による区画→LR縄文→磨り消し	
32-13	17	MC46	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	沈線による楕円形区画→LR縄文	
32-14	17	MD44	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	RL縄文→沈線による楕円区画	
32-15	17	MG47	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	L撚糸→沈線による楕円区画	
32-16	17	MO54	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	LR縄文→矩形区画	
32-17	17	MM50	Ⅲ	深鉢	胴部	Ⅳe	－	－	－	沈線による矩形区画	
32-18	17	MN51	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳd	－	－	－	LR縄文、結節のRL縄文	胎土：繊維混入？
32-19	17	LM51	Ⅱ	深鉢	胴部下半	Ⅳl	－	－	－	R撚糸文	

第５表　土器観察表（３）

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	器種	部位	分類	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	文　様	備　考
32-20	17	LB31	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳc	－	－	－	R撚糸文	
32-21	17	LB40	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳa	－	－	－	口唇部：平坦　口縁部：隆帯＋LR縄文、LR原体側面圧痕	33-23と同一個体？
32-22	17	LB40	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳa	－	－	－	LR原体側面圧痕	
32-23	17	LB41	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳa	－	－	－	垂下する隆帯間にLR原体側面圧痕	
32-24	17	LB40	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳa	－	－	－	ボタン状突起を中心に十字形に隆帯→LR縄文、隆帯で矩形に画され部分→LR原体の側面圧痕、LR縄文	内面：磨き
32-25	17	MK52	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳg	－	－	－	口縁部:波状、波状頂部から垂下する隆帯＋LR縄文 胴部：沈線による矩形区画	
32-26	17	MJ52	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳg	－	－	－	RL縄文→沈線→磨り消し	
32-27	17	MJ52	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	Ⅳg	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：橋状取手 胴部：沈線による矩形区画文	
33-1	17	MD45	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳi	－	－	－	矩形状沈線・斜行沈線　隆帯上にＬＲ縄文	
33-2	17	MC45	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳi	－	－	－	沈線による矩形区画→LR縄文	内面：磨き
33-3	17	ME51	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳh	－	－	－	LR縄文→矩形状沈線→磨り消し	赤色塗彩の痕跡
33-4	17	ME51	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳh	－	－	－	LR縄文→沈線→磨り消し	
33-5	17	MD47	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取、平滑　　口縁部：波状、LR縄文→沈線による楕円区画→磨り消し	内面：磨き
33-6	17	MD45	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取　口縁部：波状口縁、沈線による楕円区画→LR縄文	
33-7	17	MD43	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取　口縁部：波状口縁、沈線による楕円区画→LR縄文	
33-8	17	MH48	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取　口縁部：波状口縁、沈線による楕円区画→LR縄文	
33-9	18	MD47	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取、平滑　　口縁部：波状、LR縄文→沈線による楕円区画→磨り消し	内面：磨き
33-10	17	MC45	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取　口縁部：波状口縁、沈線による楕円区画→LR縄文	
33-11	17	MC47	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口縁部：波状口縁、矩形状沈線→LR縄文	
33-12	18	MD46	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：波状口縁、LR縄文→沈線→磨り消し	内面：磨き
33-13	18	MC45	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：波状口縁、LR縄文→沈線→磨り消し	内面：磨き
33-14	18	LP50	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取、平滑　胴部：RL縄文→沈線→磨り消し	内面：磨き
33-15	18	MD46	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳh	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：波状口縁、沈線文	
33-16	18	ME47	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳh	－	－	－	RL縄文→平行沈線→磨り消し	
33-17	18	－	－	深鉢	口縁部	Ⅳi	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：隆帯→沈線→LR縄文	
33-18	18	MP52	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳh	－	－	－	RL縄文→沈線による矩形区画→磨り消し	内面：磨き
33-19	18	－	－	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取、平滑 口縁部：平行沈線＋末端が入り組む縦位の沈線＋弧状文→磨き	内面：磨き 33-22・24と同一個体
33-20	18	MD46	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳ	－	－	－	RL縄文→楕円形区画	
33-21	18	MI55	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳh	－	－	－	RL縄文→平行沈線→磨り消し	内面：磨き

第６表　土器観察表（４）

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	器種	部位	分類	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	文　様	備　考
33-22	18	MG56	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	末端が入り組む縦位の沈線＋弧状文→磨き	内面：磨き 33-19･24と同一個体
33-23	18	ML53	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	沈線＋縦位の入組文→磨き	内面：磨き 32-21と同一個体？
33-24	18	MG56	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	末端が入り組む縦位の沈線＋弧状文→磨き	内面：磨き 33-19･22と同一個体
33-25	18	MN56	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：刻み　口縁部：深い平行沈線＋逆「U」字状沈線＋矩形状区画　隆帯＋刻み、沈線による楕円形区画や円形文	内面：磨き 33-26･27と同一個体
33-26	18	ML55･56	Ⅱ･Ⅲ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：刻み　口縁部：深い平行沈線＋逆「U」字状沈線＋矩形状区画　隆帯＋刻み、沈線による楕円形区画や円形文	33-25･27と同一個体
33-27	18	MN56･ML57	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：刻み　口縁部：深い平行沈線＋逆「U」字状沈線＋矩形状区画　隆帯＋刻み、沈線による楕円形区画や円形文	33-25･26と同一個体
34-1	18	MN56	Ⅲ	深鉢	口縁部～胴部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：平坦 体部：沈線で区画した中に円文など	外面全面に赤色塗彩
34-2	18	MC45	Ⅰ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	沈線による楕円･矩形区画文	赤色塗彩の痕跡
34-3	18	MC44	Ⅱ	深鉢	胴部	ⅣJ	－	－	－	沈線による楕円区画文	赤色塗彩の痕跡
34-4	18	MH55	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取　口縁部：波状口縁、隆沈文	
34-5	18	MM51	Ⅰ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	隆沈文	
34-6	18	MP50	表土	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋楕円文・円形文→磨き	
34-7	18	MO54	Ⅱ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	円文＋楕円形区画文→磨き	内面：磨き
34-8	18	MN51	Ⅱ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋縦位の入組文→磨き	内面：磨き
34-9	18	ML56	Ⅰ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線と入り組み文	
34-10	18	MF53	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：折り返し口縁、末端が巻き込む沈線文	内面：磨き
34-11	19	MA51	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	末端が入り組む沈線文	内面：磨き 外面：煤状炭化物
34-12	19	MN53	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	末端が入り組む沈線文→磨き	内面：磨き
34-13	19	MF53	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	弧状文→磨り消し	内面：磨き
34-14	19	MM53	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	縦位の入組文→磨き	
34-15	19	MH52	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋楕円文→磨き	内面：磨き
34-16	19	MM52	Ⅱ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋入組文→磨き	内面：磨き
34-17	19	LQ52	Ⅱ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋入組文→磨き	内面：磨き
34-18	19	LP53	Ⅱ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋円文	内面：磨き
34-19	19	MI56	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：波状口縁？、平行沈線＋梯子状沈線文→磨き	内面：磨き
34-20	19	MM52	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：平滑　口縁部：平行沈線＋矩形区画に斜位沈線→磨き	内面：磨き
34-21	19	MH55	Ⅰ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	斜行沈線と弧状沈線	
34-22	19	MJ56	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋弧状文→磨き	内面：磨き
34-23	19	LP53	Ⅱ	鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部～胴部：平行沈線→磨き	内面：磨き
34-24	19	MH49	Ⅱ	壺？	胴部	Ⅳj	－	－	－	隆帯＋弧状文	
34-25	19	ME43	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋弧状文→磨り消し	内面：磨き
34-26	19	MH50	Ⅱ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線＋長方形区画→磨き	内面：磨き
34-27	19	MH57	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線、沈線による縦長楕円区画	
34-28	19	MC44	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：波状、沈線→LR縄文→磨り消し、円文、円形刺突	

第７表　土器観察表（５）

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	器種	部位	分類	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	文　様	備　考
34-29	19	MK61	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口縁部：波状口縁、隆沈文(隆帯上にLR縄文)	内面：磨き 33-19･24と同一個体
34-30	19	LB36	Ⅰ	深鉢	口縁部～胴部上半	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：円文、横走する平行沈線　　胴部：交差する沈線	
35-1	19	LN53	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：平坦　胴部：沈線による楕円区画文、フック状文	内面：磨き
35-2	19	MO55	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：平坦　口縁部：楕円区画文？	
35-3	19	MH58	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳj	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：平行沈線→磨き	内面：磨き
35-4	19	MN56	Ⅲ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	平行沈線	
35-5	19	MI58	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	線対象の弧状文→磨き	内面：磨き
35-6	19	LE･LF33	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	逆「V」字縄文→磨き	内面：磨き
35-7	19	MN54	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	線対称の弧状文→磨き	内面：磨き
35-8	19	MI57	Ⅳ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	線対象の弧状文→磨き	内面：磨き
35-9	19	MD47	Ⅰ	壺	胴部	Ⅳj	－	－	－	入り組み文	
35-10	19	ML56	Ⅰ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	沈線による楕円区画と弧状文	
35-11	19	LQ53	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	横位の波頭文	
35-12	19	MM53	Ⅰ	鉢	胴部	Ⅳj	－	－	－	入り組み文	
35-13	19	LO53	Ⅱ	鉢？	底部	Ⅳj	－	－	－	沈線文	内面：磨き
35-14	19	KS36	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	Ⅳk	－	－	－	口唇部：丸み　口縁部：波状　　口縁～胴部：RL縄文→平行沈線→磨り消しによる縄文帯	内面：磨き
35-15	19	KS36	－	深鉢	胴部	Ⅳk	－	－	－	RL縄文→平行沈線→縄文帯	外面：煤状炭化物
35-16	19	MC53	Ⅱ	鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口縁部：緩い波状、波頂部から垂下する捻りのある隆帯	
35-17	19	MC45	Ⅰ	壺	口縁部～胴部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：平滑　口縁部：沈線→捻りを加えた隆帯	
35-18	20	ML57	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	ボタン状の隆帯から垂下する捻りのある隆帯＋平行沈線	
35-19	20	MM52	Ⅱ	鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取、平滑　　口縁部：折り返し口縁、平行沈線＋楕円文	内面：磨き 内外面：煤状炭化物
35-20	20	MN55	Ⅱ	鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：粘土粒貼り付け→円形刺突 口縁部：波状、波頂部から垂下する短い隆帯	内面：煤状炭化物
35-21	20	MN52	Ⅱ	壺	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：貼り付け　口縁部：平行沈線→磨き	内面：磨き
35-22	20	MC46	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取、平滑 口縁部：小楕円文	内面：磨き
35-23	20	MC53	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取、丸み　口縁部：平行沈線→磨き	
35-24	20	LT41	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：突起、面取　口縁部：LR縄文→平行沈線	外面：煤状炭化物
35-25	20	ME43	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：緩い波状、末端が巻き込む沈線文→磨き	内面：磨き
35-26	20	MD46	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：平坦　口縁部：隆帯→平行沈線	
35-27	20	ML54	Ⅰ	壺	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取　口縁部：波状、口縁に沿う隆帯	
35-28	20	MC46	Ⅱ	壺	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取　口縁部：櫛葉状工具による掻き目→磨き　折り返し口縁	内面：磨き
35-29	20	MK54	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：刻み　口縁部：RL縄文?	胎土：繊維混入
36-1	20	MI54	Ⅱ	深鉢	口縁部～胴部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取　胴部：LR縄文	

第８表　土器観察表（６）

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	器種	部位	分類	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	文　様	備　考
36-2	20	MC45	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取、平坦　口縁部：LR縄文	
36-3	20	LG39	Ⅱ	鉢？	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：丸み　口縁部：RL縄文	内面：磨き
36-4	20	MC44	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：平滑　口縁部：RL縄文　胴部上半：RL縄文	
36-5	20	MM51	Ⅰ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：平坦　口縁部～胴部：RL＋LRの非結束の羽状縄文＋LR縄文	
36-6	20	MN51	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳ	－	－	－	口唇部：面取、平滑　口縁部：折り返し口縁 胴部：R網目状撚糸文	
36-7	20	LG34	Ⅱ	深鉢	口縁部	Ⅳ	－	－	－	LR縄文	
36-8	－	MD56	Ⅱ	深鉢	胴部	Ⅳ	－	－	－	網目状沈線	内面：磨き
36-9	－	MO55	Ⅰ	深鉢	胴部下半	Ⅳ	－	－	－	網目状撚糸文(R)	

挿図番号	図版番号	出土位置	層位	器種	部位	分類	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	調　整	備　考
28-1	15	MC45	床面	須恵器	胴部	壺	－	－	－	外面：ロクロ調整　緑白色の自然釉 内面：ロクロ調整	
28-2	－	SI01	7	土師器	口縁部～底部	坏	(126.0)	(54.0)	40.0	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	灯明皿 底部：回転糸切り
28-3	15		埋土	土師器	胴部～底部	坏	－	(56.0)	－	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	底部：回転糸切り
28-4	15		埋土	土師器	口縁部～底部	甕	(90.0)	－	－	口縁：指頭圧痕→ナデ　外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	
28-5	15		埋土	土師器	口縁部～胴部	甕	(182.0)	－	－	外面：ヘラケズリ　内面：ナデ	
28-6	15		埋土	土師器	口縁部～胴部	甕	(150.0)	－	－	口縁：指頭圧痕→ナデ　外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	
28-7	16		埋土	土師器	口縁部	甕	－	－	－	外面：ナデ　内面：ナデ	
28-8	16		カマド	土師器	口縁部	甕	－	－	－	外面：ナデ　内面：ナデ	
28-9	16		カマド	土師器	口縁部	甕	－	－	－	外面：ナデ・ヘラケズリ　内面：ナデ	
28-10	16		カマド	土師器	口縁部	甕	－	－	－	外面：ナデ・ヘラケズリ　内面：ナデ	
28-11	－		埋土	土師器	胴部下半	甕	－	(114.0)	－	外面：ヘラケズリ　内面：ナデ	底部に木葉痕
28-12	16		埋土	土師器	胴部	甕	－	－	－	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	
28-13	16		埋土	土師器	胴部	甕	－	－	－	外面：タタキ目	
28-14	16		埋土	土師器	胴部	甕	－	－	－	外面：ヘラケズリ　内面：ナデ	
28-15	－		埋土	土師器	胴部	甕	－	－	－	外面：ロクロ調整→タタキ目 内面：ロクロ調整→タタキ目	
29-1	16	SI02	埋土	土師器	口縁部～胴部	甕	－	－	－	外面：ナデ・ヘラケズリ　内面：ナデ	
29-2	16		埋土	土師器	口縁部	甕	－	－	－	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	
29-3	－		床面	土師器	底部	坏	－	56.0	－	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	底部：回転糸切り
29-4	15	SI23	2	土師器	口縁部～胴部	坏	(158.0)	(58.0)	74.0	外面：ロクロ→ヘラミガキ 内面：ロクロ→ヘラミガキ	底部：回転糸切り
29-5	15		カマド	土師器	胴部	甕	－	－	－	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	
29-7	16		カマド	土師器	口縁部～胴部	坏	(165.0)	(80.0)	50.0	外面：タタキ目 内面：ナデ	
29-9	15	SK10	埋土	土師器	口縁部～底部	坏	(132.0)	(52.0)	43.0	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	
29-10	16	SK37	埋土	土師器	口縁部～胴部	坏	－	－	－	外面：ナデ・ミガキ　内面：ミガキ	

43-1	20	MD46	Ⅰ	土師器	胴部～底部	甕	－	90.0	(103.0)	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	底部：回転糸切り
43-2	20	MD48	Ⅱ	土師器	底部	甕	－	68.0	(31.0)	外面：ヘラケズリ　内面：ナデ	底部に木葉痕
43-3	20	MD42	Ⅱ	土師器	口縁部	甕	－	－	－	外面：ヘラケズリ・ヨコナデ　内面：ナデ	
43-4	20	MD45	Ⅰ	土師器	口縁部	坏	－	－	－	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	
43-5	20	LS42	Ⅰ	須恵器	口縁部～肩部	甕	－	－	－	外面：ロクロ調整　内面：ロクロ調整	

第９表　土製品観察表

挿図番号	図版番号	遺物の種類	出土位置	層位	器種	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	調　整	備　考
36-10	18	ミニチュア土器	ME53	―	―	―	35.0	(36.0)	外面：平行沈線文	外面・底面に煤状炭化物 底面中央に径10mmほどの皿状の窪みあり
36-11	18	ミニチュア土器	LD39	Ⅱ	―	―	32.0	(11.0)	底面は平滑に調整	
36-12	18	ミニチュア土器	MH55	Ⅰ	―	―	34.0	(10.5)	外面：沈線による曲線文	底部は上げ底

挿図番号	図版番号	遺物の種類	出土位置	層位	部位	高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	調　整	備　考
36-13	18	板状土偶	LS53	Ⅱ	下半	(41.5)	(51.0)	(9.8)	表裏面：格子状沈線 中央に連鎖状文	
36-14	18	遮光器形土偶	排土	―	肩部	(50.0)	(67.5)	(22.0)	頸部に３条の沈線？	焼けただれて詳細は不明 内面に指紋が残存

挿図番号	図版番号	遺物の種類	出土位置	層位	部位	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	調　整	備　考
36-15	19	蓋形土器？	MJ53	Ⅰ	つまみ部	(34.5)	(88.5)	(32.5)	紐かけ部分に2個の穿孔とそれに直交する穿孔も	

挿図番号	図版番号	遺物の種類	出土位置	層位	径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	調　整	備　考
18-10	14	円盤状土製品	SKF36	15	41.0	7.0	14.4	表裏面：無文	
36-16	19	円盤状土製品	MA40	Ⅱ	37.0	7.0	10.2	表面：LR縄文	
36-17	19	円盤状土製品	MI52	Ⅱ	46.0	7.0	16.4	表面：沈線文　L縄文	
36-18	19	円盤状土製品	MM53	Ⅱ	42.0	6.5	12.5	表面：沈線文	
36-19	19	円盤状土製品	MG50	Ⅱ	35.0	4.0	6.7	表面: 沈線文	
36-20	19	円盤状土製品	MN57	Ⅱ	36.5	7.0	9.3	表面：沈線文	
36-21	19	円盤状土製品	MK54	Ⅱ	49.0	14.0	22.5	裏面：縁に沿ってリング状の痕跡	
36-22	19	円盤状土製品	MK56	Ⅰ	―	17.0	(24.8)	表面：笹葉状(？)圧痕　裏面：工具による削り痕跡	

挿図番号	図版番号	遺物の種類	出土位置	層位	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	調　整	備　考
43-6	20	土錘	KT36	Ⅰ～Ⅱ	45.5	30.0	35.5	胎土・焼成・重さなどから同一時代(おそらく古代以降)、同時に使われた可能性がある。	胎土に黒色の砂(1mm以下で)を含み緻密で、焼成も非常に良い
43-7	20	土錘	LS53	Ⅰ	52.0	36.0	30.2		

挿図番号	図版番号	遺物の種類	出土位置	層位	径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	調　整	備　考
29-8	16	碁石	LT47 (SI23 埋土 上面)	―	19.0	7.5	1.9	明赤褐色で胎土は緻密で、焼成は良好である。	近世か

第10表　石器・石製品一覧表

挿図番号	図版番号	器種	出土位置	層位	石質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
18-11	14	磨製石斧	SKF36	2	閃緑岩？	(98.0)	51.0	28.0	212.8	両側面にわずかな凹み部分あり－着柄時の痕跡か
18-12	14	石篦	SKF36	6	瑪瑙	78.0	51.0	13.0	49.6	主要剥離面に二次加工無し 背面：両側縁に浅い剥離 未製品か
19-13	14	凹石	SX08	－	凝灰岩	133.0	74.0	35.0	227.6	両面に凹み部分
19-18	14	石皿	SX39	－	凝灰岩	(54.0)	(72.0)	36.0	65.0	
29-6	15	磨石	SI23	－	デイサイト	(217.0)	61.0	62.0	1,200.0	上半の一面にのみ磨面
37-1	21	石鏃	LK36	Ⅱ	頁岩	35.0	12.0	4.0	1.4	
37-2	21	石鏃	MH43	Ⅰ	頁岩	30.0	16.0	5.0	1.8	
37-3	21	石鏃	MD46	Ⅰ	頁岩	37.0	14.0	4.0	1.7	
37-4	21	石槍	－	排土	頁岩	85.0	33.0	16.0	35.9	
37-5	21	石槍	MI48	Ⅱ	頁岩	129.0	40.0	22.0	99.5	
37-6	21	石匙	MH47	Ⅳ	頁岩	89.0	36.0	17.0	17.3	
37-7	21	石匙	LA35	－	頁岩	69.0	42.0	60.0	15.1	
37-8	21	石匙	LP45	Ⅰ	頁岩	70.0	40.0	11.0	22.3	
37-9	21	石匙	LS52	Ⅲ	頁岩	87.0	38.0	10.0	18.1	
37-10	21	石匙	LD38	Ⅱ	頁岩	50.0	32.0	11.0	14.5	
37-11	21	石匙	MH50	Ⅲ	頁岩	83.0	29.0	12.0	19.3	
37-12	21	石匙	LO53	Ⅱ	頁岩	30.0	52.0	13.0	16.3	
38-1	21	トランシェ様石器	LE32	Ⅲ	頁岩	88.0	47.0	17.0	56.2	
38-2	21	トランシェ様石器	ML61	Ⅱ	頁岩	58.0	37.0	16.0	30.5	
38-3	21	石篦	MI52	Ⅲ	頁岩	80.0	43.0	12.0	39.9	
38-4	21	石篦	MI50	Ⅰ	頁岩	85.0	54.0	14.0	50.3	
38-5	21	石篦	ME56	－	頁岩	41.0	26.0	10.5	13.1	
38-6	21	石篦	MP50	Ⅱ	頁岩	35.0	22.0	7.0	4.4	
38-7	12・21	石篦	MG45	Ⅲ	頁岩	126.0	42.0	18.0	86.8	土中に立った状態で出土
38-8	21	スクレイパー	MG52	Ⅱ	頁岩	58.5	46.0	11.0	33.2	
38-9	21	スクレイパー	MP51	Ⅰ	頁岩	43.0	41.0	12.0	21.4	
39-1	21	スクレイパー	LN51	Ⅱ	頁岩	64.0	62.0	16.0	36.9	
39-2	21	スクレイパー	LM37	Ⅱ	頁岩	65.0	65.5	9.0	26.2	
39-3	21	スクレイパー	MN53	Ⅱ	頁岩	98.0	73.0	19.0	84.5	
39-4	21	スクレイパー	MH51	Ⅰ	頁岩	100.0	41.0	12.0	53.2	
39-5	21	スクレイパー	KR33	Ⅱ	頁岩	94.0	75.0	20.0	113.7	
39-6	21	スクレイパー	LD42	Ⅱ	頁岩	75.0	43.5	15.5	34.1	
40-1	21	石核	MD48	－	頁岩	49.0	74.0	68.0	193.3	礫皮あり
40-2	21	石核	MD45	Ⅰ	頁岩	56.0	80.0	87.0	334.6	礫皮あり
41-1	22	磨製石斧	MG50	Ⅱ	花崗岩	130.0	46.0	30.0	289.0	
41-2	22	磨製石斧	LE36	－	安山岩	114.0	46.0	21.5	177.3	
41-3	22	磨製石斧	LO46	Ⅰ	安山岩	126.0	43.0	24.0	143.1	
	22	磨製石斧	LK40	Ⅰ	安山岩				58.8	
41-4	22	磨製石斧	MK52	Ⅰ	緑泥変岩	40.0	28.0	10.0	20.1	
41-5	22	磨石	MJ61	Ⅰ	砂岩	149.0	68.0	40.5	514.0	
41-6	22	磨石	－	表採	花崗岩	101.5	82.5	57.5	751.0	
42-1	22	磨石	MC55	Ⅰ	デイサイト	117.0	62.5	45.5	487.0	
42-2	22	磨石	MC46	Ⅱ	デイサイト	103.0	90.0	50.0	576.0	
42-3	22	磨石	MO50	Ⅰ	デイサイト	95.0	80.0	35.5	314.0	
42-4	22	凹石	MD50	Ⅱ	デイサイト	138.0	84.5	39.5	538.0	
42-5	22	凹石	－	排土	デイサイト	173.5	72.0	40.0	714.0	
42-6	22	凹石	MJ50	表採	デイサイト	83.0	67.5	38.5	267.0	
42-7	22	石皿	MN62	Ⅱ	デイサイト	73.5	51.0	23.5	72.8	
42-8	22	石錘	LT43	Ⅰ	デイサイト	84.0	66.0	21.5	137.9	
42-9	22	石錘	MK48	Ⅱ	デイサイト	96.0	116.5	17.0	263.0	
42-10	22	球状礫	MN50	Ⅰ	凝灰岩	直径　46.5			84.9	
42-11	22	円盤状石製品	LR52	Ⅱ	デイサイト	直径　46.5～50		9.5	26.1	
43-8	22	砥石	排土	－	凝灰岩	(111.0)	45.0	27.5	207.3	
43-9	22	砥石	排土	－	凝灰岩	(78.0)	50.0	19.5	111.6	
43-10	22	砥石	LT40	Ⅰ	凝灰岩	(65.0)	49.5	36.0	190.6	
43-11	22	石製品	LM44	Ⅱ	凝灰岩	62.0	49.5	20.0	82.7	

第４章　理化学的分析

株式会社　加速器分析研究所

第１節　　自然科学分析

はじめに

小勝田館跡で採取された試料を対象に自然科学分析を実施する。本分析調査では、基本土層や遺構より採取された火山灰様試料より、テフラに由来する火山ガラスや軽石を抽出し、噴出年代が明らかにされているテフラとの対比を行うことで、遺構および基本層序の年代について検証する。また、土坑より出土した炭化材や柱穴より出土した材、カマド跡より出土した種実等について、樹種同定や種実同定を実施し、当時の植物利用について検証する。

１　試料

（１）テフラ分析

試料No.１、２は古代の竪穴建物跡とされるＳＩ01の東西方向に設定した土層ベルトから採取されている。試料No.１は、埋土４層中に堆積する層厚５cm程度の明黄色(2.5YR6/8)の火山灰と思われる５層から、試料No.２は埋土６層の上面から採取されたものである。発掘調査所見によると埋土は自然堆積であるとされ、黒色土と地山土の混合土(９層)による貼り床が確認されている。試料No.１、２の外観は、黒褐色を呈する砂まじりシルトである。

試料No.３～８は、縄文時代の落とし穴ＳＫＴ19の縦断土層図作成のために設定したトレンチ東壁面の地山（基本土層Ⅳ１～５層）から採取したものである。各試料の外観は、試料No.３が黄褐色、試料No.４が明黄褐色、試料No.５～８が褐色を呈する粘土・砂まじりシルトである。

（２）木材・炭化材の樹種同定

試料は、土坑等から出土した炭化材３点(試料No.１～３)と、柱穴から出土した柱根で、炭化していない木材１点(試料No.４)の合計４点である。なお、これらの試料を用いて放射性炭素年代測定が実施されており、樹種同定試料No.１～４は次節の年代測定試料No.３、６～８に対応する。

（３）種実同定

種実同定試料は、ＳＩ01のカマド（焼土）から出土した２個(試料No.１)と、ＳＩ23のカマド（火床面）から出土した11個(試料No.２)、ＳＩ23のＮ２（焼土）から出土した17個(試料No.３)の、計３点30個である。試料は、全て乾燥した状態で容器に収納されている。

２　分析方法

（１）テフラ分析・屈折率測定

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄

みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

火山ガラスや軽石については、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。試料No.１、２、４は軽石、試料No.３、５～８は火山ガラスを測定に供した。

（２）木材・炭化材の樹種同定

柱根は、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、自然乾燥させた後、３断面の割断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の観察で確認された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

（３）種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および椿坂（1993）等を参考に実施し、部位･状態別に個数を数えて結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体を分類群別に容器に収納する。

３　結果

（１）テフラ分析・屈折率測定

①テフラ分析

結果を第11表に記す。スコリアはすべての試料から検出されなかった。火山ガラスは、試料No.１、２および試料No.４～８に中量、試料No.３に多量含まれる。軽石は、試料No.１に多量、試料No.２に少量、試料No.３に極めて微量、試料No.４～６に微量含まれる。

火山ガラスは、無色透明の軽石型火山ガラスが多く、ついで無色透明のバブル型火山ガラスが多い。また、試料No.2および試料No.５～８には、褐色を呈する軽石型火山ガラス、バブル型火山ガラスが含まれる。

軽石は、試料No.１、２に、最大径2.7～3.8mmの、白色を呈し、発泡やや良好の軽石が多く含まれ、白色を呈し、発泡やや不良のものが微量含まれる。斜方輝石や角閃石の斑晶鉱物を包有する軽石が認められる。試料No.３～６に、最大径2.0～3.3mmの、白色を呈し、発泡やや不良の軽石が多く、白色を呈し、発泡やや良好の軽石が極めて微量含まれる。試料No.６には、高師小僧様の酸化鉄団塊が極め

て微量混在している。

砂粒の主体は、無色透明～白色の斜長石や石英で、不透明鉱物、斜方輝石、単斜輝石および角閃石の遊離斑晶が微量含まれる。凝灰岩や流紋岩などの岩片が微量混在している。

②屈折率測定

結果を第44図に記す。試料No.１、２は、ほぼ同様の屈折率測定結果を示し、n1.504またはn1.506からn1.509またはn1.512のレンジと、n1.517からn1.518の高い屈折率のレンジとに明瞭に分かれる。モードは、n1.507またはn1.509前後にあると考えられる。

試料No.３は、n1.501からn1.509のレンジで、モードは不明瞭であるが、n1.504前後にあると考えられる。

試料No.４、６、７はほぼ同様の屈折率測定結果を示し、n1.503またはn1.504からn1.509またはn1.511までのレンジで、モードはn1.504またはn1.505前後にあると考えられる。

試料No.５、８はほぼ同様の屈折率測定結果を示し、n1.498からn1.499の低屈折率のレンジと、n1.503からn1.509またはn1.510のレンジとに明瞭に分かれる。モードはn1.504またはn1.505前後にあると考えられる。

第11表　テフラ分析結果

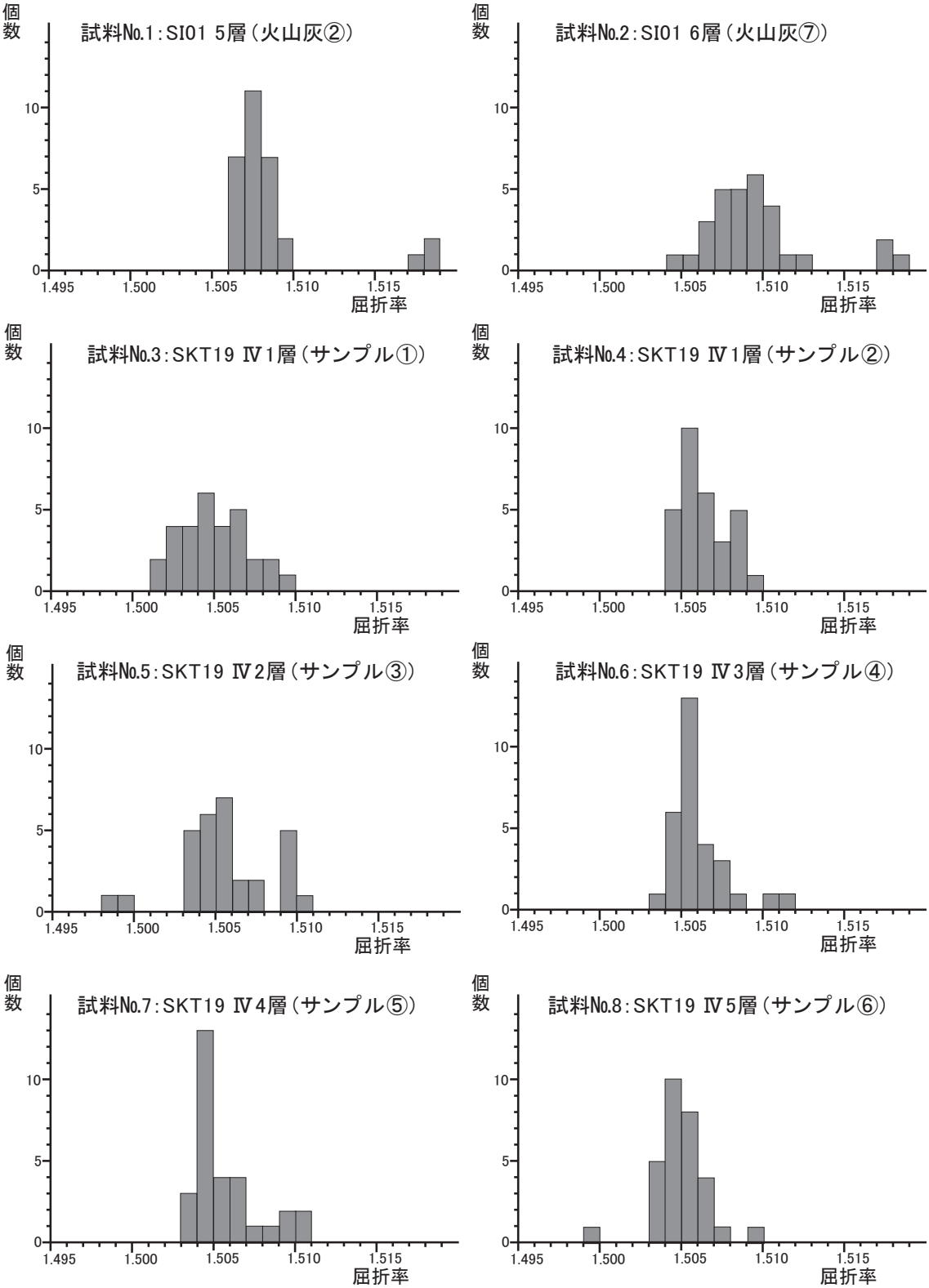
地点名	層名	試料内容	試料No.	スコリア	火山ガラス		軽石			備考
				量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
SI01	5層	火山灰②	1	－	＋＋＋	cl・pm>cl・bw	＋＋＋＋	W・sg(ho)>W・sb	3.8	砂粒の主体は、斜長石や石英からなり、不透明鉱物、斜方輝石、単斜輝石、角閃石を伴う。岩片は、安山岩が含まれる。
	6層	火山灰⑦	2	－	＋＋＋	cl・pm>cl・bw>br・bw,br・pm	＋＋＋＋	W・sg(opx)>W・sb	2.7	砂粒の主体は、上記とほぼ同じであるが、角閃石斑晶がやや多く含まれる。
SKT19	Ⅳ1層	サンプル①	3	－	＋＋＋＋	cl・pm>cl・bw	(+)	W・sb	3.3	砂粒の主体は、上記とほぼ同じであるが、角閃石斑晶がやや多く含まれる。
	Ⅳ1層	サンプル②	4	－	＋＋＋	cl・pm>cl・bw	＋	W・sg>W・sb	2.4	砂粒の主体は、上記とほぼ同じである。
	Ⅳ2層	サンプル③	5	－	＋＋＋	cl・pm>cl・bw>br・bw,br・pm	＋	W・sb	2.7	砂粒の主体は、上記とほぼ同じである。
	Ⅳ3層	サンプル④	6	－	＋＋＋	cl・pm>cl・bw>br・bw,br・pm	＋	W・sb	2.0	酸化鉄団塊が微量混在している。
	Ⅳ4層	サンプル⑤	7	－	＋＋＋	cl・pm>cl・bw>br・bw,br・pm	＋	－	－	砂粒の主体は、上記とほぼ同じである。
	Ⅳ5層	サンプル⑥	8	－	＋＋＋	cl・pm>cl・bw>br・bw,br・pm	－	－	－	砂粒の主体は、上記とほぼ同じである。

凡例　－:含まれない.(+):きわめて微量.　＋:微量.　＋＋:少量.　＋＋＋:中量.　＋＋＋＋:多量.

W:白色.

sg:やや良好.sb:やや不良.最大粒径はmm.

cl:無色透明.br:褐色.bw:バブル型.pm:軽石型.(opx):斜方輝石斑晶包有.(ho):角閃石斑晶含有.



第44図　火山ガラス・軽石屈折率

（２）木材・炭化材の樹種同定

樹種同定結果を第12表に示す。これらの柱根および炭化材は、広葉樹２種類（クリ・トチノキ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

①クリ（Castanea crenata ＳＩeb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

②トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、１～15細胞高で層階状に配列する。

第12表　樹種同定結果

試料No.	遺構	位置	状態	種類	備考
1	SKF27	土坑2層	炭化物	クリ	
2	SK43	土坑埋設土器内	炭化物	クリ	
3	SK47	土坑内	炭化物	クリ	
4	SKP70	柱穴内	生木	トチノキ	柱根

（３）種実同定

結果を第13表に示す。３試料を通じて、被子植物４分類群(栽培種のアワ、草本のイヌタデ近似種、ニシキソウ亜属、エノキグサ)29個の種実が同定された。種実以外では、ＳＩ23のカマド火床面から、土粒が1個確認された。

栽培種は、ＳＩ23のカマド（火床面）から、炭化したアワの胚乳が１個確認された。栽培種を除いた分類群は、ＳＩ23のカマド（火床面）からイヌタデ近似種の果実が９個、Ｎ２（焼土）からエノキグサの種子が17個と、ＳＩ01のカマド（焼土）からニシキソウ亜属の種子が２個確認された。これらの草本類は、明るく開けた場所を好んで生育する、いわゆる人里植物に属する分類群である。出土種実は、明るく開けた草地環境に生育していたと考えられる。しかしながら、イヌタデ近似種とエノキグサは、種実の保存状態が極めて良好で明らかに炭化していないことから、後代の混入である可能性が高いと判断されるため、考察より除外している。ニシキソウ亜属は炭化しているか、これも混入の可能性があるため、考察より除外している。以下に、アワの形態的特徴を述べる。

①アワ（*Setaria italica*（L.）P.Beauv.）　イネ科エノコログサ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ1.3mm、幅1.1mm、厚さ0.8mmの半偏球体を呈し、腹面は平らで背面は丸みがある。胚乳の基部正中線上は、背面に長さ0.8mm(胚乳長の約２／３)を占める深い馬蹄形の胚の凹みがあり、腹面には長径0.5mm程度の浅い広倒卵形の窪みがある。胚乳表面は粗面。

第13表　種実同定結果

番号	遺構		遺構	部位	状態		状態	備考
1	SI01	カマド(焼土)	ニシキソウ亜属	種子	完形	炭化?	2	混入の可能性,1個食痕
2	SI23	カマド(火床面)	アワ	穎･胚乳	完形	炭化	1	
			イヌタデ近似種	果実	完形		9	混入の可能性,9個食痕
			種実ではない(土粒)				1	
3	SI23	N2(焼土)	エノキグサ	種子	完形		17	混入の可能性

４　考察

（１）テフラ

試料No.１、２から検出された軽石および火山ガラスの形態の特徴と屈折率、および共伴する重鉱物に斜方輝石が多い傾向のあること、さらには遺跡の地理的位置と、これまでに研究された東北地方

におけるテフラの産状(町田ほか(1981;1984)、Arai et al.(1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、試料が採取されたテフラ層は、十和田aテフラ(To-a)に対比されると考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか,1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査により、西暦915年とされている。現地調査所見ではＳＩ01の年代について古代と想定されており、本分析結果と矛盾しない。

なお、試料No.１に含まれる軽石の特徴(特に角閃石斑晶を包有する)と、角閃石の遊離結晶が含まれることから、十和田八戸テフラ（To-H）が混在している可能性が考えられる。また、試料No.１、２に僅かに認められる高屈折率のレンジは、十和田南部テフラ(To-Nb:町田・新井,2003;Hayakawa,1985)に由来する可能性がある。To-Nbの噴出年代は、暦年代で約9,400年前とされている(工藤・佐々木,2007)。

試料No.３～８については、含まれる軽石の特徴(特に角閃石斑晶を包有する)と、角閃石の遊離結晶が含まれること、および火山ガラスの屈折率から、十和田八戸テフラ(To-H:Hayakawa,1985)に由来する可能性が高い。To-Hの噴出年代は、約1.5万年前とされている(町田・新井,2003)。なお、試料No.５、８に僅かに含まれる低屈折率のレンジを示すテフラは、姶良-Tn火山灰(AT:町田・新井,1976)に由来する可能性がある。

（２）木材・炭化材

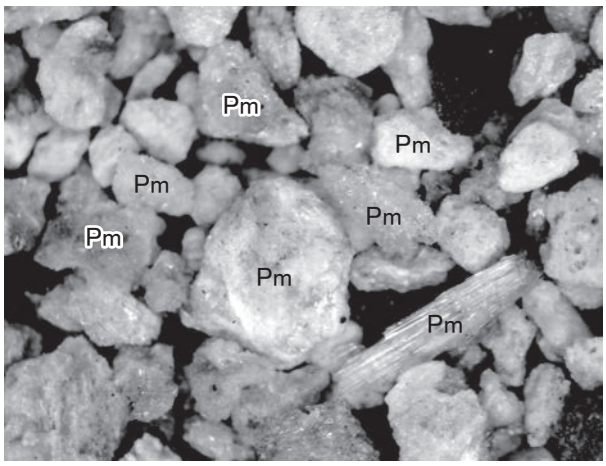
土坑から出土した炭化材は、ＳＫＦ27、ＳＫ43、ＳＫ47がクリであった。広葉樹のクリは、二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。

ＳＫＦ27、ＳＫ43、ＳＫ47については、樹種同定を実施したクリの炭化材を用いて年代測定を実施しており、較正年代で2300～1900calBC頃の値が得られている。

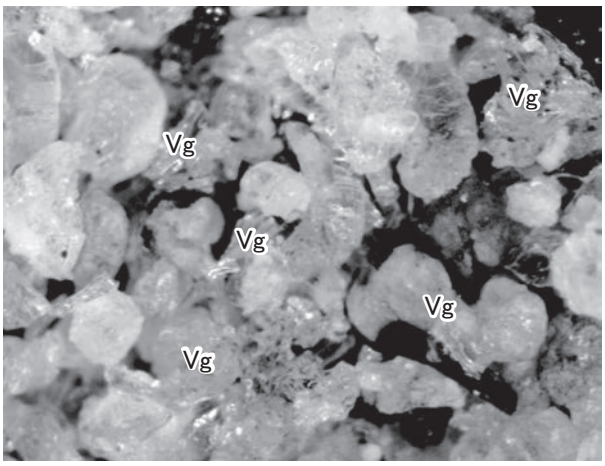
ＳＫＦ27、ＳＫ43、ＳＫ47出土炭化材の年代測定結果は、較正年代で2300～1900calBC頃となっている。縄文時代後期前葉頃に相当する値で(小林編,2008)、当該期の土坑でクリが燃料材等として利用されていた可能性がある。

ＳＫＰ70から出土した柱根は、広葉樹のトチノキに同定された。トチノキは谷沿い等の適湿地に生育する落葉高木で、木材は軽軟で強度と保存性が低い。同一試料を用いた年代測定では、７世紀後半～８世紀後半頃の較正年代値が得られた。この頃に、トチノキが柱材として利用されたことが推定される。

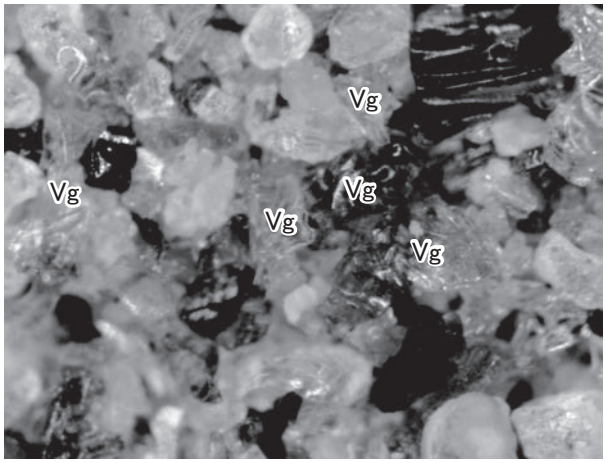
伊東・山田(2012)のデータベースによれば、該当する時期の柱材について樹種同定を実施した例は、秋田県内では払田柵跡の事例が多く、他に中谷地遺跡の事例が１例ある。これらの結果をみると、払田柵跡の柱のうち、大部分は針葉樹のスギであり、他に広葉樹のクリ、トネリコ属、ケヤキが認められる。中谷地遺跡の柱材は広葉樹のクリに同定されている。スギは、軽軟な部類には入るが、強度や耐水性は比較的高い。クリとケヤキは強度と耐朽性に優れており、トネリコ属も強度が高い材質を有する。一方、今回のトチノキは、強度・保存性共に低く、これまでの事例と比較すると柱材としてはあまり適材とはいえない。この点は、建物の規模や用途・機能、柱材の位置等の情報も含めて検証する必要がある。



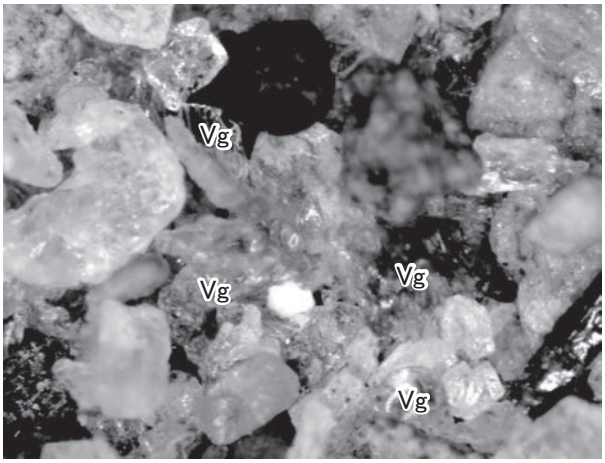
1.To-aの軽石　SI01 5層　試料No.1（火山灰②）



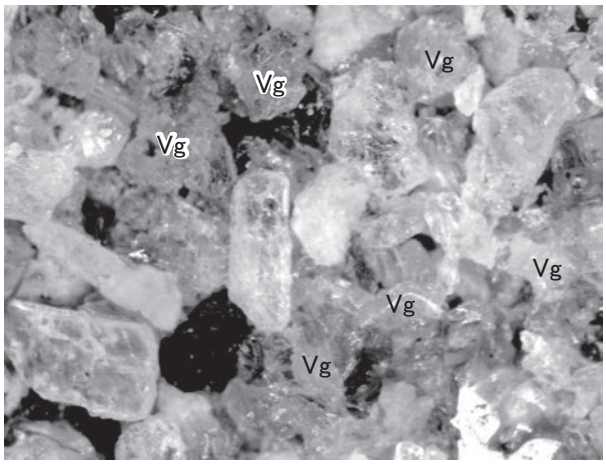
2.火山ガラス　SKT19 Ⅳ1層　試料No.3（サンプル①）



3.火山ガラス　SKT19 Ⅳ3層　試料No.6（サンプル④）

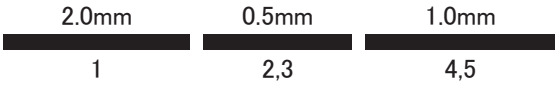


4.火山ガラス　SKT19 Ⅳ4層　試料No.7（サンプル⑤）

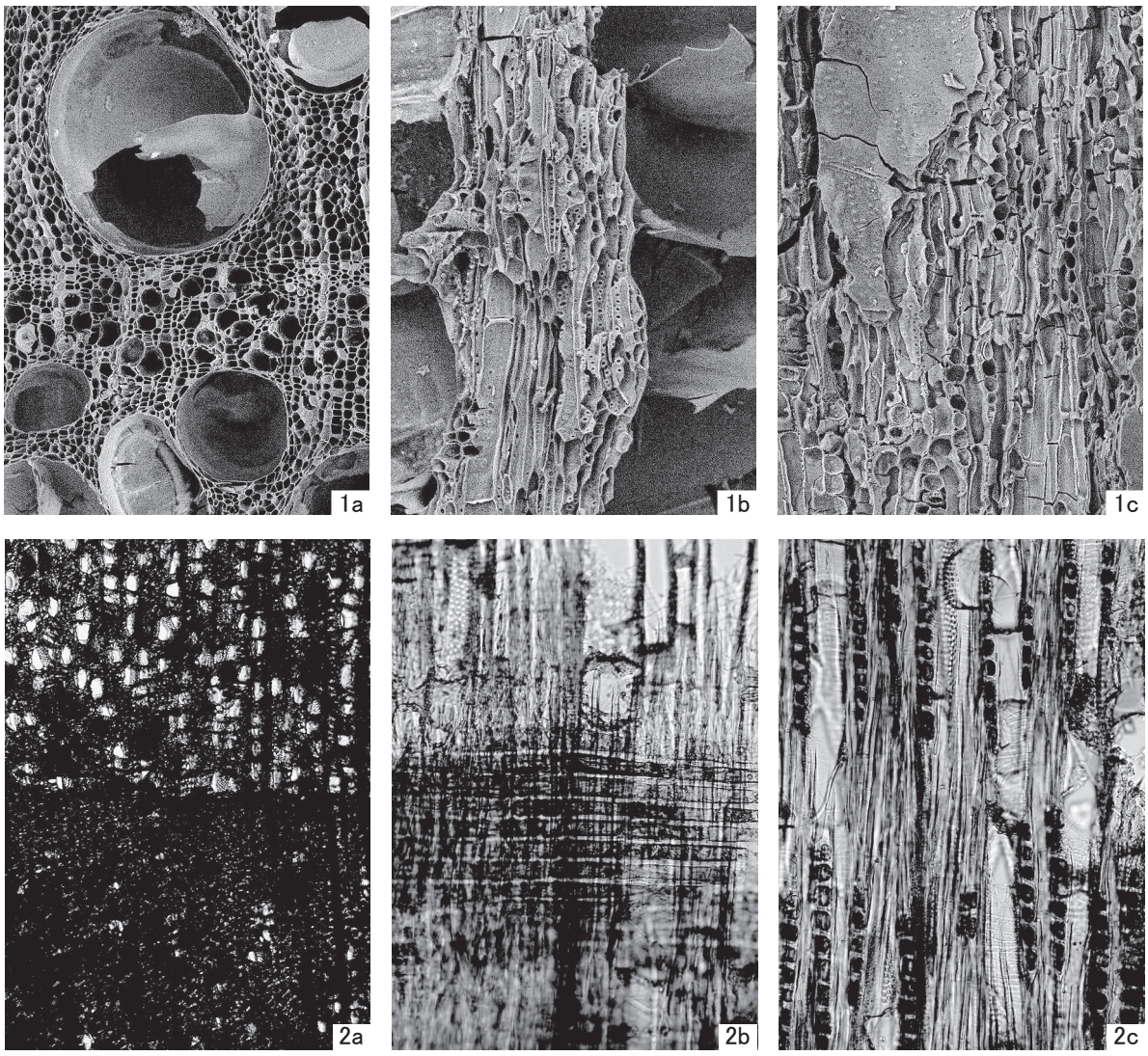


5.火山ガラス　SKT19 Ⅳ5層　試料No.8（サンプル⑥）

Pm:軽石．Vg:火山ガラス．

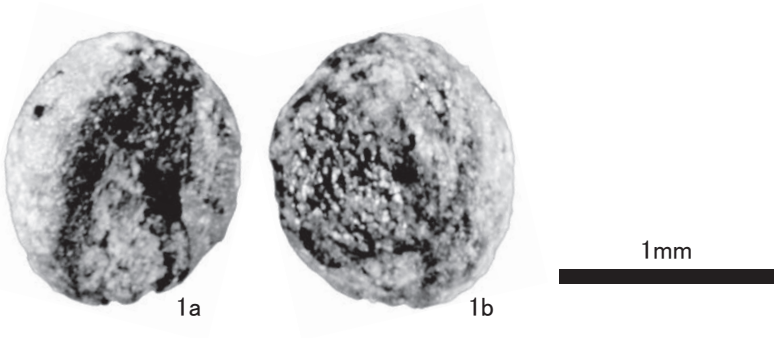


第45図　テフラ



1.クリ(試料No.1)
2.トチノキ(試料No.5)
　a：木口，b：柾目，c：板目

100μm:2a
100μm:1a
100μm:b,c



1. アワ 穎・胚乳（SI23カマド火床面）

第46図　炭化材・炭化種実

（３）種実

種実同定の結果、ＳＩ23カマド（火床面）からは、栽培種のアワの炭化した胚乳が確認された。雑穀のアワが、近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時の住居内で利用された植物質食糧と示唆される。また、炭化していることから、火を受けたとみなされる。

文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in JapanⅡ－Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido－.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.
古澤明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo,vol.60 ,507-592.
早川由紀夫・小山真人,1998,日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－.火山,43,403-407.
林昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学　出土木製品用材データベース.海青社,449p.
小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編,2005,日本の地形3　東北.東京大学出版会,355p.
小林達雄編,2008,総覧　縄文土器,『総覧　縄文土器』刊行委員会,896-903.
工藤崇・佐々木寿,2007,十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年.地学雑誌,116,653-663.
町田洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－.科学,46,339-347.
町田洋・新井房夫・森脇広,1981,日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.
町田洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦,1984,テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－.渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,865-928.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
島地謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
椿坂恭代,1993,アワ・ヒエ・キビの同定.吉崎昌一先生還暦記念論集「先史学と関連科学」,261-281.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

第２節　^{14}C年代測定（ＡＭＳ法）

はじめに

測定対象試料は、小勝田館跡の遺構から出土した炭化物、木片の合計８点である（第４表）。試料８は、柱穴ＳＫＰ70の底面から出土した柱根から採取された木片である。なお、試料３、６～８の同一試料に対して樹種同定が実施されている。年代測定試料３、６～８は、樹種同定試料１～４に各々

対応する。

測定の目的は、試料と試料が出土した遺構の年代を明らかにすることである。

１　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第14表に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

２　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

３　算出方法

（１）$\delta^{13}C$　は、試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第14表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第14表に、補正していない値を参考値として第15表に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}C$によって補正する必要があるため、補正した値を第１表に、補正していない値を参考値として第15表に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示

される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第15表に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

４　測定結果

測定結果を第14表、第15表に示す。８点の試料の年代値は大きく２群に分けて捉えられ、それらの間には明瞭な年代差が認められる。以下、これら２群に分けて測定結果を検討する。

試料１、３～７の^{14}C年代は、3770±30yrBP（試料３）から3620±30yrBP（試料６、７）の間にある。暦年較正年代（1σ）は、最も古い３が2274～2141calBCの間に２つの範囲、最も新しい７が2022～1943calBCの間に２つの範囲で示され、いずれも縄文時代後期前葉頃に相当する（小林編2008）。

試料２、９の^{14}C年代は、２が1240±20yrBP、９が1270±20yrBPとなっており、誤差（±1σ）の範囲で一致する。暦年較正年代（1σ）は、２が689～776calAD、９が687～767calADの間に各々２つの範囲で示され、いずれも古墳時代終末期から奈良時代頃に相当する（佐原2005）。

試料の炭素含有率はすべて50％を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学上　ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第14表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

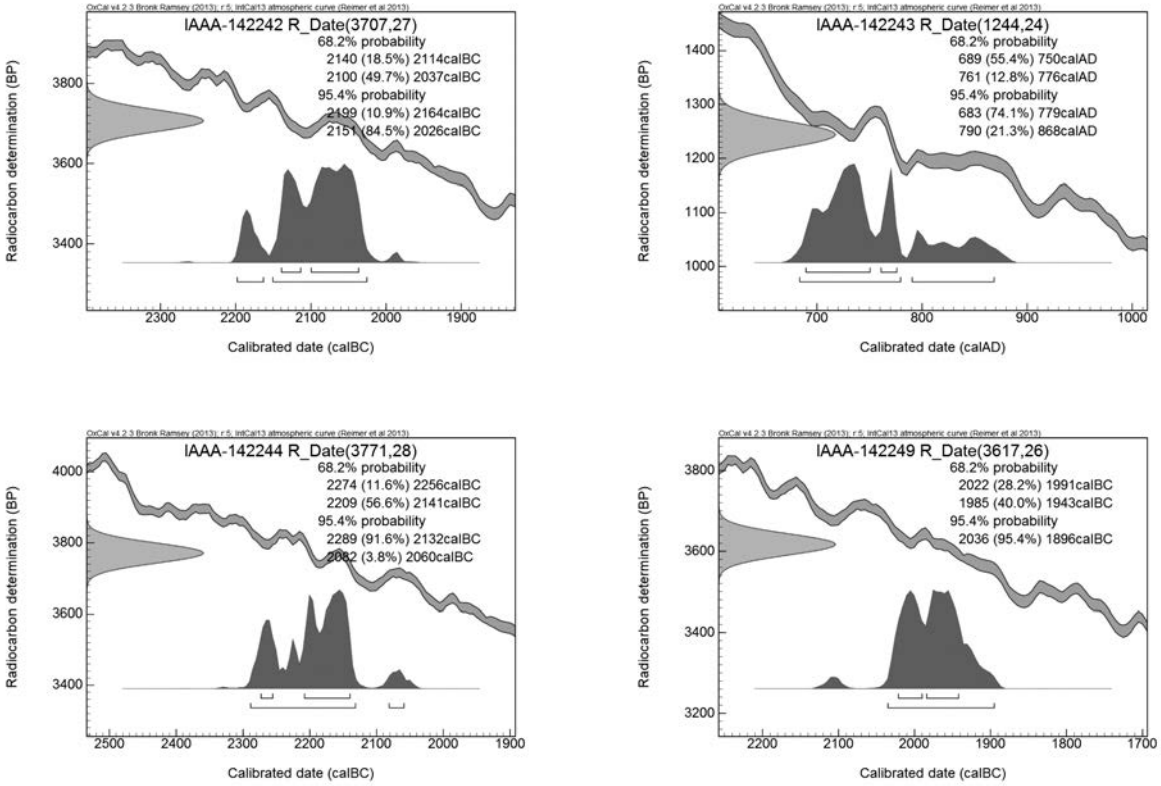
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C(‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-142242	1	SR11　土器内部の堆積土	炭化物	AAA	**-25.76 ±0.42**	**3,710 ± 30**	**63.04 ± 0.22**
IAAA-142243	2	SI23　カマド底面	炭化物	AAA	**-28.80 ±0.39**	**1,240 ± 20**	**85.65 ± 0.26**
IAAA-142244	3	SKF27　2 層	炭化物	AAA	**-25.78 ±0.41**	**3,770 ± 30**	**62.53 ± 0.22**
IAAA-142246	4	SKF30　底面	炭化物	AAA	**-26.58 ±0.40**	**3,690 ± 30**	**63.21 ± 0.22**
IAAA-142247	5	SKF36　17・18 層(最下層)	炭化物	AAA	**-25.41 ±0.64**	**3,720 ± 30**	**62.96 ± 0.23**
IAAA-142248	6	SK43　土坑内埋設土器内	炭化物	AAA	**-27.67 ±0.44**	**3,620 ± 30**	**63.70 ± 0.21**
IAAA-142249	7	SK47　埋土	炭化物	AAA	**-27.09 ±0.47**	**3,620 ± 30**	**63.74 ± 0.21**
IAAA-142250	8	SKP70　柱穴底面(柱根)	木片(生材)	AAA	**-26.91 ±0.53**	**1,270 ± 20**	**85.33 ± 0.26**

[#6997]

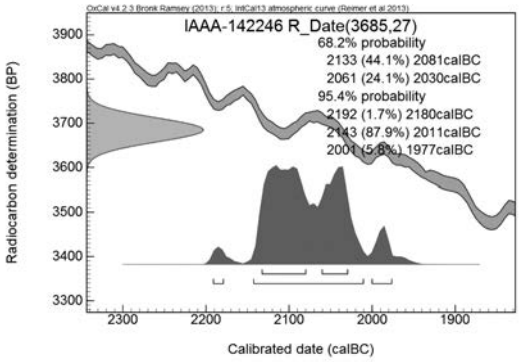
第15表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

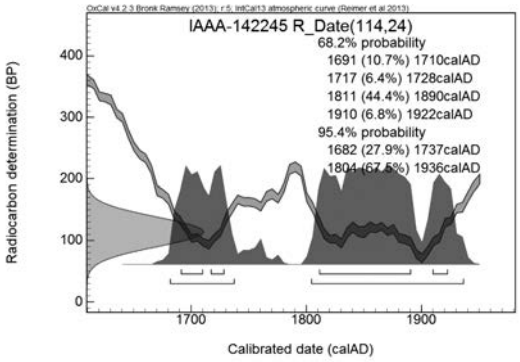
測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-142242	3,720 ± 30	62.94 ± 0.21	3,707 ± 27	2140calBC - 2114calBC (18.5%) 2100calBC - 2037calBC (49.7%)	2199calBC - 2164calBC (10.9%) 2151calBC - 2026calBC (84.5%)
IAAA-142243	1,310 ± 20	84.98 ± 0.25	1,244 ± 24	689calAD - 750calAD (55.4%) 761calAD - 776calAD (12.8%)	683calAD - 779calAD (74.1%) 790calAD - 868calAD (21.3%)
IAAA-142244	3,780 ± 30	62.43 ± 0.21	3,771 ± 28	2274calBC - 2256calBC (11.6%) 2209calBC - 2141calBC (56.6%)	2289calBC - 2132calBC (91.6%) 2082calBC - 2060calBC (3.8%)
IAAA-142246	3,710 ± 30	63.00 ± 0.21	3,685 ± 27	2133calBC - 2081calBC (44.1%) 2061calBC - 2030calBC (24.1%)	2192calBC - 2180calBC (1.7%) 2143calBC - 2011calBC (87.9%) 2001calBC - 1977calBC (5.8%)
IAAA-142247	3,720 ± 30	62.90 ± 0.21	3,717 ± 28	2192calBC - 2180calBC (8.2%) 2143calBC - 2121calBC (16.4%) 2095calBC - 2041calBC (43.6%)	2200calBC - 2031calBC (95.4%)
IAAA-142248	3,670 ± 30	63.35 ± 0.20	3,622 ± 26	2023calBC - 1948calBC (68.2%)	2114calBC - 2100calBC (2.4%) 2037calBC - 1905calBC (93.0%)
IAAA-142249	3,650 ± 30	63.47 ± 0.20	3,617 ± 26	2022calBC - 1991calBC (28.2%) 1985calBC - 1943calBC (40.0%)	2036calBC - 1896calBC (95.4%)
IAAA-142250	1,310 ± 20	84.99 ± 0.24	1,274 ± 24	687calAD - 721calAD (38.8%) 741calAD - 767calAD (29.4%)	675calAD - 771calAD (95.4%)

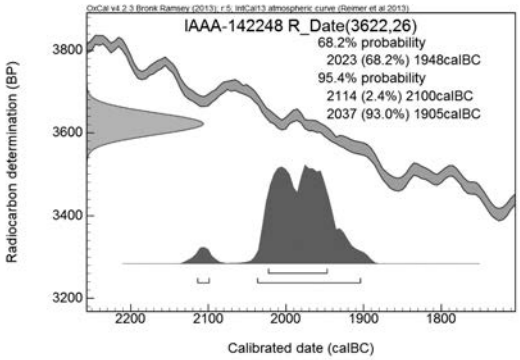
[参考値]

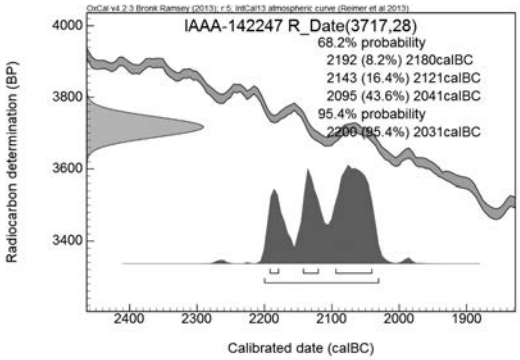


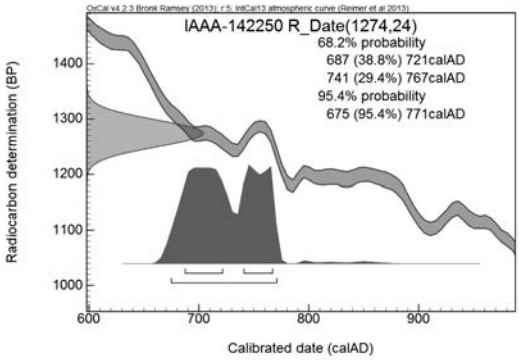
第47図　暦年較正年代グラフ（1）











第48図　暦年較正年代グラフ（2）

第5章　総　括

今回の調査では、遺跡名の由来となっている城館に関連する中世の遺構・遺物は確認されなかった。しかしながら、この時代の人々の活動の痕跡が調査区周辺で確認される可能性はまだ残されている。中世城館としての実態はつかめなかったものの、縄文時代と平安時代の遺構・遺物を検出することができ、そこからいくつかの特徴や課題等を拾い上げることができた。

１　縄文時代

縄文時代においては、早期・中期・後期・晩期に属する遺物が出土している。この中で人々が最も利用した時期は、出土遺物や遺構が最も多い縄文時代後期前葉であったと想定され、それ以外の時期の人々の土地利用は限定的なものだったと考えられる。以下において、それぞれの遺構のあり方や特徴から遺跡の性格を明らかにし、縄文時代の生活環境の復元を試みることにしたい。

（１）小型の土坑

本遺跡を特徴付ける遺構として、直径１ｍに満たない小型の土坑がある。これらは、一定の部位または形状を保った土器を伴うもの：ａ（７基）、伴わないもの：ｂ（４基）の２種類に大別できる。

埋土は、黒色シルトに若干の地山塊を含んでいる。人為堆積と考えられるが、地山の混入量が少ないのが特徴で、黒色土に地山が混入するのを極力避けている可能性がある。ａタイプの土坑の特徴として、一定の部位または形状を保った土器以外には遺物を全く含まない点があり、ｂタイプも、埋土に全く遺物を含まないといった特徴がある。ａに伴う土器を除き、両タイプの土坑が埋土に全く遺物を含まないことの理由としては、ア：小さい土坑のため、そもそも遺物が混入する確率が低い、イ：後期の中でも遺跡内において人々の活動が活発化していない古い段階に掘り込まれたものであるため、周辺に人為的遺物が少なく、埋土に遺物が混じる可能性が低かった等が考えられる。

ａ・ｂ２つの土坑は、土器の有無という違いはあるものの、一般的な土坑に比べ非常に小さく、同様の大きさや形態をもつという共通点がある。さらに、先述したように地山塊の混入量も同様である。以上から、２つの土坑は同じ性格のものと推測する。ａタイプに伴う土器内部に遺物が含まれない状況は、人骨が残存する土器埋設遺構の中に人骨以外の遺物が含まれないことが多いという各地の調査事例[註1]を考慮すると、土坑墓の可能性が高いことを示唆しているのではないだろうか。

（２）縄文時代の遺跡としての性格

①狩猟場

２基の陥し穴状遺構、狩猟用石器が少ない状況から、狩猟場として積極的に活用された痕跡は認められない。陥し穴状遺構については、２基とも形態や軸方向が同じことから、同時期に掘り込まれた可能性が高いと判断する。２つの遺構は遺構長軸線上に12ｍの距離で配置されているため、獲物が罠にはまる可能性はかなり低いと思われる。陥し穴への誘導施設等の存在を考慮する必要があるにしても、この場が狩猟場として重要視されていたとは考えにくく、また狩猟場として継続的に使用されることもなかったと考えられる。

②貯蔵場所

フラスコ状土坑が３基検出された。比較的大きな貯蔵穴と考えられるＳＫＦ36を除いた２つは小型のもので、埋土も異なり人為堆積の様相を示す。これに加え、本遺跡では土坑墓と考えられる小土坑が検出されていることから、２つのフラスコ状土坑は貯蔵穴以外の用途で使用された可能性がある。以上から、広範囲の調査で貯蔵穴が１基だけという状況であれば、貯蔵場としての利用も一時的なものであったと想定される。

③作業場

石器製作跡が１か所（ＳＸＱ34）で検出された。出土した剥片の石質や色の特徴から全て同じ母岩、一つの母岩からの剥片獲得作業に終始する内容であったことがわかった。この他に、調査区内から数点の石核が出土しているが、これらの石核に伴う作業場は検出されなかった。以上から、石器製作の作業場としての性格も、一時的あるいは断続的なものであったと想定される。

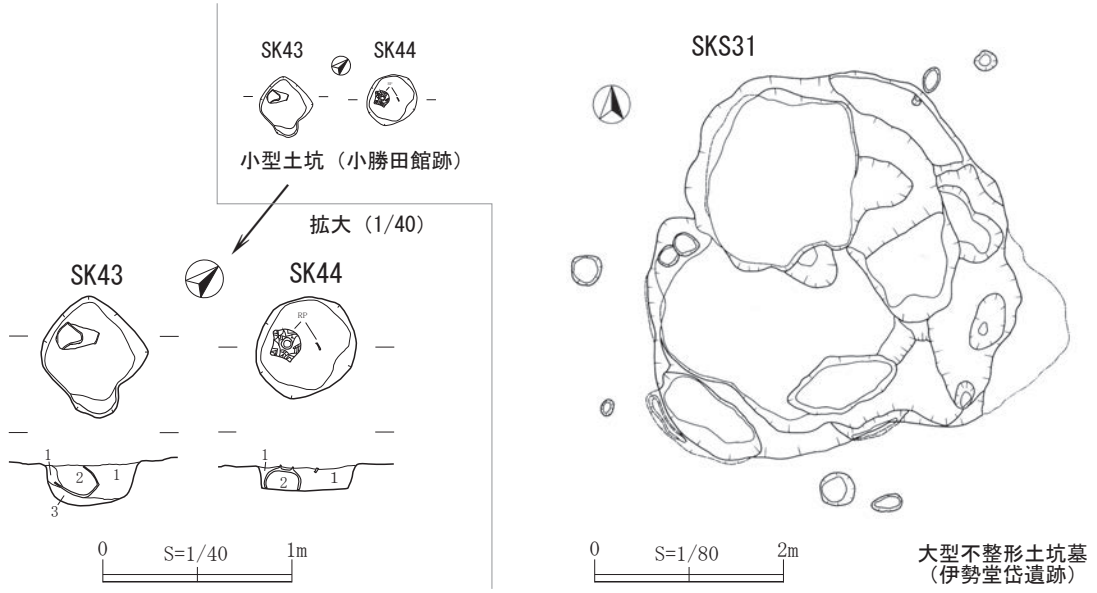
④墓域

ａ土器埋設遺構の特徴

３基とも小型の深鉢形土器を斜位に埋設したものであり、土器内部からの出土遺物はみられない。検出層位はⅡ層で縄文時代当時の地表面付近と想定されるが、土器はおおよその形を保っているため、本来は露出した状態ではなく、埋設時に土で覆うことによって保護されたものと推測される。遺構分布に規則性は認められないが、全てが調査区東側にある。

ｂフラスコ状土坑

本遺跡のＳＫＦ27・30フラスコ状土坑は伊勢堂岱遺跡の土坑墓ｂ類[註2]と規模・形状が類似するが、伊勢堂岱遺跡では、埋土に、いわゆる第二の道具や石器完形品をはじめとする豊富な遺物が認められるという違いがある。むしろ、このような伊勢堂岱遺跡の遺物出土状態に似ているのが、本遺跡ＳＫＦ36フラスコ状土坑である。第二の道具に加え、石器の完形品が出土している点が共通している。貯蔵機能としての一時使用の後に土坑墓へと転用された可能性が考えられる。



第 49 図　小勝田館跡と伊勢堂岱遺跡の土坑

⑤縄文時代の土地利用

以上、①～④の状況から、小勝田館跡は縄文時代各期を通じて、一時的または断続的な土地利用にとどまり、一貫して集落の周辺部に位置してきたことがわかる。ここで問題となるのが竪穴建物跡が立地するとみられる集落の中心部の位置である。後期前葉に時期を絞って、段丘崖の東側を除いた北・南・西の近接した３方向で可能性を検討してみる。先ず、西側の現水田部分からさらに西側の谷に至る範囲については、開田に伴い地山深く削平されたことが試掘調査で明らかになっているため、既に検証の余地は残されていない。しかしながら、今回の調査では相対的に見て西に向かうにつれ、遺物の出土量が多くなる傾向が確認できたため、遺跡の主要部が西側に広がっていたことだけは推測できる。南側、北側については小型の土坑や土器埋設遺構が分布することは想定されるが、近くに竪穴建物が立地する集落の存在を確信させる理由が見いだせない。北側については、調査区から台地の縁まで100m弱の平坦面があり、縁に立つと鷹巣盆地や白神山地が一望できる眺望に優れた場所であること、眼下に湯車川が流れていること等が地形上の優位点として注目されるが、風の影響を強く受ける場所であることが、集落の立地としては好ましくないように思える。南側については、伊勢堂岱遺跡との距離が近くなる分、遺物量が多くなる可能性はあるが、調査区境界部分においてはむしろ遺物の出土量は減少傾向にあり、東西方向の沢状地形も入り込むことから、そこに竪穴建物が分布する縄文時代の集落が形成されている可能性は低いといえる。以上から、今回の調査区に近接した区域で縄文時代の集落を想定するのは難しく、あえて可能性を求めるのであれば、本調査区から南側に離れた伊勢堂岱遺跡を目前とした谷を望む台地の縁辺部があげられる。

⑥伊勢堂岱遺跡との関係

ａ立地

本遺跡の性格を明らかにする上で、近距離にある同時期の伊勢堂岱遺跡との比較・検討は避けられない。２つの遺跡は同じ段丘面にあるが、高低差15mほどの浸食谷を挟んで向かい合う位置関係にある。伊勢堂岱遺跡の北西に位置する本遺跡は、大野台台地の先端部にあるため、米代川沿いに吹く西風の影響を強く受ける。特に冬型の気圧配置になると強い季節風に見舞われることを調査で確認している。一方の伊勢堂岱遺跡は、本遺跡が盾となるような位置関係にあるため、米代川沿いの強風や冬の季節風をまともに受けることがないという点においては、凌ぎやすい或いは過ごしやすい場所ともいえる。

ｂ対照的な遺構規模

伊勢堂岱遺跡をめぐっては、縄文時代後期において集落としても機能していたという論調もあるが、それを考慮しても基本的には環状列石を中心とした祭祀域・墓域という評価に変わりはないと思われる。墓域を構成する遺構として環状列石の他に想定されているのが、土坑や土器埋設遺構である。伊勢堂岱遺跡の土坑には形態上いくつかの種類があり、円形～楕円形といった一般的な形状のもの、袋状のもの、特定の場所に集中的に土坑を設けた結果形成された不整形の大型土坑等がある[註３]。小型の土坑に限定される小勝田館跡の状況とは全く異なっている。土器埋設遺構についても、伊勢堂岱遺跡が通常の大きさであるのに対して、本遺跡は先に指摘したとおり、小型のものが目立つ違いがある。このような対照的な様相をどのように捉えるのかが今後の課題である。大規模な墓域を有する遺跡に近接する遺跡を再確認することにより、周縁部の遺跡の特徴を見いだせる可能性がある。

２　平安時代

（１）柱穴様特殊ピット（ＳＸＰ24・70・73・97）について

特殊ピットとしたものは、柱を斜めに設置したと推測される遺構である。遺構壁面に柱の抜き取りによる乱れが見られないため、あくまで当初から斜めに掘り込まれ、そこに柱が挿入されたと推定できる。これと規模・形状が酷似した遺構が小坂町はりま館遺跡（Ａ区ＳＫ23ほか）、同町大岱Ｉ遺跡（ＳＫ30）で検出されている[註4]。これらの報告書では、縄文時代及び弥生時代の土坑として扱われているが、この中で弥生時代の竪穴建物跡を切るものが一例ある（はりま館Ｄ区ＳＫ93）。両遺跡は、平安時代の遺跡でもあるため、小勝田館跡における年代測定結果を勘案すると、これらの遺構は古代の所産である可能性が高いといえる。この遺構の性格については現在のところ不明であるが、分布密度が低く近接する例がないことから、単体で機能していたと想定される。「根入れの深さ」と「角度」が遺構の性格解明の手がかりになると思われる。

（２）竪穴建物の構造について　－特殊な柱配置と竪穴・掘立柱併用建物－

ＳＩ01とＳＩ23は、４基の主柱穴をもつタイプの竪穴建物跡であるが、１組（２基）が建物の中央部に、残りの１組（２基）が、竪穴の南辺（カマド付設辺）上に位置するという構造をとる。周辺地域で同じ柱配置をとるものとして、大館市の池内遺跡ＳＩ713竪穴建物跡がある[註5]。当該期は、壁柱穴、板材等による壁立ち構造をとる竪穴建物が多い中、特殊な構造といえる。

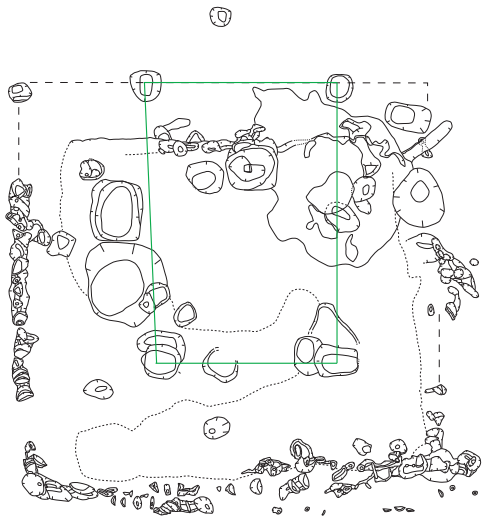
ＳＩ01については、南側に軸方向が一致するＳＢ40掘立柱建物跡が近接するため、２つの建物がセットになった、いわゆる「竪穴・掘立柱併用建物」とみられる。この種の建物については、髙橋学氏の論考があり、東北地方北部に多く本県では米代川流域に多く分布することを明らかにしている[註6]。本遺跡の周辺地域では、大館市の扇田道下遺跡で、この種の建物跡が多く検出されている。

（３）平安時代の集落としての存続期間と広がり

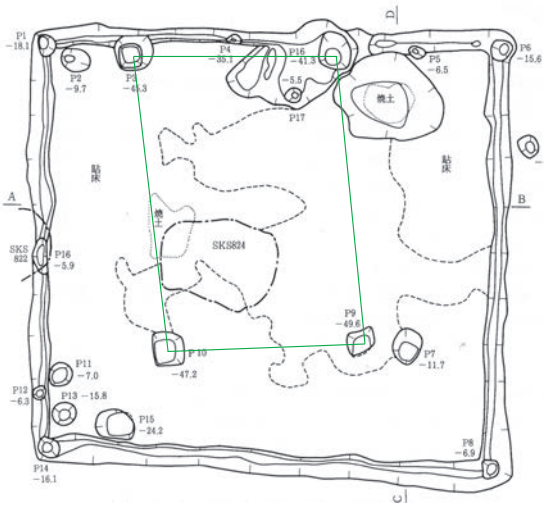
本遺跡は、平安時代のいつ頃に利用されたのか。これを明らかにするための方法として、周辺地域の遺跡から出土した古代の土器と本遺跡出土土器との比較を試みたい。

嶋影壮憲氏は、扇田道下遺跡の９世紀第４四半期～10世紀前半に属する平安時代の出土土器を２時期に分類している[註7]。土師器煮炊具の調整の変化については、ロクロ調整が見られる時期をⅠ期、ロクロ調整がほとんどなくなる時期をⅡ期とし、Ⅰ期を９世紀第４四半期から10世紀の初頭、Ⅱ期を10世紀の第１四半期から第２四半期としている。西に20㎞離れた本遺跡では、ロクロ調整の甕が比較的多く、須恵器は調査区全体で３点の出土にとどまる。本遺跡近辺すなわち大野台台地北端部の平安時代の遺跡において、ロクロ調整の甕が多く須恵器が極端に少ないという似た出土傾向を示すのが伊勢堂岱遺跡である。年代的には、十和田ａ火山灰降下前後（10世紀初頭頃）と見られている。これ以外の法泉坊沢Ⅱ遺跡、ハケノ下Ⅱ遺跡、脇神館跡等は、10世紀前葉・中葉以降の遺跡であり、ロクロ調整の甕はみられない。

以上、扇田道下遺跡や本遺跡周辺の遺跡の状況を勘案すると、本遺跡における平安時代の集落の存続期間は、９世紀後半から10世紀初頭（十和田ａ火山灰降下前）と捉えることができる。鉄滓等の製鉄・鍛冶関連遺物が全く見られないことも、米代川流域において製鉄が普及する前の集落ということで時期的に矛盾しない。また、須恵器が少ない点に関しては、五所川原産須恵器の流通が本格化する



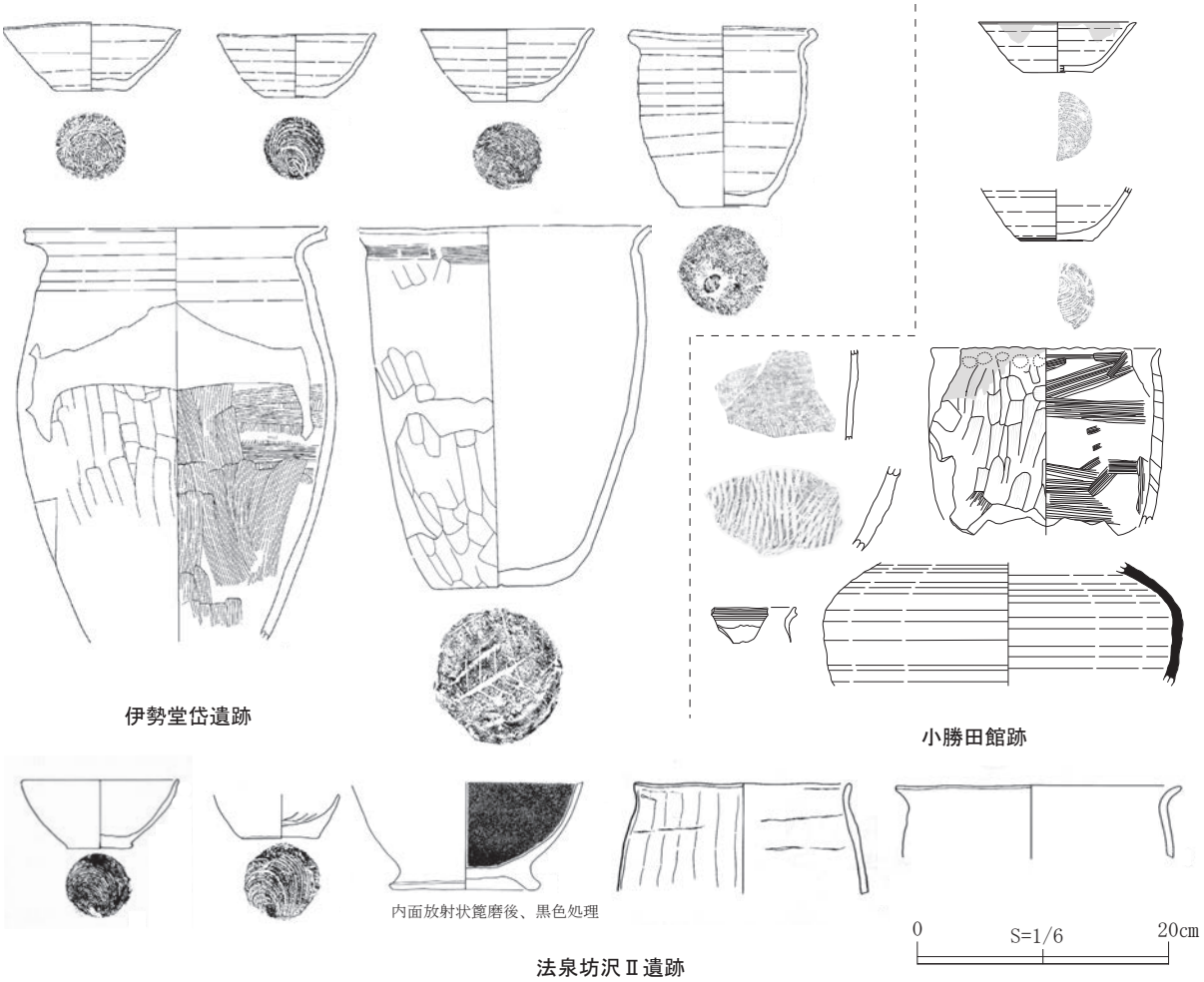
小勝田館跡　SI23



池内遺跡　SI713

0　S=1/80　4m

第 50 図　主柱穴配置の比較



第 51 図　各遺跡出土遺物

前の状況を示しているともいえるのではないだろうか。

（４）平安時代の人々の生業

炭化米は検出されなかったが、炭化したアワが１点、ＳＩ23のカマドから出土した。１点のみの出土であるため、資料の解釈については慎重な姿勢が求められるが、本遺跡は沖積地との高低差の大きい段丘上に立地することから、雑穀を主食としていた可能性も否定できない。周辺の近い時期の遺跡として、伊勢堂岱遺跡の他に、菅江真澄らが記録した小勝田埋没家屋がある。埋没家屋が見つかったとされる場所は、本遺跡から北東に500m離れた小ヶ田集落北のシラス段丘崖周辺である。本遺跡や伊勢堂岱遺跡とは異なり沖積地の遺跡である点が重要である。真澄と同時期に埋没家屋を記録した人物の一人である七日市村の肝煎長崎七左衛門の記録によれば、小勝田ではこれまでに34軒の埋没家屋が見つかっているとの記述がある[註８]。このことからシラス洪水以前、人々の多くは沖積地に暮らしていた可能性が高いことがわかる。ほぼ同時期に、台地上と沖積地という異なる環境に暮らしていた人々に生業の違いがみられるかが今後の課題である。

真澄のスケッチには、埋没家屋からの出土品である農耕具や紡織具が記録されており、低地に住んだ人々の生業を窺い知ることができるが、今回の調査で検出した遺構・遺物からは、台地上に暮らした人々の生業を復元することはできなかった。今後、埋没家屋の調査が行われ住居構造の詳細が明らかになる時が来れば、住居構造等の比較を通して台地上の集落の特徴が浮き彫りになってくるものと思われる。

註１　山田康弘 「土器棺墓（土器埋設遺構）」『季刊　考古学』第 130 号　雄山閣　2015（平成 27）年

註２　秋田県教育委員会 『伊勢堂岱遺跡 －県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』秋田県文化財調査報告書第 293 集　1999（平成 11）年

註３　註２に同じ

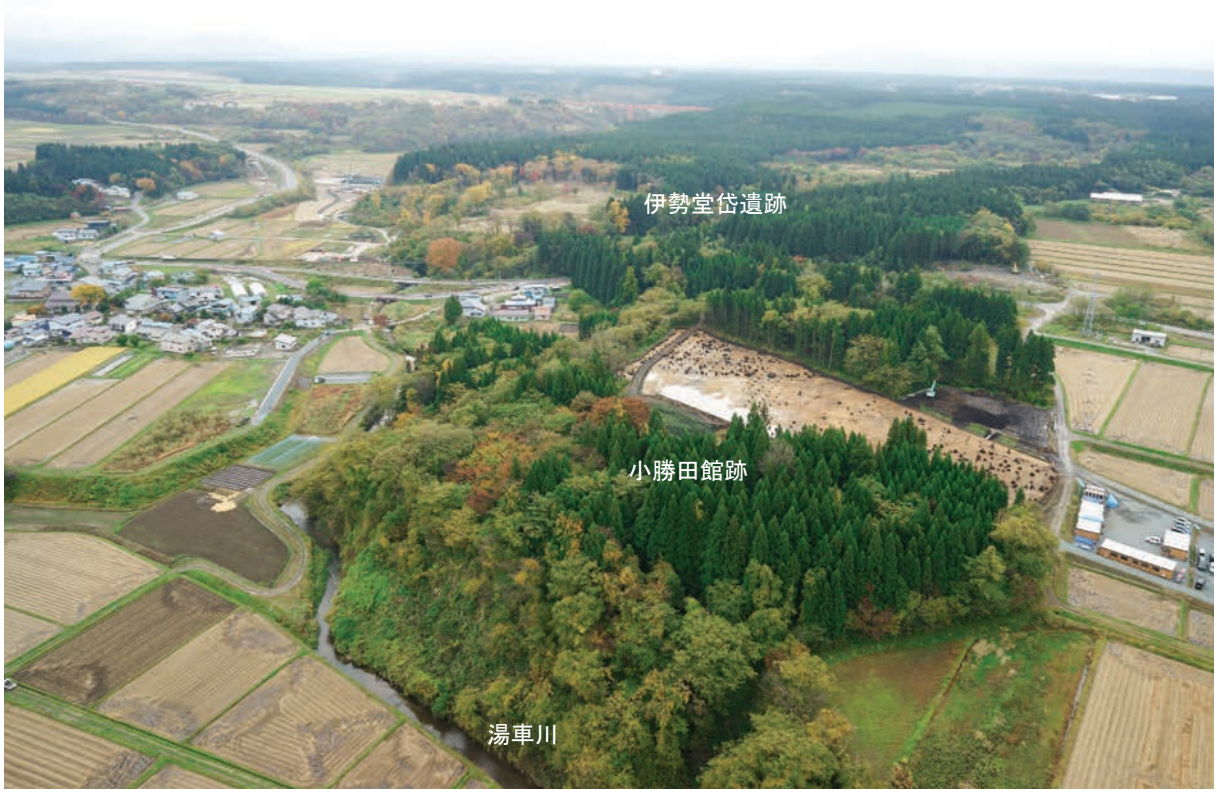
註４　秋田県教育委員会　『はりま館遺跡発掘調査報告書（下巻）－東北自動車道小坂インターチェンジ建設工事に係る埋蔵文化財調査－』 秋田県文化財調査報告書第 192 集　1990（平成２）年

註５　秋田県教育委員会 『池内遺跡　遺構篇 －国道 103 号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅷ－』秋田県文化財調査報告書第 268 集

註６　髙橋氏は竪穴部と掘立柱部の位置関係や付帯施設の有無により大きく３つに分けている。本遺跡の例は、掘立柱部がカマドが設置される竪穴壁面側に取り付くＨ１に相当する。他の２つについては、掘立柱部がカマドと反対側の壁に取り付くものをＨ２、９０°ずれ側面に取り付くものをＨ３としている。氏の統計ではＨ１が圧倒的に多いことがわかる。髙橋学 「竪穴・掘立柱併用建物」『季刊　考古学』第 131 号　雄山閣　2015（平成 27）年

註７　秋田県大館市教育委員会 『扇田道下遺跡発掘調査報告書』 大館市文化財調査報告書　第 268 集　2013（平成 25）年

註８　小猿部古文書解読研究会 『（１）古代の謎「埋没家屋」』秋田の古文書研究シリーズ　1993（平成５）年



1　小勝田館跡と周辺の様子（北西→南東）

2　小勝田館跡と周辺の様子（南西→北東）

図版2

1　掘り下げ前の状況（東→西）

2　調査終了状況（北西→南東）

1　SK03断面（南西→北東）

2　SK03完掘（南西→北東）

3　SK05断面（西→東）

4　SK05完掘（西→東）

5　SK18断面（東→西）

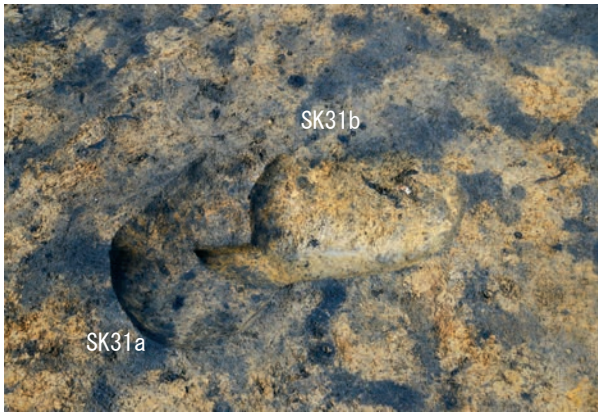
6　SK18完掘（東→西）

7　SK25断面（西→東）

8　SK25完掘（西→東）

1　SK31確認状況（東→西）

2　SK31断面（東→西）



3　SK31完掘（東→西）

4　調査状況（西→東）

5　SK35断面（南→北）

6　SK35完掘（南→北）

7　SK41確認状況（北→南）

8　SK41断面（北→南）

1　SK41完掘（北→南）

2　SK43確認状況（東→西）

3　SK43断面（南→北）

4　SK43完掘（南→北）

5　SK44確認状況（南→北）

6　SK44断面（南→北）

7　SK44土器出土状況（東→西）

8　SK44完掘（東→西）

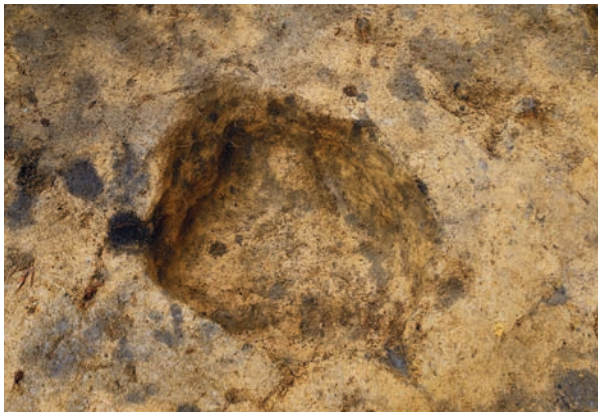
1　SK45確認状況（南→北）

2　SK45完掘（南→北）

3　SK46確認状況（東→西）

4　SK46断面（東→西）

5　SK46遺物出土状況（東→西）

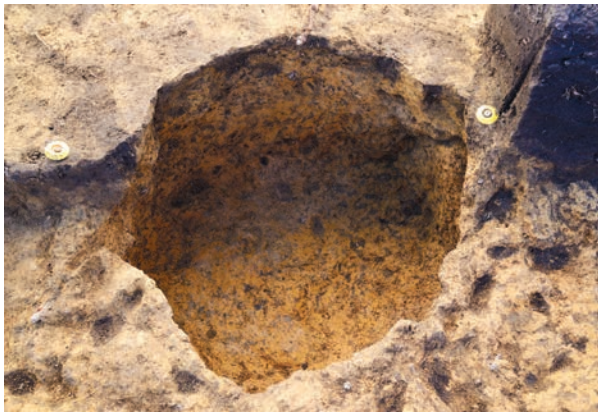


6　SK46完掘（東→西）

7　SK47断面（東→西）

8　SK47完掘（東→西）

1　SKF27断面（東→西）



2　SKF27完掘（東→西）

3　SKF30断面（東→西）

4　SKF30完掘（東→西）

5　SKF36断面（西→東）

6　SKF36溝断面（西→東）

7　SKF36完掘（西→東）

8　SR06確認状況（東→西）

1　SR06断面（南東→北西）

2　SR11確認状況（北東→南西）

3　SR11断面（北東→南西）

4　SR13確認状況（南西→北東）

5　SKT19精査状況（南東→北西）

6　SXQ34最下層（西→東）

7　SX07確認状況（南→北）

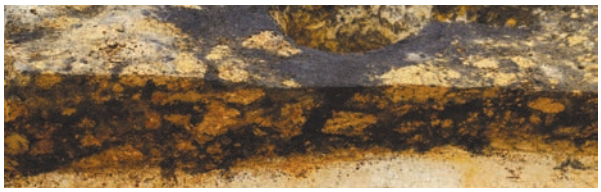
8　SX39確認状況（南→北）

1　SI01完掘（北→南）

2　SI01東西断面（北西→南東）

3　SI01カマド火床面（北→南）

4　SI01カマド断面（西→東）

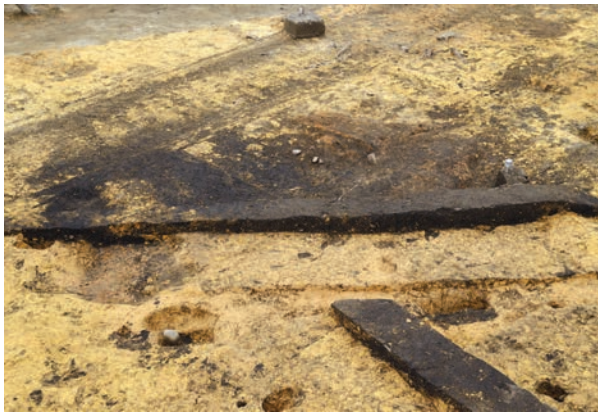


5　SI01貼り床断面

6　SI01壁板痕跡（北→南）

7　SI01壁板断面

1　SI23完掘（北→南）



2　SI23断面（北東→南西）

3　SI23カマド完掘（北→南）

4　SI23カマド出土遺物

5　SI23貼り床と工具痕

1　SI02確認状況(北→南)

2　SI02完掘(北西→南東)

3　SK10完掘(南→北)

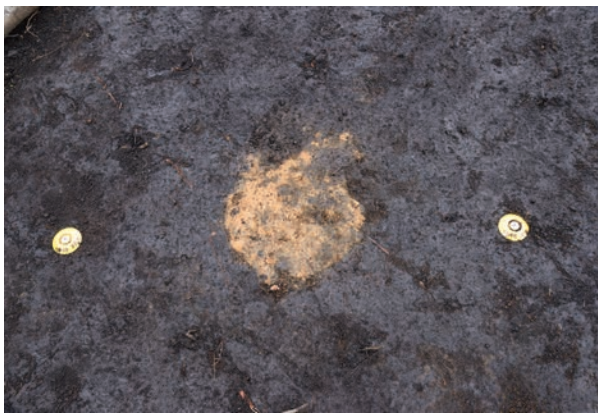
4　SK37完掘(北東→南西)

5　SXP24完掘(北→南)

6　SXP70断面(北→南)

7　SXP73断面(南→北)

8　SXP97断面(南→北)



1　SN04確認状況（南東→北西）

2　石篦出土状況（西→東）

3　石斧出土状況

4　土器出土状況（LE33）

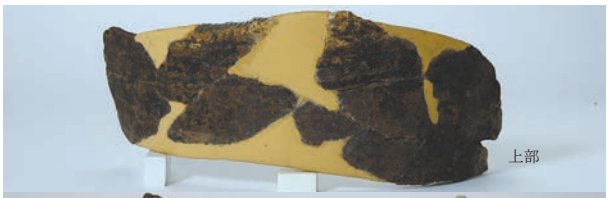
5　MKライン北側土層断面　第５図１-③（東→西）

6　LPライン土層断面　第５図４-①（東→西）

7　調査区東側土層断面　第５図７（南→北）

8　台地の縁に分布する芋貯蔵穴群（北→南）

第17図 1



第18図 1

第17図 2

第18図 2

第17図 4

第19図 1

第17図 5

第19図 2

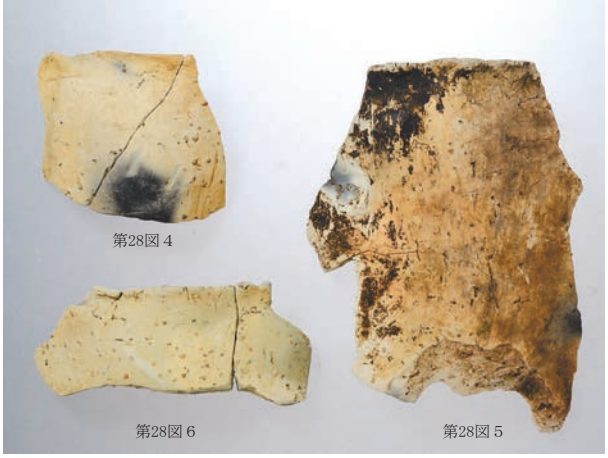
第19図３

第19図12

第19図13

第19図18

第28図 1


第28図 4
第28図 6
第28図 5

第28図 3

第29図 5

第29図 4

第29図 6

第29図 9

第28図７
第28図８
第28図９
第28図10
第28図12
第28図13
第28図14

第29図１
第29図２
第29図８
第29図７
第29図10

第31図３

第31図１

第31図２

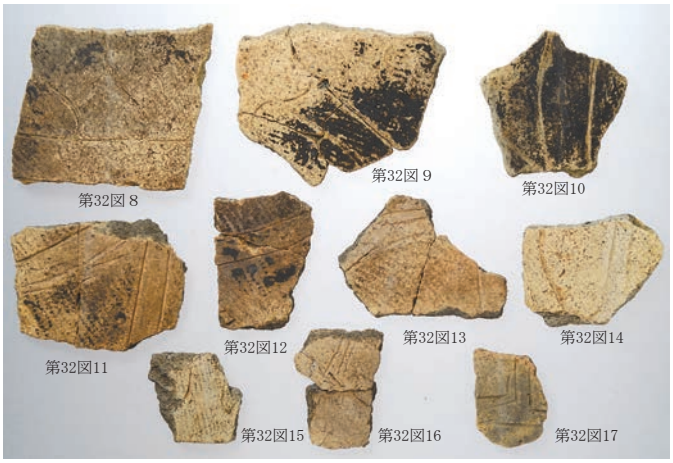
第31図４

第31図５

第31図６

第32図 1
第32図 2
第32図 3
第32図 4
第32図 5
第32図 6
第32図 7

第31図 7


第32図 8
第32図 9
第32図10
第32図11
第32図12
第32図13
第32図14
第32図15
第32図16
第32図17

第31図 8

第32図18
第32図19
第32図20
第32図21
第32図22
第32図23
第32図24
第32図25
第32図26
第32図27

第31図 9

第33図 1
第33図 2
第33図 3
第33図 4
第33図 5
第33図 6
第33図 7
第33図 8
第33図10
第33図11

第31図10

第33図12
第33図13
第33図14
第33図15
第33図16
第33図９

第36図12
第36図10
第36図11

第33図17
第33図18
第33図19
第33図20
第33図21
第33図22
第33図23
第33図24
第33図25

第36図13　表

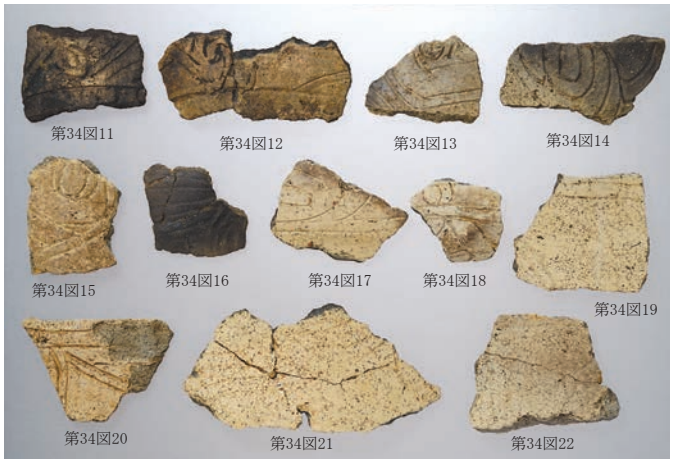
第36図13　裏

第33図26
第33図27
第34図１

第36図14　表

第34図４
第34図２
第34図３
第34図５
第34図６
第34図８
第34図７
第34図９
第34図10

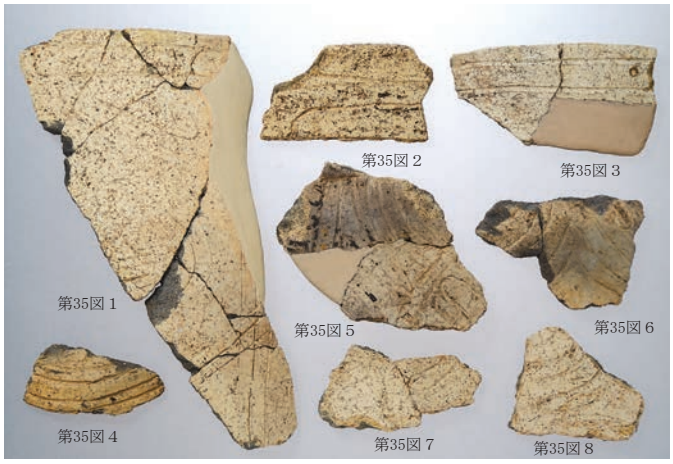
第36図14　裏


第34図11
第34図12
第34図13
第34図14
第34図15
第34図16
第34図17
第34図18
第34図19
第34図20
第34図21
第34図22

第36図15　上

第34図23
第34図24
第34図25
第34図26
第34図27
第34図28
第34図29
第34図30

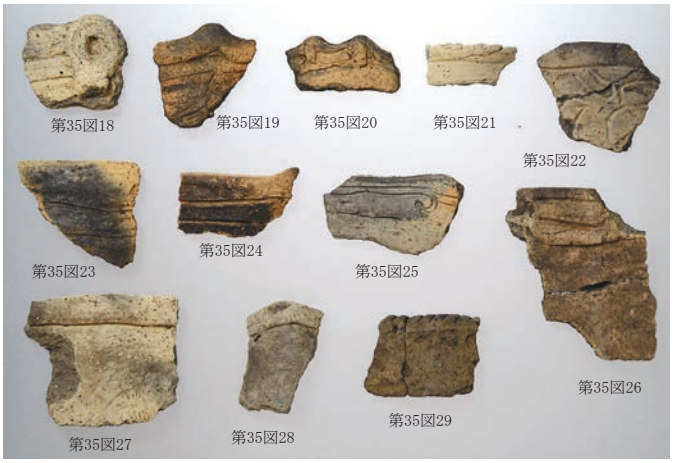
第36図15　横


第35図 1
第35図 2
第35図 3
第35図 4
第35図 5
第35図 6
第35図 7
第35図 8

第36図16
第36図17
第36図18
第36図19
第36図20

第35図 9
第35図10
第35図11
第35図12
第35図13
第35図14
第35図15
第35図16
第35図17

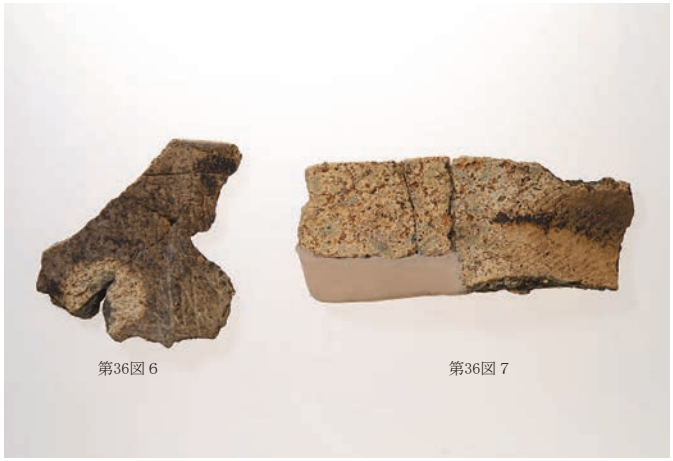
第36図21
第36図22

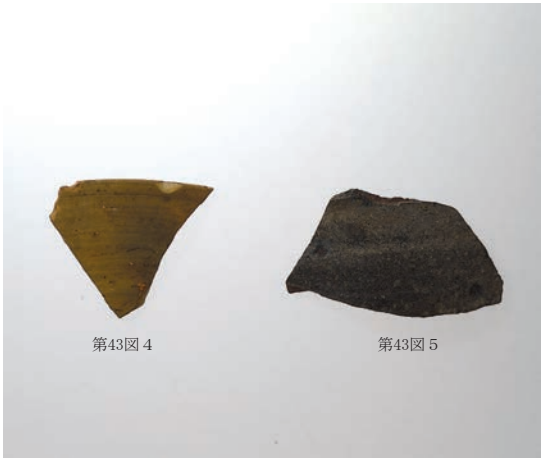

第35図18
第35図19
第35図20
第35図21
第35図22
第35図23
第35図24
第35図25
第35図26
第35図27
第35図28
第35図29

第43図 2

第36図 1
第36図 2
第36図 3
第36図 4
第36図 5

第43図 3


第36図 6
第36図 7


第43図 4
第43図 5

第43図 1

第43図 6
第43図 7

第37図 1
第37図 2
第37図 3
第37図 4
第37図 5
第37図 6
第37図 7
第37図 8
第37図 9
第37図10
第37図11
第37図12

第40図 1

第40図 2

第38図 1
第38図 2
第38図 3
第38図 4
第38図 5
第38図 6
第38図 7
第38図 8
第38図 9

第41図 6
第42図 1

第39図 1
第39図 2
第39図 3
第39図 4
第39図 5
第39図 6

第42図 2
第42図 3

第41図１
第41図３
第41図２
第41図５
第41図４

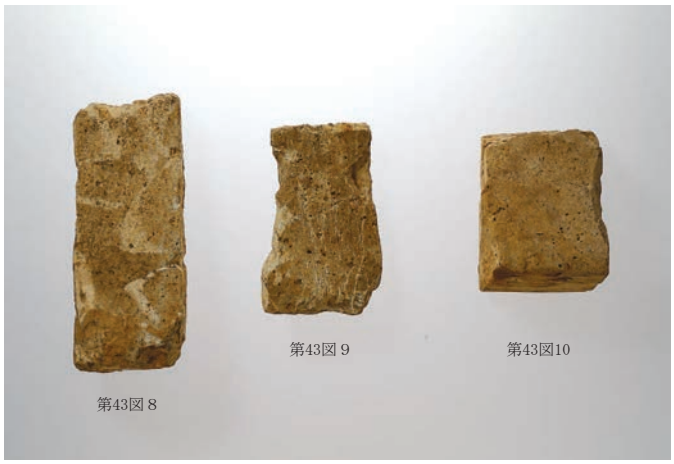
第42図４
第42図５

第42図６
第42図７

第43図11

第42図８
第42図９

第42図10


第43図９
第43図10
第43図８

第42図11

報　告　書　抄　録

ふりがな	おがただてあと
書名	小勝田館跡
副書名	地方道路交付金事業(改築)一般県道大館能代空港西線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第500集
編著者名	袴田道郎　関向昌之　高橋忠彦　村上義直　山田祐子
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　TEL　0187－69－3331
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010－8580　秋田県秋田市山王３丁目１番１号　TEL　018－860－5193
発行年月日	西暦 2015年９月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おがただてあと 小勝田館跡	秋田県北秋田市 脇神字館野 22ほか	05213	213—11—55	40° 12′ 22″	140° 22′ 38″	20140526 ～ 20141107	11,000	地方道路交付金事業(改築)一般県道大館能代空港西線に係る埋蔵文化財事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
小勝田館跡	墓地	縄文時代	土坑	12基	縄文土器	
	貯蔵場所		フラスコ状土坑	３基	石器	
	狩猟場		土器埋設機構	３基	土製品	
			陥し穴状遺構	２基	石製品	
			溝状遺構	１条		
			遺物集中地点	３か所		
	集落跡	平安時代	竪穴建物跡	３棟	須恵器	
			掘立柱建物跡	１棟	土師器	
			土坑	２基	土製品	
			特殊ピット	４基	石製品	
		時期不明	焼土遺構	１基		
			柱穴様ピット	96基		

要約

縄文時代の墓域と平安時代の集落跡。縄文時代は、後期前葉を中心に墓域として利用されながらも時に貯蔵域、狩猟域としても利用されたことが判明した。小型の土坑・土器埋設遺構は墓として利用された可能性が考えられる。平安時代は、出土遺物と火山灰の堆積状況から、西暦915年の十和田火山の噴火前の集落であることが判明した。大野台台地北端部の平安集落は噴火後のものが多数を占める中、噴火前の人々の暮らしを伝える貴重な例である。

秋田県文化財調査報告書第500集
小　勝　田　館　跡
－地方道路交付金事業（改築）一般県道大館能代空港西線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成27年９月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802　大仙市払田字牛嶋20番地
電話（0187）69－3331　FAX（0187）69－3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580　秋田市山王三丁目１番１号
電話（018）860－5193